
砂塵夢想譚

くまミニ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

砂塵夢想譚

【Nコード】

N9837U

【作者名】

くまミニ

【あらすじ】

砂の海は夢幻を育む。懐には扉を隠し、大地は翡翠の指を伸ばす。銀と黄金は使者を送り、鍵は巨木を頭上に仰ぐ。“それは、一つの世界の始まり”・・・本作品は休止中のサイトからの転載です。

第一章 鮮赤の風

強烈な日差しが脳天を貫く。

黒いまでの青天井には、ここ数ヶ月の間、微かに棚引く雲一つ見えず、ただ乾いた風だけが、くすんだ町並みの中を駆け抜けていた。半ば崩れた建物の下で、一人の少年がそんな天蓋を見上げながら露骨に顔を顰めていた。

「これじゃ、さつさと始末しねえとな」

生まれてから一度も櫛など通したことのない乱れた黒髪をした少年は、そう呟くと舌打ちをした。

この地の十四歳にしては背が高く、こびりついた血痕と砂粒で赤黒く汚れた衣服からは、既に青年のような逞しい腕が覗いている。

「アル……！」

抑えられた囁きと共に、突然、ビルの影から少年が飛び出してきた。

アルと呼ばれた先程の少年は、澄んだ鳶色の瞳を>俊足くの口ムに向けて、軽く頷いてみせた。

「この奥なんだな？」

「うん、そうだよ」

心からの尊敬に満ちる瞳が、自分達の統率者を見上げる。

アルもお気に入りの少年の肩に手を置くと、二人は汚物が悪臭を放つ狭い路地へと入っていった。

酷く汚れた壁も、吐き気をもよおす臭気も、彼らには特別なものではない。

物心がついた頃から今迄、アル達はこのような環境でしか育つてこなかったのだ。

この街に来たのは一年程前のことだが、辺りはどこも同じ状況だ。最早自分の庭となっている袋小路の奥には、だが今は、昨日まではなかったものが無造作に棄てられている。

いや……ある意味では、それこそ棄てるほどに見てきた『物』の一つだ。

アルは無造作に道の上に広げてある鉄板を取ると、その下に隠されていた『物』を目にして軽く鼻で笑っていた。

そこには、自分達の仲間だった少年が横たわっていた。

胸には幾つかの銃痕が見えており、既に激しい日射で乾いてしまった赤い血が辺りにその滲みを広げている。腕が本来曲がるはずのない所で折れ曲がっていても、顔色一つ変えずにアルはロムに言った。

「夜中に殺られたんだな？」

「うん」

まだ幼い 俊足の ロムも、声を震わせることは無い。銃による《死》の恐怖など、最早恐怖とも思わない。

アルはその返事に頷くと、足下に落ちていた小さな袋を靴で踏み躪っていた。

「新しい薬に誘われやがったな。俺が許可する量で、満足してればいいものを」

透明な袋が破れ、白い粉が路面に散る。

だが、それはすぐさま風に運ばれ、空中へと溶け込んでしまった。
「ロム。マークを呼んで来て始末させろ。ここに残すと迷惑だからな」

「うん！」

少年が素早くその場を立ち去ろうとした瞬間、二人の背後から高らかな嘲笑が広がった。

「これはこれは。この街を牛耳る 鷹 が、丸腰で来るとは思わなかったぜ」

ロムが驚いて振り返る横で、アルは落ち着いた表情のまま、肩を竦めてみせた。

「そっちこそ、何処の街から流れてきやがったんだ。」

この様子じゃ、そのまま通り過ぎるつもりも無さそうだな」

鳶色の瞳が、鋭く細められる。

全く感情も見せず、ただ眼光だけが自分を刺し貫く。最初に身を現した相手は思わず息を飲み、知らずたじろいってしまった。

アルとロムの前には、今や十数人の若者が歩み寄り、群れている。中には、早くもナイフを手にしている者もいる。

その集団の先頭に立った若者は、体格はともかく年齢では下のアルを見て、不自然に声を強めて動揺を押し隠すと告げた。

「当然だ。今日からこの街は、俺達のもんだぜ」

「無理だな。」

お前らのようなガキに、この街が治められるかよ」

アルの平然とした応えに思わず拳を固めたが、若者は怒りを抑えると、笑みを浮かべて見せた。

「へっ！ この状況でまだ強がつてられるのか。」

さすが…というより、バカだな。おい！」

仲間に軽く合図をすると、内の二人が黒い銃身を掲げ、アルとロムに向けた。

「そこに転がった中毒バカみたいに、ぶち抜いてやろうか」

その言葉を聞くや否や、不意に高らかとアルは笑い出していた。

「たったそれだけの銃で、何をするつもりだ？ え？

だから、お前らはガキなんだよ！」

「何？」

いきり立つ若者の前で、黒髪の少年は右手を静かに払ってみせた。直後、前後左右の建物の影から、十数丁の銃口が覗く。

驚愕の面を見せる相手を、アルは悠然と見下ろしていた。

「俺が、全く無防備で畏にかかると思ってたのか。」

こんなあからさまな挑発、どんな赤ん坊でも警戒するぜ」

そう話しながら、計画通りに配置を伝えてくれた 俊足 のロムの頭を撫でてやる。彼はその自慢の足を活かして、見事に仲間を集めてくれていたのだ。

「くっ…」

若者が悔しそうに顔を歪めている。

今や、勝利した者の立場から、アルは命令していた。

「さっさとこの街から出て行くんだな。」

いくらバカでも、これだけの銃を相手に、たった二丁で立ち向かうほどじゃねえだろう」

「……街を出るまで、襲うなよ」

低く押し出されたその言葉を、アルは鼻で笑い飛ばしていた。

「随分、虫のいい申し出だな。」

まあ、いいさ。さっさと消えろ！」

急いで路地を逃げ出す若者達を、剥き出しの哄笑が追いかける。

その笑いの主達は、次々に姿を現すと、彼ら敗北者の群れを見送っていた。

「ちえっ！ 今度も使えなかったじゃないか」

中の一人、ロムと同じ年頃の少年が、銃を手にながら不満気に呟いている。

その言葉に、別の少年が揶揄するように応えていた。

「お前、昨日あの若造に撃ってたじゃねえか。あいつ、暫く動けないらしいぜ」

同い年のマークに後始末を頼んでいたアルは、その会話を耳にすると厳しい顔付きで二人に近付いていった。

冷たい鳶色の瞳に捕らわれ、銃を手にした少年は胸倉を掴まれると、声一つ出せずに震え出していた。

「いいか。俺の許可無しに人を撃つんじゃない！」

ここを追い出されたら、数十キロは歩くんだぞ。やり過ぎたら、次は俺達が街の連中に笑われて出て行くことになるんだからな！」

「いいじゃない。あんたもこの子と同じくらいの時には、銃で遊んでたんだからさ」

一人の少女が、怒るアルの腕を取る。彼はそれに逆らいはしなかったが、瞳だけは少年から動かさなかった。

「いいか。あいつみたいな死に方をしたくなけりゃ、俺の言うこと

を聞け。

俺は、従う奴には犬死なんかさせないからな」

「あう、あう……」

がくがくと、ただ首を縦に振って怯えている少年を突き放すと、アルは視線を少女に向けた。

「エヴァ、お前もこいつらに構いすぎるなよ」

「二人きりになれるなら、考えてあげるわ」

アルは小さく舌打ちすると、ロムを呼んだ。

すぐに駆け寄ってくる十歳の少年に、彼は絶大な信頼を籠めて命じていた。

「いいか、あいつらが街を出るまで監視しろ。三人連れて行け」

「うん！」

嬉しそうに走り出している。

仲間に声を掛けながら、3つの影と共に街角の向こうへ消えたかと思うや否や、再びロムだけが現れると、アルの許まで駆け戻ってくる。

「どうした？」

この少年は、余程のことが無い限り、命じられたことを途中で無視したりはしない。

それをよく知るアルは、ロムに語調も柔らかく尋ねていた。

「軍隊だよ。もう、中に入ってきてるみたい」

誰からの報告かなど、告げたりしない。それだけ緊急で、かつ正確な情報なのだ。

ロムの言葉に、黙ってアルが右手を挙げる。

すぐさま、マークとロムを除く皆が、街のあちこちに広がる暗闇の中へと姿を消した。

見事な統率だ。

アルは振り返ると、物静かだが、いざとなれば自分を凌ぐほどの力を発揮するマークに言った。

「先の三人と一緒に、あのガキ達を監視してくれ。」

軍は俺とロムが見てこよう。何かあった時には、ロムを送る」

「…よし」

直後、三人はそれぞれの方角に向かって散っていた。明るい日差しが、痛みを伴う強さで大地に降り注いでいる。その鋭い腕は、ビルの間の狭い路地にも入り込み、横たわったままの少年だったものを白々と照らし出していた……

「あんな潰れかけのホテルに、何の用だ？」

訝しげに声が漏れる。

表通りを覗くアルの背後では、俊足のロムが見張りをしていた。

豊かな北方を目指す船が立ち寄ることはあるが、この街は飽くまでも通過点でしかない。この地で宿泊する者など、殆ど皆無なのだ。確かに、数日前から誰かが泊まっているとは聞いていたが……

「本格的だね」

ロムの囁きに、アルは黙って頷いていた。

表通りに立つ兵士は五人。いずれもが銃器を構えている。アル達が身を潜めている、ホテルの向かいの建物にも数名、裏手にも何人かの兵士が回り込んでいるようだ。

既に、ホテルの中にも入っている。

ここまでの人数を使って、こんな街で何をするつもりなのか。

自分達の掃討が目的ではないようだが、かと言って、安心できる状況でもない。目的など、その場ですぐに作り出せる。

アルはロムに合図をすると、単身、別の筋を回ってホテルの裏側へと向かった。

汚れた壁には各部屋のバルコニーが並び、貧弱ながらも植栽のある庭を見下ろしている。

その裏庭に身を潜めた直後、初めて、銃声が響き渡った。

同時に、激しく争う音がホテルの一室から漏れ出してくる。だが、アルはその場から動かず、静かに見守り続けていた。

アルにしてみれば、中で行なわれていることの原因や結果などに興味は無い。軍の目的がホテルの滞在者なら、その者だけを始末してさっさと街から出て行つて欲しい…場合によっては、毛嫌いしている軍を手伝つても構わない。勿論、そうなつても姿を見せるつもりは無いが…

いずれにしても、まだ動く時ではない。

そう思っていた矢先に、突然、硝子窓が突き破られた。

…驚いたことに、そこに現れたのは一人の少女だった。

アルよりは、少し年下になるだろう。北部で育つたらしく、この灼熱の炎天下にいなながらも、その腕は白く透き通るような色を残している。アルの目には、それは柔らかな光を発しているかのように見えた。

アルが見守る中、黄金色の長い髪をしたその少女に続いて、男が飛び出してくる。男は少女の背を押しながら、バルコニーから下へと飛び降りるように指示しているらしい。

二人がいるのは二階だが、少女は迷わずその指示に従おうとした。だが、次の瞬間、アルのすぐ傍で銃声が轟いた。

身構えるアルの目には、のけ反る男の姿が見えている。同時に、少女の悲鳴がアルの胸を貫いた。

「パパ！」

男は鮮赤で胸元を染めながら、庭の中へと落ちていく。

狙撃された者を見ることは珍しくなかったが、何故かアルの心は強く締め付けられていた。少女の泣き叫ぶ声を聞くにつれて、痛みが鋭く胸中へと食い込んでくる。

手摺りから身を乗り出していた少女は、部屋から現れた兵士によって首筋に何かを突きつけられ、その場で膝を折ってしまった。

思わず飛び出したくなっている自分に驚き、そんな動きを抑えながら、アルは静かにその場を眺め続ける。

男の死は、重要ではなかったらしい。生死を確かめもせずに、軍は表通りに集まり始めている。もはや警戒していないところを見る

と、標的はこの二人だけで、彼らには他の仲間もいなかったようだ。周囲の安全と集まった兵士の人数を確かめた後、アルはその場を離れロムの所へ戻っていた。

だが、すぐに二人して再び裏庭まで回り込むと、アルはロムに小さく指示をした。

「ここで見張ってる。ちよつと、死体の息を確かめてくる」

「うん」

ロムをその場に残し、アルは素早く庭の中へ忍び込んだ。

手入れなど殆どされない乾いた草の間に、男が仰向けになって転がっている。胸元を赤くしたその男の姿を、漸くアルは冷笑と共に見下ろすことが出来るようになっていた。

少女の声に動揺したことなど無かったかのように、鳶色の瞳は金目の物や軍にとって不都合なものが無いか探し始めている。

だが、次の瞬間、流石のアルももう少して声を上げるところだった。

死んだと思っていた男の手が、足首を掴んでいるのだ。

男は最早見えていないはずの目でアルを探し出すと、言葉を押し出していた。

「あの子を……デーズィアを……」

真っ直ぐに、血に濡れた瞳が見上げてくる。

アルは強く唇を噛みながら、それでも視線を逸らさずに見返していた。

「助け……て……」

…吐き出せた言葉は、そこまでだった。

「…チッ！」

二度と動かなくなった男の手を振りほどこうと、アルは死体を蹴り飛ばしていた。

死体は、乾燥した茂みの向こうに隠れてしまう。

アルはその草陰を暫く黙って見ていたが、やがて自嘲気味に呟いていた。

「軍相手に、何ができる…実際、お前だって何もできなかったじゃねえか。」

…だがな、やりもせずに諦めるのも、俺らしくないんでね。

まあ、そこに転がって見ててな」

アルは足早にロムの元へと戻ると、短く告げた。

「軍を追うぞ」

心から敬服している 鷹 の言葉に、理由など問いもしない。

すぐに表に出ると、軍が立ち去った方角を確認する。その間に、

アルは近くに潜んでいた別の少年を呼び出すと、引き続いて警戒するように皆に伝えさせた。

「…アル」

忠実な少年の囁きが耳に届く。

アルが表通りに戻ると、ロムはすぐに現れた。

「軍の奴ら、港に向かったらしいよ」

「そうか。すぐに出るつもりだな」

（略奪もしないのか…）

こんな辺境まで来て、何もしない方が不気味に思える。

あのデーズィアは、それ程まで重要な人物なのだろうか……

アルは深く思考の泉に沈み込みながらも、俊足のロムと共に港へと走り出していた。

風が唸りを上げている。

立ち並ぶ倉庫群の影から顔を覗かせた瞬間、アルの目には一面に広がる砂の海が飛び込んできた。

細かな砂粒が、風と陽光を受けて絶えずその輝きを変えている。

蒼い天穹には黄色い川が時折渡り、街の中へと不快な浸入を試みていた。

「あれは…」

『海』を見ていたロムが、不意に息を飲む。その視線を追うと、アルは思わず舌打ちをしていた。

砂の海の中に、細長く茶色い物体が半ばその身を沈めている。その巨大な物体の先端へと、小さな砂舟すなふねが黄色い粒子を撒き散らしながら近付いていた。

「潜砂艦せんさかんか…」

滅多に見られるものではない。どころか、耐久性の問題で、確かまだ実用化されていなかったはずだが…

アルは呪いの言葉を吐きながら、それでも少しずつ船の方へと近付いていた。

潜砂艦に向かう砂舟には、確かにあの少女のものらしい黄金色の煌きが陽光に映えている。

その輝きを目にした途端…アルの胸中に、先程の鋭利な痛みが再び走っていた。

だが…あの巨大な船に対して、一体、何が出来るというのか。

そうは思いながらも、鳶色の双眸は波止場に舫つてある幾つかの小舟の上を彷徨っていた。

決して、諦めたりはしない。やると決めたことは、必ず果たしてみせる。

それがアルの生き方だった。そうすることで、今迄多くの仲間を守り通してきたのだ。

勿論、慎重な選択と、刃向かう者への容赦の無い厳しさを伴っているのだが…

「アル！」

抑えた叫び声が耳朶を打つ。ロムの警告に、すぐにアルは視線を潜砂艦に戻っていた。

遠ざかる砂舟の上で、透き通るような金髪が激しく揺れている。予定よりも早く目が覚めたらしい。

その少女が立ち上がるうとしている。直後、思わずロムが小さく悲鳴を漏らした。

少女が、船外に振り落とされたのだ。

小さな姿は、吹き上げられた砂粒で瞬く間に覆われていく。

急いで空気の噴射を止め、砂舟の兵士達が少女を引き上げようとしている後ろで、今度は潜砂艦の方でも慌しい動きが見られた。アルも素早く海を見渡す。甲板に出ていた兵士も目視で確認したようだ。

遠くに一隻の大型船が見えている。この港を目指しているらしい。外来船だ。

連絡が入ったのだろう。小さな砂舟が躊躇するように揺れ動いている。

潜砂艦と少女と……どちらを優先する……？

指示を待つて動きを止める兵士の様子に、アルはすぐさまロムに命じた。

「いいか、クラウドの所に行って、患者を追いつ出しておけ。急患が入るんだ、ってな」

「うん」

心配そうな目をしながらも、ロムは何も言わなかった。

そんな少年の頭を軽く撫でると、笑ってみせる。アルの笑顔に安心すると、少年は瞬く間に街の中へと消えてしまった。

「さてと……まあ、やってみるさ」

迷いは隙を生む。流れを掴み、流れに乗り、流れと共に去ることが勝敗の分かれ目だ。

目を付けていた砂舟に素早く飛び乗ると、予てから用意していた合鍵ばかりの鍵束を使って簡単にエンジンを動かしてしまう。

近付くだけでも、命を狙われるだろう。潜砂艦にしても、あの少女にしても、機密には違いがないのだから。だが、あの他国の客船が港を去るまでは猶予がある。

「俺としたことが……深みにはまっちゃったな」

激しく空気を下方に噴射しながら、浮き上がる砂舟の中でアルは呟いていた。

守るべき仲間が多い。だが……今からは、自分は、その役目を果たせないかも知れない……

逃れられない蜘蛛の巣に向かって走り込んでいることを知りながら、それでも、アルは舐先を真っ直ぐ、少女から逸らしはしなかった。

潜砂艦の前方で、海が窪み始めている。砂を吸い込み始めているのだ。

「潜行するのか」

砂舟の兵士達は、大きくうねる砂の上から、沈んでいく少女を引き上げようとしているが未だ果たせていない。

アルが巧みに少女の傍まで舟を近づけると、それに気付いた兵士の一人が銃を構えた。

「近寄るな！」

だが、アルは動じることなく、叫び返していた。

「その子を助けてやるぜ！ 任せときな」

生まれた時から海に親しむアルにとっては、造作も無いことだ。

「何を！」

怒鳴る兵士を、だが一人の男が遮る。

口髭を蓄えたその男は、栗色の短髪の下、黒縁の眼鏡越しに冷たい視線をアルに向けた。

（うつ…）

背筋に、思わず緊張が走る。冷酷な思考が瞳を貫く…

だが、それでもアルは澄んだ双眸を辛うじて逸らさずにいた。

「…いいだろう。後で、受け取りに行こう」

抑揚の無い声が滑る。

次にはその男の合図で、砂舟は沖合いを目指して急ぎ去っていった。

潜砂艦も、ほぼその巨体を砂に埋めてしまっている。

軍と、自分自身に対しての嘲笑が、刹那、頬に浮かぶ…が、すぐに真剣な表情に戻ると、アルは砂舟を停めて辺りを探し始めた。

ゆるやかな起伏の間、白く、細い指先が僅かに覗いている。既に動かす力も無いようだ。

アルは急いで船底にある縄の端を手摺りに結び付けると、一方を腕に巻いて砂中に飛び込んでいた。

口中に、微細な砂粒が入り込んでくる。その不快な感覚を気にも留めず、彼は頼りなげな指先の許へと急ぎ、それを掴んでいた。

砂の中で、柔らかな感覚を頼りにアルは少女の体に手を回している。

やがて、激しく照りつける陽光の下へと、白暫な顔が覗く。その愛らしい造作に見入ることもせず、彼は指先で少女の口の中から砂を掻き出していった。

表面は焼けるような砂粒も、幸い、海の中ではそこまで熱くはない。掻き出される砂の温度に僅かに安堵しながら、小さな唇に頬を寄せ呼吸を確かめる。

： 乱れてはいるが、生きている。

再び氣を引き締めると、少女を腕に抱えたまま、アルは縄を頼りに熱砂の海を小舟へと泳いで戻り始めた。

自身の傷や火傷など意にも介さない。まず自分が小舟に上がると、華奢な体を海から引き上げる。

他国からの船は、もうすぐ傍まで近付いている。あの大きな波に飲み込まれては危険だ。

少女の無事をもう一度確かめたいが、今はその時ではない。

素早く舳先を港に返すと、アルは全速力で波止場へと向かった。

見れば、港にロムの姿がある。心配そうな顔をしているその少年に舳綱を投げてよこすと、アルは慣れた手つきで小舟を着け、氣を失ったままの少女を抱き上げながら言った。

「クラウスの親仁は確保したのか？」

「うん。マークが残ってるよ。それと、あの連中はもう出て行っちゃった」

「よし。」

ロム、今度は見張りを港から診療所まで等間隔に配置してくれ。軍が来たら、何もせずに知らせだけを送らせろ」

その言葉に、疲れた様子も見せず、幼い少年は再び倉庫群へと駆け込んでいった。
アル自身も疲労の色など見せずに、砂にまみれたまま街の中へと消えていく。

その姿が薄闇に飲み込まれる頃、波止場では奇妙に明るいう汽笛が鳴り響いていた。

「おい！　すぐに診てくれねえか」

「アル……！」

マークが低い驚きの声を上げる。

「今度は、誰が撃たれたんだ？　お前さんが、僕のお得意さんを帰してまでここを借り切ったんだ。よっぽど酷い……」

白い髪が目立ち始めている初老の男が、温和な表情を浮かべて表に出てくる。

だが、その目がアルの両腕に抱えられている少女を認めると、流石に一瞬、言葉を詰まらせてしまった。

「……なんだ、鷹のアルも、とうとう誘拐にまで手を出したのか？」

眉を顰めるクラウドに、アルは苛立ちを籠めながら怒鳴っていた。
「くだらないことを言ってるんじゃないやねえ！　それより、早くこの子を診てやってくれ。『海』で溺れたんだ」

「ああ、ああ、分かった。」

その代わり、何があつたか僕に聞かせるんだぞ？」

「いいだろう。マーク、お前も聞いてくれ」

粗末だが清潔なベッドに少女を横たえ、クラウドが外傷や気管の具合を診察し始める。その横で、アルは今までの出来事を簡単に話して聞かせていた。

マークもクラウドも、何も言わない。

だが、話が終わって暫くすると、クラウドは半ば呆れた表情をアルに見せていた。

「お前さん、本当に変わってるな……他の連中と違って、大きすぎる騒ぎも起こさず、きちんと統率できとるんだからなあ……」

「いやいや、昨日だけは違ったか。お偉いぼっちゃんが、足に銃弾を受けてたぞ」

医師のからかうような視線に、正直にアルは苦笑してしまった。

「まあ、心配いらんがね。あのぼっちゃんにも、いい薬になっただろうしな」

愉快そうに、笑い声を上げている。

軍の動向が気になるアルにしてみれば、流石に笑っていられるだけの余裕は無い。彼は急いた調子でクラウスに尋ねていた。

「そんなことより、その子、大丈夫なんだろうな？」

「ああ、大丈夫だよ。ただ気絶してるだけだな、こりゃ。熱砂で喉や鼻、目も痛めてない」

「そうか……」

珍しく、素直な感情を面に出して安心している。そんなアルの様子に、クラウスは優しい目を向けると言った。

「慎重なお前さんらしくもないな。そりゃ、軍は誰しもが嫌ってるが、それと正面から張り合うとはなあ」

「成り行きさ。仕方ねえだろ」

「いいや」

静かな声に、アルは瞳を細めた。

「そうじゃないぞ？」

クラウスは、鋭い眼光を正面から受け止めながら続けていた。

「鷹のアルよ。お前さんも、よく分かってるんじゃないのか？」

お前さんなら、それを認める『力』もあるだろう」

その言葉にアルは暫く黙り込んでいたが、やがて軽く肩を竦めると、未だ目を覚まさない少女の傍に歩み寄っていた。

彼は、雪という存在を見たことが無い。だが、それは想像する限りの純白な輝きを持って空から落ちては積もっていくと言う。それなら、この愛らしい少女の肌こそ、その雪と同じ煌きを持っている

のだろう。

衣服から覗く手足は細く、アルの力でも簡単に折れてしまいそう
だ。微かに開かれた唇からは呼気が流れ出しており、その緩やかな
動きに従って、幼い胸が上下している…

その時、アルは少女が服の下にペンダントを隠していることに気が
付いた。

金目になるかも知れないとは思いながらも、だが手を出すことは
できなかった。

今、こうして少女を見下ろしていると、その体に触れること自体
が恐ろしい行為のように思えてくる。

アルにとって、少女はあまりにも清らかな存在なのだ。

その幼い体から、清澄な光が溢れ出しているかのような幻を、ア
ルは再び全身で感じ取っていた。

「マーク」

やがてアルは振り返ると、静かな口調で言った。

「俺の砂上バイクを用意してくれ。急ぐんだ」

「…よし」

すぐに、彼の姿が消える。

黙って見守っていたクラウドは、アルに尋ねていた。

「どうするつもりだ？」

「もうすぐ、外来船は港から出るだろう。すぐに、軍は上陸するは
ずだ。」

この子が目覚めるまでは、少なくともこの街から出とかねえとな」

「儂の予感では、お前さんはもうここには戻ってこないだろう」

一瞬、アルはクラウドを睨み付けたが、すぐに笑い出してしまう
た。

「…そうなるだろうぜ」

「……？」

裏口に砂上バイクを置いて、マークが入ってくる。

その姿を見るとアルは急に笑うことを止め、真摯な表情に戻り命令した。

「いいか、マーク。軍はすぐに、ここを見つけるはずだ。俺はこの子連れて、隣のプサムに向かうから、軍にもそう言え。いいな、絶対に俺を庇おうなんて思うんじゃないぞ。見せしめで誰かが殺されたら、俺は自分を赦せないだろうからな」

「…分かった」

アルは頷くと、更に続ける。

「軍が俺を追いつ始めても、皆は散って隠れたままでいるんだ。いつまで潜むかは、マーク、お前が判断しろ。」

俺が二週間しても戻ってこなければ、お前がロム達の面倒を見てやってくれ」

「アル…お前…」

心配そうな視線に、アルは薄く笑ってみせた。

「あんな奴らに殺られてたまるかよ。」

だがな、万一、ってこともある。いつまでも率いる者がいないんじゃない、下手すりゃ流れ者に追い出されちまうからな」

「……」

マークの不安と厳しさが入り交じる表情に、アルはもうそれ以上は何も言わなかった。

ただ、彼の鳶色の双眸だけは、鋭く、真っ直ぐにマークを射抜き、彼の意志を伝えていく。

やがて、少年は小さく溜息を吐くと、アルに頷いていた。

「…分かった。そうしよう」

「決まりだな。」

クラウスの親仁も、たまにはこいつらのことを気にしてやってくれ」

「まあ、何も無くても、マークの方から飛び込んでくるだろうよ」
「…そうだな」

不敵な顔で、唇の端を吊り上げる。

「アル！」

不意に、ロムが診療所へと駆け込んでくる。
息を切らせる少年に、アルは落ち着いた声で尋ねていた。

「何処まで来た？」

「みな、…港、…だよ」

自慢の俊足を、精一杯活かしたのだろう。大きく肩を上下させながら、必死で言葉を押し出している。

「よし。」

じゃあ、そろそろ行くか」

アルが顎をしゃくると、すぐにマークは姿を消す。

疲れて動けないロムを前に、アルはまだ目覚めていない少女を抱き上げると言った。

「いいか、ロム。すぐに隠れる。」

これからは、暫くマークの為に動いてやれ」

その言葉に敏感に反応すると、不安を色濃く映した瞳で見上げてくる。

思わず、弟のように大切にしてきたこの少年に近付きかけたが…

アルは全力で踏み止まっていた。

「…心配するな」

それだけを押し出すと、アルは視線を断ち切るように、ロムに背を向けた。

「アル…僕…僕…」

待つてるよ…」

「……」

アルは応えず、裏口に向かい、そこを抜けた。
クラウドはすぐ傍に付いてきている。

少女を後部座席に乗せるのを手伝うと、医師は軽く笑って言った。

「お前さん、自分から蟻地獄にはまったんだ。」

最後まで、やり遂げないとな」

「分かってるさ」

縄で、軽く少女の体を固定する。

その安全を確かめると、アルは砂上バイクに跨っていた。

直後、爆音が弾け、路面に光が走る。

沸き起こる土煙の中、アルは素早くエンジンをかけると忌々しげに舌打ちをした。

「挟んで上陸しやがったな」

港からだけだと思っていた自分を呪いたくなる。

だが、そんな非現実的な行為をしている間など無い。すぐに、空気を噴射させる。

「いいか！ 鷹のアルよ、お前さんの《全て》を賭けて、その子を守るんだ。

それが、お前さんの進むべき『道』なんだからな！」

銃声の向こうから、クラウスの厳しい声が届く。

普段の温和な姿からは想像もできないほどの鋭い口調に、アルは唇を強く噛むと叫んでいた。

「やったろうじゃねえか！」

無闇に乱射される銃弾の間隙を縫って、砂漠を目指す。

路地裏や間道を巧みに利用しながら、アルは目一杯の速度で砂上バイクを操っていた。

これだけの速度を出しているのだ。一発でも当たれば、自分とはもかく少女が傷付く。

澄んだ瞳は黒髪の下で星の如く鋭く射し、あらゆる存在に対して気を張り巡らせていた。

見事な集中力と判断は、この辺境の街に慣れていない軍を翻弄し、着実に砂の海へと近付いていく。

やがて、アルは眼前に、茫洋と広がる黄金色のうねりを認めていた。

彼の沈着な思考は、町並みを抜けた直後の銃撃も予測し、躲している。

その時、ふと視界の端に、あの口髭を蓄えた男の姿が過ぎる。彼

は海に銃口を向けて待機している兵士達に合図をした。

砂漠には遮るものは無い。もともと、そこで沈めるつもりなのだ。躊躇わず、アルは海を前に素早く砂上バイクを曲げると、力の限り空気を噴射させていた。

港の外れから海に飛び出す…

そのつもりが、直後、幾人かの兵士の姿を前方に認め、アルは放り出されそうになりながらも、再び急激に右手の海へとバイクを向けていた。

多くの銃口が、十分な用意と共に、彼の後を追っている。

アルは背筋に緊張を走らせながら、銃声を待っていた。海の上で避けるには、そのタイミングしか無い。

だが、次の瞬間、彼の耳に響いたのは、大きな爆発音だった。思わず、背後を振り返ってしまう。

その目は、急いで街の闇へ溶け込もうとしている少年の姿を捉えていた。

間違えるはずも無い。

「ロム！ あの馬鹿野郎」

だが、アルには戻ることもできない。

彼が視線を再び前に戻そうとした時…

乾いた銃声が聞こえた。

半ばを闇に消す建物の角で、小さな影が、跳ね上がる……

「うつ…うつおおーっ！」

砂の海に、絶叫が迸る。

アルは、最早戻る意味も失った街に背を向けると、二度と振り返らず、激しい光が降り注ぐ砂漠の奥へと消え入った。

第一章 終わり

第二章 漆黒の湖

「んっ……」

乾燥で割れてしまった幼い唇の隙間から、微かな呻きが漏れる。

そんな自身の声に気付いた直後、デーズィアの耳には凄まじいばかりの空気の噴射音が飛び込んできた。

風が……？

……この震動は……一体……

「おい、気が付いたのか？」

不意に聞こえた乱暴な声に、身を竦める。

一度も聞いたことが無い声。

また、囚われたのか……

……だが、その粗暴な口振りの裏側には、少年のような響きも感じられる……

諦めも怒りも、今はまだ感じられない。ぼんやりとした意識のまま、少女は顔を上げようとした。

不意に、数発の砲弾が岩肌を穿つ。

その爆音に驚き、デーズィアは目を大きく見開いていた。

「今は、何も話すんじゃないぞ！　しっかり、しがみついてろ」

目の前に見えたのは、夕陽に赤く染まった、大きな少年の背中だった。

有無を言わせないその言葉に、慌てて傍の手摺りに両の腕を回す。

……自分を何処へ連れて行くこうとしているのだろうか。

改めて、黒髪の逞しい少年を見上げる。

どうして、自分はここにいるのだろうか。

不安と恐怖に怯える瞳は、だが再び聞えてきた砲声と飛び散る岩の破片に閉じてしまった。

風の音だけになると、今度はそっと、後ろを振り返ってみる。
砂上バイクは、今や岩石砂漠の中へと入りつつあるようだった。

何処までも続く、赤茶けた砂の海。その所々に、小さな島が頭を出している。

それら島々の、すぐ後ろに迫ってきているのは…

…デーズィアは、それを知っていた。あれは、軍の潜砂艦だ。砲門を開く為に、その身の半ばを砂の上に出している。

あれから逃れる為に、自分達は…

（パパ…！）

少女の脳裏に、つい先程の悪夢が甦る。

淡く澄み切った空色の瞳が、うつすらと濡れ始め…

まるでその様子を見ているかのように、砂上バイクを運転している少年が背を向けたまま怒鳴りつけてきた。

「泣いてる暇なんかねえぞ！」

今迄にこんな話し方をされたことが無いデーズィアは、びくつと体を震わせると恐怖に満ちた視線を少年に送ってしまった。

気付いているのかどうか…彼は、前を見ながら言葉を続けている。

「俺はアル。お前は、確かデーズィアだったな」

「…どうして…それを…」

微かな声を、漸くの思いで押し出す。

上下に激しく揺れるバイクの中、少年が自分を一瞥したのが分かった。

鷲色の瞳が、刹那、怯えた視線を捉える…

アルは、そんな少女に、自分でも驚くほどの優しい声で続けた。た。

「お前の父親に頼まれたんだよ。死ぬ直前に、お前を助けてくれってな。

まあ、軍が嫌いな俺としては、断れなかったのさ」

これは、嘘だ。

…本当に、断れなかったのか。

アルは、街を出る時の情景を思い出し、その瞳を鋭利な刃物の如く細めていた。

だが、過去を振り返るなど、らしくもない。

俊足　のロムの為にも、生き延びるのだ。

そのまま黙り込んでしまったアルは、砲弾を避けながら、眼前に迫りつつある赤茶けた断崖をあちこち探っていた。

巨大な岩が、視界の限り左右に続いている。その岸壁の所々を、狭い峡谷が切り裂いていたはずだ。中でも一番大きな谷は、そこを抜ける突風の激しさから「疾風の谷」とも、呼気に見立てて「巨人の谷」とも呼ばれている。その地のことを、アルはよく知っていた。かつて、彼はその谷を抜けて、街へと皆を導いたのだ。

「砂が無くなれば、潜砂艦もそれ以上は進めねえからな。砂舟が相手なら、こっちが有利だ」

誰にともなく、呟いている。

夜間にこの地を抜けることは難しい。野営の準備をした方がいいだろう。

流石のアルも、疲れが目立ってきている。

「洞窟でも探すか……」

風や、かつては流れていた水に浸食された洞穴も多いと聞いている。確かに、自分も見かけたことはある。その一つを、見つけよう。殆ど無意識にバイクを走らせ、砲弾を避けている。

……いや、少女のことすら一時忘れ、彼は探し出した峡谷目指して速度を上げた。

谷の中に入った途端、正面から猛烈な風が吹きつけてくる。

思いがけない突風に襲われ、デーズィアは小さく悲鳴を上げていた。

「大丈夫か？」

必死になって砂上バイクのバランスを取りながら、それでもアルが心配そうに叫んでくる。

「は、はい……」

悲しみや怖れも今だけは忘れ、一杯バイクにしがみつकिながら、

デーズィアもまたアルに応えようとした。

風を避けるように細く目を開き、大きな背を見上げる。

この少年は、全力で軍から逃れようとしながら、同時に自分のことも心配してくれている…

こんな、見ず知らずの自分の為に……

今迄、家を出てから、本当に多くの信じられない人々を見てきた。容姿や態度、社会的な地位など、何の目安にもなかった。

欲望すら、当てにはならない。

唯一、恐怖だけが、人々の行動を知る僅かな指標となった。

…なのに。

何故か、この少年は信頼できそうな気がする。

そこに、「恐怖」が無いからかも知れない。

だが、それは「無謀」と紙一重だ。

それに…

…この少年の衣服は、血と埃にまみれている。…いや、少年自身が、血と埃と闇を纏っているようにも見える。

恐らく、自分が知りたくもないような経験と行為を繰り返してきたのだろう。

だが…それでも、気を失っていた自分を、今と同じ真剣な態度で守ってくれたのは彼なのだ。

…いや…

空色の眸が惑う。

…彼もまた、自分の『力』を、軍から奪い取ろうとしているのかも知れない……

逡巡していたデーズィアは、再びアルに焦点を合わせると、だが次には強く否定していた。

違う。

彼は、そんな人ではない。

そう信じられるほど、今の彼は必死だった。

視線を背後に回すと、潜砂艦が立ち往生している様が見て取れる。

だが、その姿もやがて、沈みゆく夕陽に照らされ鮮やかな朱に染まる岸壁によって、遮られてしまった。

峡谷の奥では、更に幾つもの谷が分岐している。

記憶の中の標と照らし合わせながら、アルはその一つに入る直前、少女を一瞥すると言った。

「デーズィア。そのまま、後ろを見張っててくれないか。

何か見えたら、すぐに知らせてくれ」

「はい、アル」

細く、透き通るような声が、風の唸りを縫って届けられる。

今迄に耳にしたことの無いほど、美しい音色だ…

少し、余裕が出てきたのだろう。そんな風に感じながら、アルは知らず鼓動を高めていた。

潜砂艦は投錨され、砂舟や同じようなバイクで追跡するはずだ。

当然、この岩場に逃げ込む意図に気付き、早くから準備もしていたに違いない。それほど時間的余裕は無いだろう。

だが、それは零ではない。その僅かな機会こそが、アルにとって重要だった。

鋭い視線は、油断無く辺りを警戒し続ける。

その時、彼は見覚えのある迫り出した岩と、その影にある洞窟を見付けていた。

「しっかり見張っててくれよ」

アルはそう声を掛けてから、そっと、音も無く砂上バイクを停止させた。

ライトを点け、内部を照らす。

安定した光の帯が、洞窟の中を何処までも伸びていることを確認すると、再び砂上バイクを浮かべ、アルはゆっくりと、静かに滑り込んでいた。

「音を立てるな。

このまま、行ける所まで行ってみよう」

アルの囁き声に、デーズィアは怯えた目を洞窟の闇に向けながら

も黙って頷いた。

二人の背後では、風が渦を巻き、通り過ぎている。遠くには、激しい噴射音も聞こえるようだ。

だが、もう間もなく日も沈み、夜の帳は素早く兵士達を捕らえてしまっただろう。

「こいつは、すげえな…」

思わず零れた驚嘆の言葉が、幾重にも重なり虚ろに響いていく。アルは砂上バイクを止めると、ライトを細くして目の前の巨大な空間を照らし出していた。

少し先から、遙か彼方まで広がる黒い液体が、煌きを返している。地下の湖だ。

その水面には、漣一つ見えていない。

…恐ろしいほどの静謐が、湖畔で佇む二人を押し潰そうとしていた。

「よし」

暗闇と沈黙に怯えてしまい、何も言えずにいる少女の為に、声を押し出す。

「今日はここで休むか」

安心させるように、柔らかに…だが、それでも普段よりは気を張り詰めた声になってしまった。

不注意な声や言葉は、この空間そのものを崩してしまう…そんな怖れにも似た感情が次々と湧き上がって来るのだ。

アルはデーズィアの体を固定していた縄を解くと、バイク後部から油と角灯を取り出し、明かりを点けた。

燃える油の鈍い音が、周囲の闇と静寂を細く引き裂いていく。

砂上バイクのライトを消し、更に何かを取り出すと、アルはデーズィアの正面に立って話し掛けていた。

「ほら。飲み物を作るまで、これでも食べてな」

「あっ…」

差し出される乾パンを、慌てて受け取る。

続けて薄い毛布が、暗闇に浮かぶ純白の腕に渡された。

「チツ！　あまり用意してなかったな」

乱雑な荷物を掻き回しながら、アルは軽く舌打ちをした。

これほど早く、あの街を出るつもりは無かったのだ。それでも、いつ追い出されてもいいように、幾つかの舟を選んで準備しておいただけ良かったのだろう。

自分自身はともかく、デーズィアには少しでも快適になつてもらいたい。

十四歳の少年は、荷物の底から短く折った貴重な薪を数本取り出し、改めて火を起こし始めた。

油も薪も、どちらも貴重なものだ。慎重に使わなくてはならない。…そもそも、この逃避行をいつまで、何処まで続けるつもりなのか。

アル自身にも、分かっていないのだ。

焚き火は暖を取れるほどには大きくしない。だが、温かな飲み物は、特にこんな地下の寂しい所では必要なものだ。

先程までの闇と無音に対する怖れは、もう感じない。灯りや炎は、そこにあるだけで安心をもたらし、人心地をつけてくれる…

器を手に、茫々と広がる地底湖へと水汲みに行こうとした時、アルは少女が自分をじっと見つめていることに気が付いた。

「どうした？　食べられないのか？」

だが、そんな彼の言葉に、十二歳の少女は慌てて、激しく頭を振っていた。

「そうじゃないの…あの…」

…助けてくれて、ありがとう…」

「なんだ、そんなことか」

大柄な少年は、半ば呆れた表情で自分を見下ろしてくる。

デーズィアは少し視線を逸らせながら、掠れた声で続けていた。

「あの、でも…わたし、…これくらいしか持っていないくて…」

アルにしても、少なくとも何かを求めて助けてくれたのだろう。それも当然だ。

デーズィアは、少しでもそれに報いることが、彼への感謝の証になると思っていた。

でも…少ないかも知れない…

少女が不安と共に差し出す幾許かの銀貨を、アルは暫くの間黙って見つめていた。

…やがて、重く静かな声が、少年の口から押し出される。

「……ふざけるな」

「え…？」

「…俺は、そこまで落ちぶれちゃいねえ…」

感情の失せた口調でそこまで呟くと、アルは踵を返して水際まで降りていった。

…だが、いつまでも、水も汲まずに立ち尽くしている。

そんな少年の背に、デーズィアの胸は酷く締め付けられてしまった。

彼を怒らせてしまった…

…そのことは、だがデーズィアに恐怖ではなく、悲しみをもたらしていた。

この少年に、見捨てられたくない…

自分の身の安全を思う利己的な感情からではなく、もっと純粹に、素直に、デーズィアはそう感じていた。

彼を傷付けた自分が赦せず、胸元に両の拳を強く押し付けると目を伏せてしまう。

胸中の深い悲しみは、彼女の瞳に白露を宿らせ、それはすぐに白暫な頬へと伝い落ちていく……

「ごめんなさい…ごめんなさい…」

震える声でそう呟くと、それ以上どうしていいか分からず…

彼女はその場にしゃがみ込むと、啜り泣きを始めてしまった……

アルの心は随分と乱れていた。

…そう。

自分は、金目のものを期待して彼女を、デーズィアを助けた訳ではない。

それに…

少女があのような行為に出たとして、それを責めることが自分のような人間にできるだろうか…

厳しく細めていた瞳に感情を戻すと、アルは聞こえないほどの小さな溜息を吐いていた。

そうなのだ。

自分はどれだけ装っても、彼女が暮らしていたような世界の住人にはなれない。

だが、それでも…それでも、デーズィアを守りたい。

クラウスが言っていたではないか。

それが 鷹 の進むべき道だと……

背後から、悲痛な想いが闇を縫って伝わってくる。

…何より、自分は彼女のこんなにも悲しむ姿に耐えられないだろ

う……

……アルは、珍しく、寂しさと言うものを感じていた。

腰を屈め、器に水を満たす。

僅かに口に含んでみるが、冷たいだけで汚れも無く、このまま飲みめそうだ。

再び立ち上がり、何処までも広がる黒い湖の面を見渡す。

その唇が、一瞬、自嘲に歪んだ。

だが、角灯の方へと振り返った顔には、落ち着いた優しい微笑みが浮かんでいた。

「ほら、もう泣くなよ」

ゆっくり近付くと、そつと声を掛ける。

「悪かったな、怒ったりして」

「アル……」

驚いた表情が見上げてくる。

涙で濡れているその愛らしい瞳に、少し動悸を早めながら少年は笑みを深めていた。

「こんな人間だからな。デーズィアがそう思っても仕方無いさ。

ただ、俺は銀貨を受け取るつもりなんてないぜ？

俺は、俺自身が、デーズィアを助けたいと思ったから、そうして
るだけなんだ。

他の誰かの為でも、何かの為でもないよ」

思わずそんなことを話している。

だが、アルはその言葉が自分にとっての真実だと気が付いて、今更ながらに驚いていた。

「ありがとう…アル、ありがとう……」

今度は、その瞳から純粹な喜びの光が溢れ出してくる。

そんな少女の顔を軽く小突くと、アルは明るい口調で片目を瞑って
みせた。

「それにな、まだ本当は軍から逃れてないんだぞ？

まあ、眠るくらいの時間はあるだろうけどな」

そう言つて、彼は器を火にかけると、手早く飲み物と簡単な食事
の用意を始めていた。

「アルつて、不思議……」

ガラスのように透き通った声に、アルは少し乱暴な笑いを返して
いた。

「そうか？」

「だって……何も、訊かないんだもの……」
温かな湯気が立ち昇る。

その向こう側から、デーズィアは清らかな空色の瞳でアルを見つめ
ていた。

そのアルは、鳶色の双眸を眩しそうに細めながら、軽く肩を竦め
てみせた。

「デーズィアが話したくなったら、話せばいいのさ。
ただ、俺も一つだけ、訊きたいことがあるけどな」
「何？」

小首を傾げる少女に、アルは真剣な表情を浮かべた。
「一体、何処に逃げるつもりだったんだ？」

デーズィアの望む所なら、何処でも、俺は運んで行ってやるぞ」
その言葉に、少女は視線を汀に落とすと、小さく声を紡いだ。

「…何処でもいい…国境さえ越えたら、軍も諦めるだろう…：：：パパ
は、そう言っていたわ…：：：」

「そうか…それで、南のこんな辺境まで来たんだな」

何故、軍が追ってくるのか。アルにとって、そのことは特に問題
ではなかった。

事実として、既に軍には追いかけられているのだ。その理由が何
であれ、彼等はデーズィアを捕らえるまで追跡を止めたりしないだ
ろう。なら、理由の詮索よりも、これからの行動を練った方がいい。
…いや。もっと、根本的なことだ。

相手が軍であれ何であれ、デーズィアを苦しめる存在を許したく
はないのだ。

例えどんな理由があっても、このいたいけな少女を悲しませるよ
うな存在は全て、アルにとっての敵だった。

「…北部は警備も厳しいから…手薄な南部から逃れよう、って…
折角、ここまで来たのに…：：：」

微動だにしない水鏡に、優しかった父親の顔が浮かぶ。

…だが、その顔は、次には悔しさに歪んでいた。

無念、哀しみ、心配…：：：

それらの表情が全て、自分の目の前で、一瞬の後には消えてしま
ったのだ。

…背に触れていた温かな手は離れ…大きくのけ反った体が下の庭
へと落ちていく…：：：：

自分でも気付かぬうちに、デーズィアは両手で顔を覆うと泣き出

していた。

心からの悲痛な泣き声は、暗闇に潜むあらゆる存在を嘆かせる…アルはその瞳に憐憫の想いを浮かべながら…だが、ただ黙って彼女の足下に転がった器を取り上げると、新しく飲み物を注いだだけだった。

若しも自分だったら…

…こうして、ただ泣いていたりはしないだろう。

死んだ者は蘇らないのだ。 俊足 のロムにしても…

悲しみはある。

だが、彼にとって、それは怒りに変わるものだ。

今迄に、うんざりするほど死んだ者を見てきている。その中には、勿論、仲間として大切な者もいた。

だからと言って、悲しみに耽ったりはしない。

それよりも、殺した相手に復讐する方が、死者にとってもいいと思うのだ。

その相手が薬物であれば、少なくとも自分の仲間にはその使用を制限させてきた。

死んだ者への弔いの証は、唯一つ。

それは、自分達が、或いは何かが変わることだけだ。

…とは言え、今のデーズィアの悲しみは、それが純粋なものであるだけに、アルには否定もできないものだった。

静かに…ただ、優しく見守っていることしかできないのだ。

鷹 の目からは鋭さも影を潜め…愛しい存在を見つめる温かな光だけが、今はそこにそつと瞬いていた。

長い間、アルは一言も口にしなかった。

だが…声にならない『言葉』は、その想いの底から湧き上がり、デーズィアを包み込んでいく。

黄金の光が少女の青く沈んだ悲しみの心へと触れ、柔らかな煌きと共に胸中を満たす…

……やがて、噉り泣きも、油の燃える小さな音に吸い込まれてしまう。

デーズィアは白く小さな手で涙を拭くと、少しはにかんだ微笑みを少年に向けた。

「ありがとう、アル……」

何に対する感謝なのか…自身にも分からないまま、それでも二人はそっと笑みを交わしていた。

「ほら」

温かな飲み物が手渡される。

デーズィアは嬉しそうにその器を受け取ると、純真な笑顔を一層深めながら話し出していた。

「…ねえ、アル……『幼艾の国』って知ってる？」

「ヨウガイ…の、国？」

揺れる、小さな炎に目を向けながら、少女は真剣な表情で頷いている。

「いや…知らないけどな」

その炎を受け、黄金色の髪が美しい星を散らし、揺らめいていた目の前にある、この玲瓏な光の波がともこの世のものとは思えず…アルは息を飲み、瞬きすら忘れてしまった。

「よく、お伽話に出てくるの…エルナションとも言いわ」

澄んだ空色の瞳が見上げてくる。

慌てて目を逸らすと、アルは少し乱暴な口調で言った。

「お伽噺なんて、今迄読んだこともねえからな。」

俺は、自分が生きた存在として生まれてきたんだ、って気づいた時には、もう街の暗闇に身を潜めてたんだ。

そんなものを話してくれる人なんて、何処にもいなかったのさ」

「あつ……」

愛らしい表情が、後悔に染まる。

デーズィアは顔を伏せると、悲しそうに声を零していた。

「ごめんなさい……」

「いや、いいさ…悪かったな」

本当は、恥ずかしさから粗暴になってしまったただだ。だが、それを正直に伝えることはできなかった。

アルは、自分の生い立ちを悲しんだり、呪ったりしたことは一度も無い。彼にとって、それは生まれた時から「当然」となっている「事実」なのだ。

他人を羨むことはない。そんな夢を見るには、あまりにも多くの「事実」を見てきている…

言葉を止めてしまったデーズィアに、アルは優しく先を促していた。

「それで、その『幼艾の国』がどうしたんだ？」

「…軍は、その国を探し出そうとしているの…」

そして…わたしだけが、その入り口を開けられるんですって…

…」

「探す？ 入り口？」

真摯な表情で頷く少女に、アルは何も言えなかった。

軍が、お伽噺に出てくる国を探す？ 本当にあるかどうかも分からない…いや、軍だって、無いものを探したりはしないだろう…あんな、潜砂艦まで使って…

疑いは膨らむのだが、すぐ前にある空色の双眸は、そんな疑念を持つことすら許さないほどに真剣な光を湛えていた。

「これが、その入り口を示してくれる《鍵》だそうなの…」

本当は、母の大切な忘れ形見でしかない。そうとしか、知らされていなかった。

軍が来るまでは…

胸元から小さなペンダントを取り出すと、デーズィアは今日初めて話をした少年に、それをそつと手渡していた。

薄暗い炎に照らされ、翠色の透明な光が瞳を射る。

デザインは素朴なものだ。石も小さく、目立つものではない。

暫く眺めていたが、アルにはそれほどの価値も秘密も持っている

ようには思えなかった。

「…使えるのか？」

《鍵》なのだから、これを、何処かに、どうにかしたら入り口が開くのだろう。

だが、少女は小さく頭を振った。

「パパもわたしも、どうやって使うのかは知らないの……」

「なら、どうしてデーズィアだけが、そのエルナシオンへの入り口を開けられるんだ？」

開け方も知らないのに…

…ますます、情報が曖昧になっている気がする。軍は、何がしたいのだろう？

返してもらったペンダントを、再び首にかけながら、デーズィアはそんなアルの疑念にも気付かず応えていた。

「言い伝えがあるの…わたしの『血』は、『創始の緑樹』の守り手の『血』を伝えているんですって……」

このペンダントは、その『樹』の力を引き出す《鍵》でもあって…代々、守り手が受け継いできたそうなの……」

言い伝え…それも、お伽噺の中の話だろうか。

アルは少し頭を掻きながら、正直に言った。

「何だか、全然分かんねえな。」

その『樹』って、どんな『力』があるんだ？

軍は、その国をどうして探してるんだ？

話してくれるんなら、もうちょっと詳しく説明してくれねえか」

その困った口振りに、一人気を張り詰めていたデーズィアは、思わずくすくすと笑い出してしまった。

全部をアルに知ってもらいたくて…焦りすぎたのだ。まるで知識の無い相手に、核心だけを伝えても戸惑うばかりだろう。

そこで、デーズィアはもう一度、『幼艾の国』についてから話し始めていた。

「エルナシオンは、何処にでも存在しているそうなの…」

でも、誰の目にも見えることはなくて…

わたし達の世界と一緒に存在しながら、互いに関わることの無い国なんですよ」

小さな頃に聞いた話を思い出しながら、少しずつ、少しずつ…

「その国には、妖精や精霊が…その、不思議な存在が住んでいるの。季節はずっと、春のままで…あつ！…その、つまり、いつも暑くも寒くもなくて…温かな日差しが、いつも柔らかな光を大地に降り注いでくれているの。」

風は優しく吹いてくれていて…足下には、とっても澄んだ水が流れていて…

そよぐ草花が、ずっと若々しい色を失わない、実り豊かな大地の国…」

言葉を選び、分かるように伝えようとしてくれてはいるのだが…残念ながら、砂漠しか見たことがないアルには、想像すらできない言葉ばかりだった。

ただ、そこが何となく素晴らしい世界なのだということは、ゆったりとした音色に乗せて静かに語る、目の前の少女の様子からも分かる気がする。

「この『幼艾の国』の中心には、大きな樹が見事な葉を繁らせているそうなの…

…それが『創始の緑樹』。

この創まりの樹の『力』が、豊かな大地を創り、育んでいるんですよ…」

そこで、一度、デーズィアは深く息を吸い込んだ。

「…その樹の『力』を引き出す《鍵》が…このペンダントなの…これを伝えてきたわたしの祖先が、その樹の守り手で…祖先は、『創始の緑樹』の『力』を封印して、この世界に来たんですよ…

…」

「封印…？」

デーズィアは、こくんつ、と頷いた。

「でも、何故かは分からないの」

何かの理由で封印する為に、『力』を引き出す《鍵》を、その世界への出入りの為の《鍵》と兼用させた？　そして、《鍵》を閉めた者が《鍵》と共に、この世界へとやってきた…

「じゃあ、こうか？」

そのエルナシオンへの入り口をデーズィアが開けることは、その樹の『力』も解放することになって……」

「それは…よく分からないの。」

封印された『力』の一部だけを解放するのも知らないし…」

使い方が分からない《鍵》ほど厄介なものはない。

一つ目の《鍵》として使った時、二つ目の《鍵》も開くのだろうか…その場合、『力』の使い方など知らないデーズィアが、引き出された『力』を制御することなどできるはずがない。

強過ぎる『力』もまた、厄介なものだ。

「でもね、アル……」

…その樹の『力』を解放して、全て引き出してしまったら…

この砂漠を、緑豊かな大地に変えられるかも知れないの……」

「砂漠を？」

それは、例えデーズィアの言葉でも、簡単には受け入れられないものだった。

自分達が住んでいるこの国は、その殆どが砂漠地帯で覆われている。恐らく、デーズィアが暮らしていただろう北部の一部だけに、僅かな沃野が見られるのだ。

この広大な砂の『海』を、緑に溢れた大地に変えるなど…

デーズィアは、少年の顔に浮かんだ疑問を責めたりはしなかった。ただ…その双眸で、鳶色の瞳を想いのままに見つめ続ける…

暫しの沈黙の後、アルはやつとの思いで声を押し出していた。

「…本当に、できるのか？」

「ええ…」

軍は、その『力』を手に入れようとしているの……」

「でも、それは良いことじゃねえか。

この砂漠を、緑や作物で一杯の世界に変えられるんだろ？」

「…ええ……」

自分の視線の先から、空色の瞳が逸れていく。

その悲しそうな仕草に、アルは優しい口調になると静かに尋ねていた。

「だけど、困ったことがあるんだな？」

「アル……」

そう、何かが気になるからこそ、デーズィアは軍から逃げているのだ。

少女はそつと頷くと、続けた。

「『創始の緑樹』は、きつと、豊かな地を創造できるわ……」

でも、…何かを創るには…そこにあつたものを、全部、…壊さなくてはならないの……」

「…軍は、その破壊の『力』を望んでるのか」

重い呟きに、デーズィアはただ沈黙で応えていた。

深い静寂が、地の底に横たわる。

暗闇は何も語らず…自らの内に二人を抱き込みながら、時の流れすら彼等に見せようとはしなかった。

やがて、デーズィアが瞳を上げる。

澄み切った美しい空色の瞳は、微かに湿り気を帯びながら、アルを真っ直ぐ見つめていた。

「…わたし…分からないの……」

アル……破壊の『力』を渡してでも…砂漠を変えた方がいいの……

……？」

ずっと…そう、ずっと、迷ってきたのだ……

だが、アルはそんな彼女の頭に手を置くと、少し乱暴に撫でながら即答していた。

「そんなことに迷う必要はないさ。

例えば砂漠を変えられたとしても、あんな軍に破壊の『力』を渡す

なんて御免だ。

不自由でも、俺達は砂漠で生きていけるんだ。変えたかったら、自分達で変えていけばいい。

砂漠からは身を守ることできる。でもな、デーズィア、強い力から身を守る知恵は、より強い力が生まれることですぐに意味を失うんだ。

砂漠を支配することはできるかも知れないが、強い力を支配することはできないんだよ」

だから、身を守るだけでなく、逃げることも必要になる。或いは、相手よりも強い力を持つ必要も出てくるのだ。

終わりの無いレースだ。

しかも、強過ぎる力は、そのレースにすら参戦できない存在を多く生み出す。

それがまだ、こんな小さなペンダントとして、ここに存在しているからこそ、アルは参戦できるのだ。

そして…参戦している以上、アルは負けるつもりは無かった。

デーズィアの為に……

……いや。

デーズィアの為に……だ。

「……」

自分に微笑みかけてくれる少年を、デーズィアも純真な想いの儘に見つめ続けていた。

その容姿からは想像できないほど、彼は深い考えを持っている。

薬と暴力と血の中で育ってきたはずなのだが……いや、だからこそ、なのかも知れないが……

デーズィアは、最早そのような生い立ちのことなど、思い出しもしていなかった。

ただ、目の前のアルだけを……自分を力の限り守ってくれる、優しく気遣ってくれる、このアルだけを、少女は認め、信じ、頼っていた。

「さあ、少しだけ眠って、太陽が昇る前にこの谷を出よう。

国境を越えるなら、俺が前に通ったことのある道で行けるからな」
火を消し、角灯の明かりも小さくする。

暗がりの中、横になるその逞しい背中を見つめながら、デーズィ
アは少しの間、身を起こしていた。

明日になれば…国境を越えてしまえば、この少年とも別れること
になるだろう。

その事実を認めるや否や、深い寂しさが彼女の胸に押し寄せてく
る。

(アル……)

ありがとう…そう言ってしまうと、もう二度と逢えない気がする…
それは……いまや、少女にとって、恐れにも似た感情を引き起し
ていた……

二つの寝息が「疾風の谷」の地下で規則正しく沈黙を乱していた
頃、その谷を見る海の一角へと遙か北方から連絡が入っていた。

明かりを落とした部屋。

先程まで苦痛の呻きで満ちていたその部屋も、今は不気味な沈黙
が横たわる…

連絡は、交換手を経て部屋へと向かい、自ら手を下していた男を、
その無機質な音色で呼び出した。

「農務大臣からです、大佐」

「…繋げ」

抑揚の失せた声が、蓄えられた口髭の下から漏れる。
すぐに野太く忙しい声が大佐の耳に飛び込んできた。

「……ええ、大丈夫ですよ。……ええ、逃してはいません」
誰が伝えたのか…

唇が、不敵に歪む。

「追い詰めたのです…大臣、分かっております。それが、国王の命令なので…」

だからこそ、自分がここまで来ているのだから。

大臣の焦る口振りにも、大佐の声は全く乱されなかった。沈着なその声には、どんな感情も含まれていない。

ただ…ひどく冷たいのだ。

聞く者の身を竦ませ、重い恐怖を植え付けていく、あまりに静かな音の連なり…

「…明日には、手に入るでしょう。…ええ、この地に詳しい者も捕らえましたから…」

暗がりの中、眼鏡のレンズが微かに光る。

小さな…本当に小さな炎が、部屋の中央で揺れている。

その傍で、椅子に腰掛ける影がぼんやりと浮かんでいた。

まだ小さな影だ…脇に下がる両手からは紅い雫が間断無く落ち、

炎に煌きを返している……

「ええ…必ず」

…その頬には、嗜虐の笑みがうつすらと浮かんでいたかも知れない…

木片が燃える、優しい香りが鼻を擽る。

薪の爆ぜる音に、うつすらとデーズィアはその瞳を開いていた。

「さあ！ そろそろ準備を始めるぞ」

明るく乱暴な声が耳に飛び込んでくる。

少女が慌てて上半身を起こしてみると、既にアルは荷物を纏め、砂上バイクの点検を始めていた。

立ち上がろうとするデーズィアに、だがアルは用意しておいた器を渡しながら、片目を瞑ってみせた。

「まだ、そんなに急ぐ必要は無いぜ。まずは、温かいものでも飲ん

で、目を覚ますんだ」

実際、まだ日の出までには少し時間があるはずだ。

落ち着いたその言葉に安心すると、デーズィアは器を受け取りながら微笑んだ。

「おはよう……」

「ああ、おはよう。」

それを飲んだら、出発するぞ。食事は走りながらでもできるからな」

「……はい」

温かな湯気の向こうで笑顔を見せるアルに、デーズィアは少しはにかみながらも一層微笑みを深めていた。

純真で無垢なその笑顔も、今日は正面から受け止めることができる……

……今日一日で、別れることになるだろうが……今は、少しでも長く、彼女の姿を覚えておきたかった。

やがて、洗われた器を含め、全ての荷物が仕舞い込まれる。

火を消すと、アルは少女の体を再びバイクに固定した。

「いつ、追いつかれるか分からないんだ。しっかり掴まってるんだぞ？」

「はい、アル」

その信頼し切った言葉に頷くと、アルは空気を噴射させ、砂上バイクを浮かべた。

細いライトの筋が、遠く、洞窟の入り口へと伸びていく……

東天では薄明が始まりつつあったが、まだ狭い峡谷には暗闇が滞っている。

強い風が吹きすさぶ中、必死になってバランスを取りながらアルはバイクを走らせていた。

「大丈夫か、デーズィア！」

ちらっと、一瞥することしかできない。

だが、それだけでも、少女が必死になって手摺りにしがみついていることだけは分かる。

内心、アルは舌打ちしていた。今朝は彼女が目覚めているので、縄での固定を昨日よりも緩くしていたのだ。

「…はい！」

それでも、健気にデーズィアが声を出している。もつとも、その澄んだ音色の大半は、素早く風によって奪われ、遙か後方へと運ばれてしまう。

「もう少しだ！ 頑張ってくれよ！」

前日よりも、風が強くなっている。明け方には風が止むことも多いのだが…気まぐれな気候に、アルはもう一度、胸の内でも舌打ちをした。

朝の光が地平から迸り、大地を輝かせ始めている。細い谷間にはまだその恩恵は無かったが、漸く前方に見えてきた「疾風の谷」の出口は、陽光を受けて黄金色に燃え上がっていた。

あの先からは、再び砂の海が始まる。だが、潜砂艦さえ無ければ、国境までは僅かな距離だ。

問題は、その潜砂艦だが…

少しだけ速度を落とす。捕らえる気なら、潜砂艦は浮上しているはずだ。

…だが、その巨大な姿は見えてこない。まだ、ここまで先回りできていないのか…

鳶色の瞳が、乱れた黒髪の下で刹那、安堵に和む。

「……！」

次の瞬間、左腕に鋭い痛みが走る。

直後、耳元で唸る風の怒声を縫って、一発の銃声が少年の耳を貫いた。

「アル！」

デーズィアの悲鳴が、今度は随分はつきりと聞こえる。バランスを崩しながら、無意識にエンジンを止めると、アルは少

女の体に覆い被さっていた。

横倒しになった砂上バイクは、地面を擦りながら激しく赤茶けた崖にぶつかっていく…

腕の中の、小さく温かな存在を強く抱き締めながら…アルは全身を襲う痛みに意識を奪われ、深い闇の中へと沈み込んでしまった。

第二章 終わり

第三章 薄墨の城

「くっ…」

深淵へと落ち込んでいた意識が、ゆっくり水面まで浮かび上がってくる…

それに伴って、あちこちから痛みの信号が伝わり、やがてそれらは意識に吸い寄せられると人の形をとり、アルに肉体の感覚を思い出させていた。

「……」

うつすらと目を開く。視線が何かの壁を捉えていることに気付き、アルは自分がまだ生きていることを確認した。

「…何処、だ…」

聞こえる声は、耳慣れた自分のものだ。

視界もはつきりしてくる。目の前にあるのは冷たい鉄の壁だ。装飾も何も無い。

様々な感覚が蘇り、急速に意識がはつきりとしてくる。

アルは口を閉ざし、瞳を細め、身動きせずに辺りを探った。

やがて、音を立てないように気を付けながら、少しずつ、注意深く身を起こそうとした。

「…っ！」

途端、左の上腕部に激痛が走る。

慌てて右手だけで支え、身を半ば捻った時、アルの目にすぐ背後で横たわる少女の姿が飛び込んできた。

向き直って急いで一瞥してみるが、少なくとも外傷は見られない。清楚な衣服に乱れも無く、翠色のペンダントもその胸元に収められているようだ。

穏やかな呼吸に従って、幼い胸が上下している。痛みも感じていないのだろう…アルは自身の痛みを一時忘れて、心からの安堵の溜息を吐いていた。

だが、すぐに全身から痛みの不協和音が沸き起こる。

それは同時に、今が危険の只中にあることを知らせてくれる。

アルは少なくともすぐ傍には誰もいないことだけを確かめ、デーズィアの横に座るとポケットから汚れた布の切れ端を取り出していた。

血止めだけでもしないことには、体力は失われる一方だ。

警戒はしているものの、差し迫った危機を感じない中で、彼は落ち着いて口と右手だけで器用に左腕を縛り上げていた。

焦るのは、変化が起きてからでも遅くはない。その時が来れば、体と心と能力が最大限に高まり、敏速に動くことをアルは信じていたし、知ってもいた。

まず自分の身体を調べてみるが、銃で撃たれた箇所以外は打撲だけらしい。骨折もしていないように思える。幸い、銃弾も貫通していない体内に残っていないようだ。

持ち物はどうだろう。ポケットを探してみるが、これといったものは……

ふと、手の中に収まるほどの小さな木切れが触れる。あの事故でも、落ちなかったらしい。

随分と懐かしい気がして、アルはそれを取り出していた。

それは本当に小さな木製の笛だった。砂漠ばかりのこの辺りでは珍しい。

何となく暫くその横笛を眺めていたが、やがて再びポケットに仕舞い込むと、アルは今度はデーズィアの様子をもっと詳細に調べ始めた。

何度か確かめたが、本当に、大した怪我はしていないらしい。

今も、ただショックで気を失っているだけだろう。

ここで初めて、アルは音も無く立ち上がると、辺りの状況に目を向けた。

驚色をした瞳が鋭く細められる……それは、傷付いてはいても、どんな状態であっても、鷹のままの瞳だ。

感じていたよりも、部屋は広いらしい。明かりは高い天窓に嵌め込まれた分厚い硝子を通して入ってくるだけで、中はかなり薄暗い。すぐ前に扉はあるが、重そうなそれは当然ながら閉じられていた。他の出口などあるはずもないだろうが、それでも現状の把握は大切なことだ。

他に動き回る存在も、その気配も感じず、アルは薄闇の中に足を踏み出していた。

そう…気配すら感じていなかった。

だが、自分達からは遠く離れた奥の一角に、ぼんやりとした影が見えた途端、緊張が背に走る。

薄い暗闇に沈みながら、壁に身を凭せて座り込んでいるその影は…まるで動く様子が無い。

それに…

(……)

それに、まだ、それは自分達よりも幼い子どもに見える…

勿論、幼いからと言って安全ではない。

アルは警戒しながら、滑るような足取りで部屋の奥へと向かった。近付くにつれ、闇が薄くなる。

間違いない、まだ少年だ。十歳程度だろうか。

衣服のあちこちは裂け、赤い傷がまだ生々しく覗いている。右の胸元には、一際大きな鮮赤の痕が見えるが…

(……！)

その酷く竄れた少年の姿に、アルは思わず低い呻き声を上げてしまった。

「…ロム……」

見間違えるはずも無い。

確かに、その少年は 俊足 のロムだった。

アルは駆け寄ったりはしなかった。

手の甲を僅かな唾液で湿らせると、そっとロムの唇の前に寄せる。…生きているのだろうか。

恐ろしい一瞬が過ぎる。

だが…本当に微かではあったが、甲に呼吸を感じる。

喜びの表情を浮かべたのも束の間、アルは少年の体の周囲をまず調べていた。

少なくとも、彼に分かるようなトラップは無い。

それが安全を保障するわけではないが、疑心暗鬼になっても先には進めない。

続いて少年の体に触れると、アルは右胸の銃痕を調べていた。

粗雑ではあるが、手当てはしてもらったようだ。

…だが、何故？

更に他の傷も調べようと視線を滑らせた瞬間、彼は再び声を漏らしてしまった。

ロムの右手は…

…全ての爪が剥されているのだ……

左手は……

……

そこには最早、指と呼ばれるものは存在していなかった……

「…くそっ！」

強く噛み締める唇から、赤い糸が流れ出す。

だが、暗く深い怒りに囚われながらも、アルはそれ以上の感情の吐露を見せなかった。

不安定な心情は隙を生む。

アルは自分の服地を裂くと、できる限りの止血を試みていた。

「ん……」

不意に、背後で柔らかな吐息が零れる。

その穏やかな気配に、アルは急いでロムの傷を布で隠してしまっ
た。

「…アル？」

ぼんやりと、自分を探す声。

起き上がろうと、身を起こす衣擦れの音。

…だが、アルはまだ、振り返ることができなかった。

「アル？ …その人は…？」

薄暗い影の向こうに霞む二人の姿に、デーズィアは少し怯えた声を出していた。

「俺の仲間だ」

まだ、デーズィアには覺られてしまう。

胸中の黒い感情すら押し殺そうとしながら、アルは声だけを漏らしていた。

「あと、二時間と持ちこたえられないだろう…」

「そんな…！」

慌てて立ち上がると、二人に近付こうとする。

だが、次に聞えてきた言葉の波に、デーズィアは凍り付いたように足を止めてしまった。

「来るんじゃない…！」

…見ない方がいい……」

その声には、昨日までのアルとは違う「何か」が含まれていた。

重く厚い、闇が…影が彼の姿を包み込んでいる気がして…

デーズィアは思わず瞳を伏せてしまった。

…だが、彼女の心に占めていたのは、恐怖ではない。

それは、悲しみだった。

冷たい空間に、静寂が満ちてゆく。

悲しみと、怒りとが静かに広がり…だが、その二つの感情は反発しあうことなく、互いに優しく触れ合い、互いに波を飲み込んでいく…

やがて、アルは一言も口にしないまま立ち上がると、鉄の壁に拳を打ちつけていた。

「馬鹿野郎……」

先程までの冷静さが失われている。

だが…今の彼には、この発露が必要なのだ。

命令通りにしていれば、ロムも…そして、自分も、ここまで苦し

むことは無かったはずだ。

そうとは分かっていたながら、同時に、アルはロムの思いも認めていた。

アル自身にしても…ロムが危険になれば、命令など無視していただろう…

組織や個人の安全など、顧みない瞬間もある。

勿論、それも分かっているのだ…だが……

その時、不意に、彼の逞しい背に温かな存在が触れた。

「アル……」

微かに聞こえる囁きは、震えながら…深い悲しみと苦しみを秘めている。

偽りではない。同情ですらない。

それはもつと心の奥から湧き上がる、《真》の想いだ…

その想いは…願いは…祈りは、少年の暗闇に触れ、慄きながらも温もりと共に胸中からその影を追い出していく…

何て優しい…穏やかな黄金色の波だろう……

暫くの後、アルは溜息を一つ零して呟いていた。

「…ありがとう、デーズィア」

「アル…」

そこで漸く振り返ると、彼は少女の頬に流れていた涙をそつと拭うと言った。

「でもな、デーズィア…覚えててくれ。

あれが……俺の、本当の姿なんだよ……」

「……」

様々な想いが込み上げ、何も言えずに頭だけを振っている。

そんな少女に、アルは僅かに笑みさえ浮かべることができるようになっていた。

「何処も痛くはないか？」

「…はい」

やっと、それだけは言える。

そんな優しく愛らしい少女に頷いてみせると、アルは冷たい床に腰を下ろしていた。

続いて、デーズィアもそのすぐ隣に座り込む。

まだ濡れている空色の瞳が、アルを見つめる。その視線に応えるように、アルは小さな横笛を取り出してみせた。

今、何をしてこの部屋から逃げ出すことはできないだろう。

まず動くべきは、こちらではない。相手の方だ。

その為には、まず知らせなくてはならない。こちらが目覚めたことを…

…そうは思っていない、木製の笛を取り出した理由の多くが、隣に寄り添う少女の為なのだ…アルは自分でも気が付いていた。

笛には、五つの穴が開いている。アルは右手だけでそれを握ると、穴の一つに口を当て、空気を送り込んでいた。

不思議な、柔らかな音色が流れ出す。アルの風体からは、とても想像できないほどに軽やかで美しい旋律だ。

少年は、音楽に触れた経験は殆ど無い。酒場や宿屋で聞くことはあるが、その歌や曲を今、思い出しているわけでもない。

…いや、無意識には思い出しているのかも知れない。ただそれは、彼の体と心の奥底に染み付き、彼自身のものとなった音だ。

半ば瞳を閉じながら奏でる音色は、素朴で温かな大地の広がりを描き出す。

砂、大地、光。温もり、風、空。

どれもアルにとって身近な存在だ。果てなど感じさせない、無限の広がりを持つそれらが、音の連なりとなってデーズィアの心の中へと静かに滑り込んでいく。

何て大きく、何て優しいのだろう…

砂漠の世界は過酷だ。だが、そこに穏やかな顔が無いわけではない。

それらもまた、砂漠の力だ。

（アル……）

胸の中に満ちていた苦しみや哀しみ…あらゆるものが、より大きく広いものによってそっと包み込まれていく……

それは、短い時間だった。

そうではあったが、このうえなく澄み切った黄金色に溢れる時の流れが、二人の間を行き交い、銀の調べをその身に抱く。

…やがて、緩やかな旋律が消えていくと、デーズィアは幼い唇を開き、言葉を紡ぎ出そうとした。

「アル…」

この想いを、言葉を、声に……

少女が小さな願いを遂げる寸前、だが、声は音を失った悲鳴に変わってしまった。

ギッ、ギィ…

部屋の扉が震えている。

アルは押し開かれていくその扉を見つめながら、黙って笛を仕舞うと瞳を厳しく細めていた。

「目が覚めたかな…」

平坦な声が、扉の隙間から滑り込んでくる。

デーズィアを海から救い上げる時、聞こえた声だ。

(……)

あの時の冷酷な視線を思い出し、背に緊張が走る。

アルはゆっくりと立ち上がると、男と同じく抑揚の失せた声で応えていた。

「ああ、気持ち良く寝かせてもらっただけ」

先程、一瞬過ぎた緊張など微塵にも感じさせない、静かな口調だ。

鷹の瞳はあくまでも鋭く、入ってくる人影を見守っている。銃を構えた兵士が二人。その得物の先には銃剣が沈んだ光を返している。

その二人に挟まれて、栗色の短髪をした男が姿を見せていた。黒縁の眼鏡と、蓄えられた口髭。砂舟に乗っているのを見かけた

ただだが、忘れられない容貌だ。

何よりも、その冷たい視線は忘れたくても忘れられないだろう…

「正直に言っておこう。ここまで苦勞するとは思ってもしなかった」
その言葉は、圧倒的に有利な者だけが告げるものだ。

そして、その立場を、アルもまた理解している。

「貴様が、ロムを拷問したのか」

分かつてはいる。だが、確かめておかなくてはならない。復讐は、怒りは、そこから始めるものだ。

感情を押し殺した言葉に、男は平然と応えている。

「拷問ではないな。話を聞いただけだ。

愚かな子どもだった。谷の出口を思い出すだけのことに、左手の指を全部切り落とされなくてはならないのだからな」

「指を……」

デーズィアは空色の瞳を恐怖で満たすと、溢れ出そうとする悲鳴を必死になって両手で抑えていた。

部屋の隅の、動かない人影を振り返ってしまう。だが…その手には、粗末な服地が掛けられている。

（アルが…）

見えないように、隠してくれたのだろう。

再び戻した視線の先で、そのアルは静かに立っている。

…静かに？ デーズィアは、アルが強く拳を握り締めているのに気が付いていた。

その拳からは…細く、赤い糸が流れ出している…

それを目にした瞬間、デーズィアは立ち上がると、アルの逞しい腕にそつとしなやかな指先を添えていた。

たったそれだけの仕草だった。

だが、感情のうねりは再び落着きを取り戻していく。

…今はまだだ。まだ、怒りに囚われてはいはいけない…

復讐も大切だ。だが同時に、デーズィアも救い出さなくてはならない。

時間が必要だ…

「さて、デーズィア殿」

立ち上がった少女に、男はそこで初めて目を向けた。

小さな体が、刹那、震える。

「そろそろ、終わりにしましょうか。」

我々は、エルナシオンへの道を示していただきただけなのですよ」

その言葉を、アルは鼻で笑っていた。

「教えるなよ、デーズィア」

だが、普段のアルなら、このような態度をとらなかったかも知れない。

「…やはりそうか。知っているのだな」

かつて知っていたのかどうか、は関係が無い。しかし今、この時点で、少なくともアルは『幼文の国』についての情報を手にしていることになる。

アルは胸中で舌打ちしていたが、悔やんだりはいらない。そんなことは、全てが終わってからしても遅くはない。今は、一瞬一瞬が運命の分岐点だ。

「…あなたのように酷いことをする人には、教えたくありません」

デーズィアは、自分が持っている勇気を全部使って、やっとそれだけの言葉を押し出していた。

「酷いこと？」

心の中の動きを全く見せない…いや、そもそも心の中に動きなどあるのだろうか。まるで変化しない男の瞳が、アルに向く。

「デーズィア殿は、そこにいる浮浪者のことをよくご存知ではないようだ。」

私がしたことが酷いのなら、彼がしていることもまた酷いことでしょう。

彼は平気な顔で人を殺し、その暴力で生き永らえてきたのですよ。あなたが掴んでいる、その腕でね」

男の言葉に、アルは齒軋りをしていた。

…だが、口に出しては何も言わない。

その言葉が事実であることを、アル自身がよく知っている。

この優しい指先が腕から離れても…それは仕方が無いことだ。

清純な、愛すべき心を持つこの少女から見れば、自分は血にまみれた野獣でしかないのだ…

その時、そつと添えられていた細い指先が、腕を掴み力を込める。驚く少年が見下ろす先で、デーズィアはまるで動じず、しっかりと口調で男に言葉を返していた。

「いいえ。」

わたしも知っています。

アルは、いつもわたしのことを気遣ってくれます。わたしのことを心配して、助けてくれます。必死になって、守ってくれます…

…わたしは、《本当》のアルを知っています。

あなたとは比べようもないほど、素晴らしいアルのことを」

「デーズィア…」

違う！ そんな、立派な人間ではない。

思わずこの状況を忘れて、心配から少女の瞳を覗き込んでしまう。誤解だ。間違いだ。

そんなアルの視線に、デーズィアは微かに頬を染めると目を伏せてしまった。

だが、すぐにその空色の瞳を上げると彼を見つめ、はにかみながらも美しい微笑みを頬に浮かべる…

…なんて、優しい想いに満ちた笑顔だろう。

思わず、アルも喜びの笑顔を返していた。

鳶色の瞳が、深い感謝の色に染まる。その視線は、暫く少女の澄んだ瞳から動かなかった…

「これはこれは…」

平坦な口振りには、皮肉もからかいも映らない。

「仕方が無いですね。デーズィア殿からご協力をいただけないのな

ら、あれにもう一度、役に立ってもらいましょう」

ゆつくりと、男は部屋の奥へと歩き始める。

「何をするつもりだ？」

瞳に鋭さが戻る。だが、動けない。

銃口は…見間違えようが無かった。命を奪うとは思えなかったが、デーズィアにも向けられている。

「これも、まだ少し、生きているからな」

…初めて、その口許に感情らしきものが走る。

薄く、凍りついたような…笑み、だろうか。あまりの不気味さに、デーズィアは身を震わせると、思わず目を背けていた。

アルが制止の言葉を発しようとした、その瞬間…

…幼いロムの体は力一杯蹴り上げられ、壁にぶつかっていた。
「やめろっ！」

もとより抵抗するだけの意志も力も残っていない、ただの気絶した「体」からは、鉄の壁にぶつかっても呻き声さえ出てこない。

直後、アルの胸中にはどす黒い闇が広がっていた。

鷹の瞳は怒りに染まり、彼はデーズィアの指を振りほどくと動き出していた。

「アル！」

恐怖の悲鳴は、だが、少年の耳には届かない。

まずは、銃だ。

無論、相手も黙ったまま銃剣を突き出してくる。この状況では、デーズィアを傷付けずにアルを撃つことは難しい。

アルもそのことは承知している。

なら、勝ち目はある。

鈍い光の軌跡を素早く躲すと、そのまま兵士の一人に体当たりをしていく。

肩から入り、相手の背を壁にぶつける勢いも合わせて、鳩尾に拳を打ち込んでいた。

そのまま片足を軸に回転し、背後から襲ってくる銃剣を際どく避

ける。

すぐ横に突き出されている銃身を逃さず掴むと、アルは兵士を引き寄せようとした。

銃を奪われまいと、兵士が力を込めて上体を僅かに反らす。

その力の流れに逆らわなかった少年は、直後、その喉元に拳を叩き付けていた。

鶯色の瞳は、口髭の男を捉え、鋭く見据える。

その男は、まるで何事も無かったかのように、平然と腕を組みながら立ち尽くしていた。

アルの視線も、正面から受け止めている。

アル自身も、そんな男の態度に何の感情も抱かず、視線を動かさないまま、兵士の一人から銃を奪っていた。

足下に転がるものを見もせず、だが的確に、銃剣で貫く。

噴き出す血にも、目を向けない。

今の相手は、この二人ではない。

少年の身が赤黒く染まっていく…その光景を、少女は怯えた表情で見つめていた。

不安、恐怖、…そして、不信…

デーズィアの小さな胸に、見通すこともできない漆黒の暗闇が生まれようとしている…

…どうしても、身の震えを止めることができないのだ。

アルが…怖い……

思わず俯きかけたその視線に、彼のポケットが映る。

…そこから見えているのは、あの小さな笛だ。

途端、胸の暗がりには金色の漣が溢れていく。暖かく、柔らかく…緩やかな光の波は、そっと、優しく、少女の心に語り掛けてくる…

……そう。…わたしは、《本当》のアルを知っている……

彼の生い立ちや、今迄生きてきた過去、その環境を変えることなどできない。

だが、このような争いにさえ身を置かなければ…《今》は……後悔の念が過ぎる。

この争いに巻き込んだのは、自分自身なのだ。

しかし、そのことを否定してしまうことは…同時に、彼との別れを意味してしまう…

気持ちを書いたまま…その想いを、空色の瞳に映したまま…

…ただ黙って、少女はアルを見守り続けていた。

素早い少年の動きを見ながらも、だが男はまるで動こうとはしない。

相も変わらず、笑み…のような微かな表情をその口許に張り付けている。

アルが、僅かに足をずらす。

その時になつて初めて、男は自分から離れようとしない鋭い眼差しを正視したまま、腰に挿していた短い棒状のものを手にしていた。直後、逞しい少年の体が、見事な跳躍を見せる。

手にしたものが何かは分からないが、危険な物に間違いはない。

それが形を成す前に、この銃剣で…

次の瞬間、眩い光の鋒が、アルの腹部を貫き…背中へと抜けていた。

(……っ！)

剣…だろうか。それとも、銃…？

棒の先端から伸びる光の帯に突き抜かれ、アルは得物を落とし、首を垂れてしまう……

「アル！」

悲痛な叫びが、辺りに響く。

だが、凄まじいばかりの熱と痛みに腹中を焼かれ、少年の意識はその声を聞くことも無く、既に暗闇へと沈み込んでいた。

血と肉の焦げる匂いがする…

デーズィアは、狂ったように髪を振り乱すと男に掴みかかろうと

したが、簡単に避けられてしまう。

彼が手の中の光を収めると、少年の重い体は床に落ち、転がった。
「アル！」

全く動かない少年の体に縋り付き、泣きじゃくるデーズィアの背に、抑揚の失せた声が投げ掛けられる。

「いかがですか、デーズィア殿。」

あなたがエルナシオンへの道を示してくだされば、この少年達には治療を施しましょう」

その口許には、今はどんな感情も映されていない。

言葉はただの音と化して、淡々と滑り出している。

そんな言葉であっても少女は取り縋ると、僅かな躊躇いも見せずに叫んでいた。

「話します！ だから、アルを…アルを助けて！」

「分かりました」

絶叫も、この男には眩きと変わらない。

軽く片手を上げると、それを合図に、入り口で控えていた一人の兵士が入ってくる。

仲間の死体の脇を通ると、彼は男の前で止まり敬礼した。

「ご命令を、ロンベルト大佐」

「この少年達を治療してやれ…すぐにだ」

「はい」

少女の目には…耳には、だがこれらの会話も見聞きされていない。彼女はただただ、アルの体を抱いて泣き続けていた。

デーズィアの心の何処かには、軍に『創始の緑樹』の『力』を渡してはいけなと…その危険を咭く声がある。その結果、もたらされるかも知れない破壊の術によって、多くの人命が失われるだろうと…

だが、今のデーズィアにとっては、目の前のアルこそが最も大切な存在なのだ。

未来に生じるかも知れない可能性と、眼前に横たわっている事実。

…そもそも、比較などできるはずがないのだ。

そこに、選択の余地は無い。

「では、こちらへ」

大佐が腕を取る。

デーズィアは涙を流しながらも、逆らいはしなかった。

静かに身を起こすと、その案内に従う。

…アルは、どんなことがあっても、『力』を軍に渡すべきではないと考えていた。

だが、今、自分は全て知っていることを話すつもりでいる…

嫌われるかも知れない。

もう、逢ってこないかも知れない…

それでも…それでも、デーズィアはアルに生きていてもらいたかった…

少年達を残して、部屋を出る。

デーズィアは、これからの《全て》を、たった一人で負うことを決意していた。

そこでは、一つだけ…小さな卓上の灯りだけが、壁に黒々とした影を描き出していた。

そこここに暗闇が巢食い、蠢き、飛び掛ろうと狙いを定めている…

部屋で唯一の救いである光を背に隠すと、ロンベルト大佐は空色の双眸を覗き込んで言った。

「では、デーズィア殿。知っておられることを、全てお話していたきましようか…」

影に染まった無情な面にも怯えることなく、毅然とした美しい瞳が煌きを返す。

少女はそのまま視線を逸らさず、自分が聞いて知っていることを洗いざらい話し始めていた…

『幼艾の国』のこと。『創始の緑樹』のこと。そして、『鍵』となるペンダントのこと。

「…ただ、使い方は知りません」

正直に、そのことも伝える。

今、デーズィアは、ただ無心に…何も考えずに言葉を紡いでいた。考えるべきことは、未来ではない。

「…入り口を開ける、その方法は？」

そんな少女の決意など意に介さず、大佐は淡々とした口調で…まるで事務的に尋ねるように、言葉を零している。

デーズィアは、はつきりと答えていた。

「分かりません。誰も、教えてはくれませんでした」

「そうですか…」

デーズィアは、彼女の身体には大きい、鉄製の椅子に腰を下ろしている。

彼女は知りもしない。そこに、あの半ば死体と化した少年が座らされていたことを…

ロンベルト大佐は視線を外し、体を起こすと、少女に背を向けた。だが、それは僅かな間だけだった。

すぐに振り返ると、白暫な少女の腕に、嘗めるような視線を滑らせる。

「…」

軽く手を上げる。

途端に、入り口で控えていた兵士が二人、飛び込んできた。

抵抗する間も与えず、彼らはデーズィアの首と手足を椅子に固定してしまう。

「な…」

言葉が出ない。

純真な光を宿す空色の瞳が、恐怖に乱れる。

そんな少女の様子に、大佐の口許が僅かに歪む。それは、薄く凍りついた…笑みと言えなくもない感情の発露だった。

「あなたにも、あの少年と同じことをさせていただきますよ…
…もう、死んでいるはずですが」

「……！」

硬く締め付けられていても、体は震えるものだ。小刻みに揺れる手足を、止めることができない…

大佐は傍の机に向かうと、何かを探し始めている。

「あなた自身は覚えておられなくても、あなたの『血』は継いでいるはず。」

大丈夫です。死ぬほどの苦しみであっても、死んだりはしません。命の保障はしますよ…」

自身の身に迫る恐怖に気を失いそうになりながら…だが、その脳裏にふと、血に塗れ、横たわる少年の姿が浮かぶ。

その瞬間、震えが止まった。

もう…死んでいる…？

「アルは、アルは…！」

ロンベルト大佐は、振り返りもしない。

「役にも立たないゴミは、早く捨ててしまわなくてはいいけませんよ。肉体は、腐りますからね」

「酷い…酷い…」

…騙したのね！」

悔し涙が、どっと幼い頬に溢れ出す。

自分はアルやあの少年を救うこともできず…全ての情報も渡したのだ。

「約束を守る者など、この世界に存在しません。あなたですら、守れていない…」

約束は、破られた時にしか存在しないものですよ…」

少女の中で荒れ狂う激情になど頓着せず、大佐は仄かな灯りに道具を翳す。

「では…暫くの間、デーズィア殿の自我には眠っていただきますしよ…うか」

太く、長い釘が冷たく光を返している。

右手に大きな槌が握られているのを見て、デーズィアは戦慄し、身悶えた。

「や…」

…めて！

だが、声は出ない…

白く、愛らしい左手の甲に、釘の先端が触れる。

その鋭さ…冷たさ…

「……！」

心は絶叫する…

だが、次の瞬間、釘は紛えることなく…

…少女の掌を突き抜けていた。

全身を貫く激しい痛みに仰け反ると、デーズィアの意識は完全に失せてしまう。

だが、大佐は更に、小さく柔らかな右手の甲にももう一本、釘を打ち込もうとしていた。

鋭い先端が触れても、最早少女は動かない…

微塵の躊躇いも無く彼が手を振り上げた瞬間、突如、少女の胸元から翠色の光が迸った。

「何…？」

光の奔流は、圧力を伴ってぶつかってくる。その勢いに危険を感じ、大佐は急いで少女の傍から退いていた。

刹那、部屋に翠が満ちたかと思うと、次にはその輝く風は軽々と鉄の壁を吹き飛ばしてしまう。

凄まじい光の爆発は、そのまま球面を描きながら広がり続け…瞬く間に、潜砂艦を含めた軍事施設の一角を土煙舞う廃墟へと変えてしまった。

渦巻く熱砂が、瓦礫の山を積み上げる…

その中心にありながら、だが、気を失ったままのデーズィアは、その美しい髪一つ損ねていない。

手首を固定された左手からは、今も鮮やかな赤い糸が流れ床を濡らしており、血の気の失せた頬には涙の跡が痛々しくも見えている。その少女の周囲、まるで彼女を守るかのように、そこには今、四つの光の珠が浮かび漂っていた。

珠はどれも、澄んだ翠色の光を放っている。

その中の一つが、そつと滑らかな動きでデーズィアの傷付いた左手に触れると、ふわりと包み込む。

美妙的な揺らめきが、珠の表面に走る。

その漣に飲まれ、釘は瞬いたかと思うと溶けるように消えてしまった。

続けて、珠から小さな光が弾け飛ぶ。光の粒は首や手足に触れると、次には少女の縛めは全て解かれていた。

光に包まれた甲の傷口には、七色の煌きが踊っている。清澄な光の舞い：その波が次第に周囲の翠に溶け込むと、後には無惨な傷跡一つ見られない、白皙な掌だけが残されていた。

その頃になって、漸く瓦礫の向こうから多くの兵士が駆けつけて来る。

少女の周りの、残り三つの光はそれらを迎えるように散開すると、輝きを強め大きくなっていく。

やがて、その中心に人の形が浮かび上がってきた。

珠の一つで、現われつつある人影が片手を振り下ろす。

その指の先から、不意に紅蓮の球が走り出していた。

爆音と熱風が、銃を構えていた兵士を飲み込み、砂漠の気を震わせる。自らが起こした炎と風に翠の光は払われ、中からは燃えるような赤い短髪をした女性が現われ出していた。

女性の右手、別の翠の珠からは、銀色の髪を靡かせた若者が顕現している。

その両手には冷たく光る剣が見え、見事な動きで宙を滑ると集まる兵士の体を切り裂いていく。

悲鳴を上げる間も無く倒れていく兵士の背後では、最後の珠から

藍色の髪をした青年が姿を見せ、静かに佇んでいた。

その彼が、つと片手を上げ、払う仕草をする。

直後、残っていた僅かな建物の残骸は、烈風と共に砂の海へと吹き飛ばされていた。

「んっ……」

今や屋外に剥き出しになってしまった椅子の上で、柔らかな呼吸が愛らしい唇の隙間から漏れる。

……だが、それはただ、それだけのこと。

デーズィアは周囲の悲鳴や怒号を感じながらも、聞いてはいなかった。

無論、美しい瞳も閉じられたままだ。

意識は深い泉の奥に沈み込んだまま、自ら創り出した薄膜の泡の中で頭を抱え、膝を丸めている……

目覚めたくない……

……目を覚ました途端、自分は激しい痛みに襲われてしまう……

……それは、手の痛みだけではない。

自分は……アルを救えなかった……

自分自身の愚かしさが、許せないのだ。

もう……生きているアルには出逢えない……なら、もう……

……あの世界に目覚める必要など、あるのだろうか……

「目を覚ましてください、守り手よ……」

不意に、優しい声が忍び込んでくる。

温かな流れが暗く深い泉の奥へと滑り込み、泡の表面にそつと触れている……

「既に、封印は少しずつ解かれています」

……？　それがどうしたと言うのだ……

だが、その温もりに逆らうには、デーズィアは優しすぎた。

薄い膜が、静かに弾ける。

……次には、デーズィアはその瞳を開いていた。

破壊され、瓦礫と化した船や建物。

銃声と、叫び声。

湧き起こる、砂漠の陽光さえ隠してしまう程に激しい土煙。目や耳、全ての感覚に、周囲の状況が飛び込んでくる。

だが、それらの恐ろしい情景も、また、あるはずの痛みも、まだ彼女の心を捕らえてはいない。

その空色の瞳がまず焦点を合わせたのは、目の前の美しい微笑みだった。

「……」

感情を失ったまま、それでも唇は震え、問い掛けようとする。

何故、呼び戻したの…

微笑み、膝についているのは、黒髪を背に流す女性だ。

彼女は恭しくデーズィアの手を取ると、その白く細い指先を額に押し当てて言った。

「私は四聖神将の一人、玄武と申します。

私達は、ペンダントの主を御守りする為にこうして召喚されました」

「……」

召喚…？ 誰が…

…ペンダントが？

「デーズィア様。

多くの世界が長らく待っていた『機会』が、漸く訪れたのですよ

…」

「……？」

澄んだ双眸に、戸惑いと…苦痛が僅かに浮かぶ。

少女の意識は、少しずつ、少しずつ…周囲の状況を受け入れ始めていた。

同時にそれは、この目の前の女性の不可解な言葉にも耳を傾けることになる。

…何を言っているのだろうか？

「デーズィア様は、今より『創始の緑樹』の封印を解除し、その『

力』の行く末を見守らなくてはなりません」

「……」

何故、そんなことで呼び戻されなくてはならないのか。

その程度のことです…

アルは…アルは……

一番大切なことを思い出し、急速に瞳が曇る。涙が、嗚咽が溢れ出す…

玄武は刹那言葉を止めたが、見上げるその微笑みに哀れみを映しながらも、少女に告げた。

「…エルナシオンへ、ご案内致しましょう」

待って！ 待って…っ！

小さな体は、流れる運命に、時間に、必死になって抵抗していた。足を踏ん張り、奔流に立ち向かう。

もう…死んでいるかも知れない。

だが、それでも、今、大切なのはアルを探すことだ。

アルに逢いたい。逢って、謝りたい…

玄武は、何も言わずにデーズィアの瞳を覗き込んでいた。

少女もまた、はつきりとした意識の下、必死の想いと共にその目を見返す。

ペンダントが、《鍵》がどうしたというのだ。

『力』が、世界がどうしたというのだ。

時間が、運命がどうしたというのだ。

わたしは、わたしだ。わたし自身だ。

ここに、こうしているのは、『わたし』だ。

「…分かりました。」

その少年を御探しましょう」

玄武は立ち上がると、素晴らしい笑顔でそう告げた。

玄武の合図に気付き、小柄な女性が駆け寄ってくる。

掌のすぐ上で渦巻いていた火炎の球を無造作に脇に投げ、生じた凄まじいばかりの爆風に短い髪を乱しながら、彼女は少し怯えた表

情のデーズィアの前に跪いていた。

「朱雀と言います、デーズィア様」

紅の髪の下から覗くのは、陽気な光を湛えた瞳だ。

「どんなことでも、ご命令ください。このふざけた建物、全部焼き尽くしてしましましょうか」

こんなにも愛らしい、いたいけな少女を苦しめた場所だ。

憎々しげに辺りを見回す朱雀に、デーズィアは慌ててしまった。

「い、いえ…」

彼女なら、本当にそうしてしまうだろう。

急いで頭を振る少女に柔らかく目を細めながら、玄武は朱雀に声を掛けていた。

「デーズィア様は、アルと言う少年に逢いたいそうです。

ここは、あの二人に任せて、私達はその少年を探しに行きましょう」

「分かったわ」

頷き立ち上がると、朱雀は再び右手に炎を生み出していた。

だが、今度は山吹色の淡い色をしている。蠟燭のように仄かに揺れる、優しい光…

その小さな揺らめきは、流れるように彼女の掌から離れると、宙を漂い彷徨い始める。だが、やがて行き先を定めたのか、引き寄せられるように速度を増した。

「では、デーズィア様」

名を呼ぶと同時に、玄武は少女の細い体を抱き上げてしまう。

「あ、あの、わたし…」

もう、自分でも歩けるはずだ。

だが、玄武は温かな瞳で言葉を抑えると、そのまま少女を降ろしはしなかった。

今はもう、風も無い。

頭上には黒いぐらいの青空だけが静かに広がっている。

ただ、降り注ぐ厳しい陽射は、暗い室内に慣れたデーズィアの瞳

に、痛みを感じさせていた。

ここはまだ、砂漠の中だ。

随分と少なくなってきたが、まだ時折、怒声や悲鳴が広がる。それを聞いたたびに、デーズィアは瞳をきゅっと閉じ、身を縮めていた。

朱雀と玄武が軽やかに滑っていく足下にも、崩れた壁や天井の残骸が積み上げられている。いや…それだけではない。鮮やかな赤い泉を急速に乾かしながら、幾つもの死体も転がっているのだ。

…とても、デーズィアにはここを歩いていくことなどできなかっただろう。

自分の為に、ペンダントの為に、『力』の為に、死んでしまった者を正視することは、この少女の小さな胸には残酷すぎる…

デーズィアは、最早瞳を開けることも無く、優しい玄武の腕の中で両手を組んでひたすら身を小さくしていた。

その白い頬を、美しい雫が伝い落ちていく…

流れる滴を、玄武は痛ましそうに眉を顰め見つめていた。

彼女の目には、すぐ傍で銃を構える兵士が見えている。勿論、朱雀も気付いている。彼女は燃え盛る炎球を生み出すと、立ち塞がる兵に向かって投げようとして…

だが、その手を、玄武は押さえてしまった。

「どうし…」

不満気に口を尖らせる朱雀も、次には少女の頬に煌く真珠を認めていた。

急速に、炎は小さくなり、消えてしまう。

直後、銃声が響いていた。

不意に、銃弾の前に人影が滑り込む。

「青龍！」

藍色の髪をしたその青年が右手を翳すと、幾つもの銃弾が突然、空中で停止してしまった。

続けて銃声が響き渡るものの、それらは全て宙の一点で微動だに

しなくなる。

「私がお供しよう。朱雀には、あの始末をしてもらわなくてはなるまい」

上げていた右手を動かし指差す先には、砲口を自らの施設に向け始めている潜砂艦が見えていた。

既に、銀色の髪を靡かせる若者が、迎え撃とうと走り始めている。だが、その更に先に、もう一隻あるようだ。

本来はまだ実用化されていないものだ。近くにあった訓練用や開発中のものも含めて呼び集められたのだろう。恐らくは、軍が持つ潜砂艦の全てが、ここにある。

「いいわ。白虎一人じゃ、荷が重いでしょうし」

これからエルナシオンへと向かう上で、潜砂艦は破壊しておいた方がいい。

小さな山吹色の炎を残したまま、朱雀は軽い足取りで巨大な船の方へと駆け去っていった。

その時、再び、思い出したかのように銃声が響く。

だが、幾度試みても、結果は同じだ。青龍によって、見えない壁に阻まれるかのように銃弾は空中で止められてしまう。

「行きましょう」

何事も無いかのように玄武は静かに告げると、目の前に集まりつつある兵士を一瞥した。

デーズィアと接している時とは、まるで別人だ。細められたその瞳は冷たく、獲物を狩り出すような残虐な光を放っている。

射竦められ、身動きできなくなってしまふ兵士の間を、平然と歩んでいく。

小さな炎に導かれながら進む先に現われた者は、次々と玄武の視線を受け、僅かに指先を動かすことすら叶わない。

やがて、彼らは崩れ落ちた建物の一角へと案内されていた。

その欠けた壁の手前で、炎は自らの役目を終えて消失する。

玄武と青龍が瓦礫を乗り越えようと、かつては部屋であったらう

所の波打つ床の上で、砂漠の熱射に剥き出しのまま晒されている二人の少年の体が転がっていた。

「デーズイア様……」

僅かに躊躇う優しい言葉に、ゆっくりと空色の瞳が広がる。

視界が明瞭になるや否や、治療など施されもせず、ただ転がされているだけのアルの姿が少女の胸を刺し貫いていた。

「アル……！」

玄武の腕から飛び降りると、少女は何も言わずに駆け寄っていた。何も言わず……いや、呼気も言葉も、喉に張り付いて干からびるのだ。涙すら、止まってしまふ。

体に積もる土埃や瓦礫の欠片。その更に下には、今もまだ生々しく、焼け爛れた腹部の傷跡が見えている……

腕を投げ掛けたその体からは、生命の躍動など感じられない。これ程の日射の下にありながら、何故、この逞しい体はこれ程までに冷たいのだろう……

……もう……

小さな……本当に小さな拳が強く握り締められる。

許せない……自分が、許せないのだ。いつも、自分のことを必死になつて、力一杯助けてくれたアルを……

……こんな目に、合わせてしまった……

声も涙も、深い絶望の前では闇の中へと沈み込んでしまふ。

ただ、幼い体を、細かい震えだけが襲っていた。

……その背にしなやかな指先がそつと触れると、静かな声が届けられる。

「デーズイア様。大丈夫です。この少年たちは、まだ生きています」

「え……？」

信じられないことを聞いたように、顔を上げる。

喜びと期待と、恐れと不安が胸中を荒らし、抑え切れない叫びが迸る。

「お願い……！ お願い……！」

美しい黒髪の女性はそつと頷くと、デーズィアの頬に優しく触れた。

アルとロム。二人の体を柔らかな翠の光が包み込む。

あちこちで微かな七色の虹が踊り、散った先から傷口が塞がれていく。ロムの失われた指さえも、元の形を少しずつ取り戻している…

どれだけの時間が流れたのだろう。時間など、流れたのだろうか。辺りの喧騒は？ あの時砂艦は？ 近くで響く銃声は？ 崩れる

壁や天井は？

少女にとって、そのような世界は存在していなかった。空色の瞳は、ただただ、目の前の翠の光の漣だけを見つめている。今、この瞬間には、「ここ」しか存在しないのだ。

自分の身の上？ 危険？

今、アルを襲っている危険以上の危険があるだろうか。

永遠にも等しい『時』の流れ…永遠とは、これ程も苦しいものか…

だが、やがては翠の波も薄れ、消え入る。

怖れに満ちた瞳が、そこで漸く周囲を認め…想いを籠めた視線が玄武に注がれる。

深い愛情に溢れた微笑で、その女性は頷いてくれていた。

何も声に出せず、だが多くの言葉と共に、デーズィアは玄武の細い体を力一杯抱き締めていた。

そして、すぐに振り返ると、アルの上に被さるようにして確認する。

腹部の傷は消え、彼女にも分かる安らかな呼吸が、その大きな胸を穏やかに上下させていた。

生きている…そう、生きている…

「…アル……」

その胸元に頬を寄せる。

…暖かい……

次の瞬間、彼女は大声を上げて哭き出していた。

よかった…よかった…本当に、よかった……

心に浮かんでいる言葉はただそれだけだが、体中に満ちる想いは、もっと深く、もっと温かな黄金色の光を放ち、《全て》を叫んでいた。

「んっ……」

瞼が震え、僅かに口が開く。

「……？ …… デーズィア……？」

掠れた声が、言葉を押し出す。

開かれた鳶色の瞳は、眩い陽の光に再び細められながらも、戸惑うように胸元の少女を見つめていた。

少女は、ただただ、大きな声を上げて泣き続けている……

次の瞬間、アルは全てを思い出ししていた。

鋭い視線が、辺りを探る。

あの男は、今、何処に……

だが、記憶の中の状況とは、あまりにも異なる現状に気付き、再びアルは戸惑ってしまった。

何しろ、今居るのは部屋ですらない。砂漠の日差しに剥き出しになった床の上だ。

傍には、まだ心を戻していないロムの横たわる姿も見える。彼が無事なことは、遠目からでもはっきりと分かる、落ち着いた呼吸が示してくれていた。

デーズィアの柔らかな髪の方こうには、一組の男女の姿も見える。呼吸を整えながら、警戒の色を浮かべるが……その尖った眼差しを、この二人は正面から静かに受け止めていた。

鋭く突き刺さる視線をそっと、穏やかに包み込む……

「……」

それでも、アルはそのまま鋭い光を湛え、細めた瞳で探り続けていた。

しゃくりあげている少女の頭に手を置き、少しずつ、身を起こす。その時になって漸く、アルは自分の体の傷が完治していることに気が付いた。

思わず、視線をずらしてロムの手を確認してしまう。

その指が形を成していることに、アルは更に思考を深く沈み込ませていた。

再び鳶色の瞳を戻すと、黒い髪を背に流す女性を見上げる。

…彼女は、優しく頬を緩めながら、そつとアルを見守っていた。

アルは、そんな彼女へと、微かに頷く。

「アル…」

不意に、胸元から愛らしい眩きが零れ出してくる。

見ると、デーズィアがその濡れた瞳を上げていた。

「…ごめんなさい……ごめんなさい……」

こんな自分の為に、アルは傷付いてしまったのだ。

その上、自分は知っている全ての情報を話してしまった。

…そのことが分かってしまったら、もう、逢ってくれないかも知れない……

それに……

…もう、…これ以上、……危険な目に遭わせたくもない……

隠すつもりなど、毛頭ない。沢山のことを、全てのことを、語り

たかった。

それなのに、震える唇からは少しも声が流れ出してくれない。

何もかも、知って欲しいのに……自分が今、どんな想いであるのか

さえ、全て……

もどかしさに、再び涙が堰を切って流れ出しそうになる。

だが、次にはアルがそつと囁きかけてくれていた。

「悪かったな、デーズィア…」

俺なんて、何もできなかった……」

それはまた、アルの本心でもあった。

「……！」

だが、少女は大きく頭を振る。

絶対に、そんなことは無い。

アルが居てくれたからこそ、今、自分はここにこうしていられる

のだ。

「さあ、詳しい話は後にするぞ。まずは、ここから逃げるのが先だ」
アルはそう言っと、少女を軽々と両腕で抱え、立ち上がる。

真っ赤になって慌てるデーズィアを、アルは玄武の前に立ち、渡していた。

「俺の代わりに、護っててくれ。」

ロムのこと、頼む」

そう言っと、アルは返事も待たずに瓦礫の壁を乗り越え、飛び出していった。

「アル！」

心配に満ちた声が追いかける。

だが、アルは振り返りもしない。

「すぐに戻る！」

そう叫んだだけで、やがて逞しい少年の姿は崩れた建物の向こう側へと消えていった。

「…こいつは、すげえ」

そもそも、この場所にはどんな施設が建っていたのだろう。そんな特徴を示す何物も、最早残されてはいない。全てが崩れ、砂漠の大地に積み重ねられている。

遠くでは轟音と共に火を噴いている潜砂艦の姿が見えるが…眺めている先からその形を毀ち始めている。

…静かだ。

戦闘行為があつたことを告げているのは、あちこちに横たわり血を乾かす兵士の死体ばかり。あまりに大きな力の差は、一方的な破壊でその行為を終えていた。

争いと死を身近に、それも数多く見てきたアルでさえ、僅かに哀れみを覚えてしまう。

逃げ出せないのは、職業軍人であるからこそであり、その非はとうに隠れてしまっている指揮官にある。

…少なくとも、自分なら、ここまで一方的な争いを最後まで命じ

ることは無いだろう。

もつとも、そんな思いを微かに抱いたからといって、警戒を解くわけではない。相手は職業軍人だからこそ、最後までこちらに挑んでくるだろう。

素早い身のこなしで、瓦礫の間を暫く彷徨い続ける。

状況の把握だけが目的ではない。

デーズィアを連れて、ここから出るにはその移動手段がいる。まさか、灼熱の砂漠地帯を歩いて進むわけにもいかない。

砂舟でもあれば…

ふと、視界の隅を一人の兵士の姿が横切る。

音も無く、落ち着いた動きでアルは傍の壁の影に身を潜めた。

完全に、戦意を喪失しているようだ。生き残っているのは自分だけとも思っているのだろうか。どうやら逃げ出す準備をしているらしい。

知られてしまつては、危険な行為だろうに…

大きな袋を両手に持ちながら、確かな足取りで何処かを目指している。

アルは、そのすぐ後ろを静かに追いかけていた。

遅い彼の大きな体は、影から出ることもなく、足元の欠片一つ動かさない。

やがて、その兵士は目の前に砂の海が広がる場所に出ていた。

幾つか、まだ砂舟が見えている。

これだけの砂舟が使える状態で残っているということは、つまり生存者がごく僅かであることを物語っている。

天蓋から貫く厳しい陽光に灼かれながら、兵士はその手の荷物を一台の砂舟に運び込んでいた。

ここへ運ばれてくる前に乗っていたものよりも、少しだけ大きいだろうが、扱えないほどではない。

「あれにするか」

低く呟くと、少年は冷たい笑みを浮かべていた。

疲労を色濃く滲ませた表情で、兵士は数日分の水と食料を砂舟の奥に仕舞い込んでいる。これだけあれば、近くの街まで行けるはずだ。そこから先は…

ぼんやりとそんなことを考えていた次の瞬間、彼は後頭部を殴られ、気を失ってしまった。

殺すほどの相手でもない。深淵へと意識を沈ませてしまったその身体を船外へ放り出すと、アルは素早く船内を点検した。

少年の目にも、この砂舟は壊れていないように見える。水も、砂漠で生きてきたアルにとっては十分過ぎるほどだ。

他の兵士が現われないとも限らない。すぐに操縦桿を握ると、アルは空気を噴射させ砂舟を浮かせた。

凄まじい勢いで噴き上がる砂が、倒れた兵士の上にも降り積もる。今、アルの脳裏にあるのはデーズィアのことだけだった。

すぐにあの少女の所へ…

直後、彼は背後に複数の気配を感じ、身に緊張を走らせていた。鋭い瞳と身軽な体が滑り出す前に、細くしなやかな腕が抱き付いてくる。

「デーズィア！」

振り返ると、ロムを抱えた先程の女性と、他にも三人の男女が乗り込んでいる。

その中の一人、赤い髪の女性は楽しそうに、大きな声で話しかけてきた。

「太陽を左にして進むのよ！ その先に、『幼艾の国』の入り口があるんだから」

一瞬だけ、流石のアルも躊躇してしまった。

だが、すぐに前に向き直ると、黙って言われた方角へと舳先を向ける。

…今はまだ、何も考えずにいてもいいだろう。まずは、安全な場所へと行きつくことが先だ。

デーズィアも、この熱射の下では、長くいられまい。日陰を見付

けて、休むことも必要だ。

僅かに吹き始めた風が模様を描く『海』の上を、アルは記憶の中の地形を探しながら走り続ける。

柔らかな温もりを背に感じながら…その鳶色の瞳は鋭く行く手を見つめていた。

第三章 終わり

第四章 翡翠の小屋

茫々たる灰色の大地が、見渡す限り続いている。

黒いほどの青天井から容赦なく照りつけてくる黄金色の球体は、その身を半ばまで引き摺り下ろされながらも、未だ厳しさを緩めようとはしなかった。

今、砂舟は乾燥した岩盤の上を滑っている。

軍に潜砂艦が残っているのかどうか、その能力がどの程度のものなのかは分からない。いずれにしても、砂の『海』よりは岩の『海』の方が遥かに危険は少ないだろう。

操縦する黒髪の少年は、その鋭い鳶色の瞳を左舷前方の岩山に向けていた。

大きな岩山が『海』から頭を出してそそり立っている。

瓦礫と化した施設を抜け出してから、追い掛けてくる軍の存在も一向に感じられない。

同乗している四人の男女にも動きは無い。

その存在はよく分からないものの、デーズィアに危険が及びそうになれば彼らは必ず動きを見せるはずだ。

(…この辺りで、一度休むか)

確かめたいことは多い。

「デーズィア、もう少しだけ我慢しろよ」

「はい、アル…」

ずっと腰に手を回したまま縋り付く少女が、掠れた声で健気にも応えている。

だが、アルは 鷹 の瞳を僅かに心配で翳らせると、自分に抱き付いているその白皙な腕を一瞥した。

あまりにも、多くの出来事がありすぎた。この夢げな少女が、今も意識を保っていることが不思議なくらいだ。心身共に疲れている彼女を、早く、安全な所で休ませなくては…

…それが、永遠に保証された、安らかな暮らしであればもつといのだが……

まだ、これからどうすべきなのか、アルは考えていなかった。

未確認の情報と状況が乱立する中で、計画を立てることほど無意味なものはない。今為すべきことは現状を把握し、それらを手の中のカードとして残すこと、ただそれだけだった。危険に関しては、アルは何よりも自分の感覚を信じていた。変化が生じれば、手の中のカードを自らの感覚に従って切っていけばいい。不可思議な現象や力の前であっても、それは同じことだ。

そんなアルとデーズィアを、四人の男女が何も言わずに見守っている。

その中の一人、豊かな黒髪を背に流す玄武は、まだ両の腕に幼い少年を抱きかかえていた。

全身の傷は癒えている。だが、その少年…ロムは未だ目を覚まそうとはしないのだ。

いや…意識を戻すことを、拒否していると言ってもいい。

無理に呼び戻すことも、できなくはない。だが、それでは彼の心は癒されはしない。時間…そう、今のロムには時間こそが必要な薬なのだ。

灰色の島は、近づくにつれ、思っていた以上に滑らかな肌をしていることが分かった。これでは、屋根となる岩棚は少ないだろう。

微かに舌打ちしながらも、アルは島の影が伸びている側へと砂舟を回した。

幸い、太陽は沈んでいく途中だ。影はこれ以上に短くはならない。岩山のすぐ傍まで近寄り、僅かでも頭上に迫り出している箇所を探し出すと、アルは空気の噴射を止め、砂舟を下ろしていた。

先に降りると、しっかりとした地盤であることを確かめる。

…大丈夫だ。沈み込んだりはしない。

漸く瞳を緩めると、アルは振り返って言った。

「まず、水だな。それから、話を聞かせてくれ。」

俺が寝てる間に、何があっただんだ？」

デーズィアだけに向けられた言葉ではない。この少女にも理解できていないことが生じているのだ。それについては、本人達から語ってもらうしかないだろう。

水が入った袋を取り出し、一つをデーズィアに渡すと、アルは黒髪を背に流す女性からロムを受け取った。

先に自らの唇を僅かに湿らせ、すぐにロムの口中へと袋から少しずつ水を流し込む。

残念ながら多くは飲ませてやれない。ロム自身の喉も受け付けないだろう。

少しずつ、少しずつ……

その横で、デーズィアは水を手にしながら複雑な表情を浮かべていた。

あれもこれも……沢山のことを聞いてもらいたい。話したい。

だが……

話した後の結果を思い描くたびに、その小さな胸は乱れてしまう。そんな少女の様子を一瞥すると、アルは袋を置き、優しい笑みを浮かべながら言った。

「デーズィア。俺やロムの為に、あの男に全部話してしまったんだろ？」

「アル……！」

その言葉にひどく驚いて、デーズィアは暫く彼の瞳を凝視してしまった。

空色の双眸が、次第に湿り気を帯びていく……

……やがて、小さな頭がこくん、と頷いた。

「ごめんなさい……」

微かな声を、絞り出す。

嫌われるかも知れない……

……いや、それだけではない。もう、一緒にいない方が……

このままでは、アルをもっと危険な目に合わせてしまう。

……だが、もう逢えないなんて……そんなこと、自分に耐えられるのだろうか……

デーズィアは、自分一人で全てを背負うつもりだった。そう……そのつもりだったのだ。それに嘘は無い。

嘘では無かったのに……今、こうしてアルが無事な姿で目の前にいてくれると……

迷いが、願いが、祈りが、奔流となってその胸の中を激しく掻き乱してしまう。

「やっぱりな。」

まあ、気にすることはないさ」

「……え？」

目を見開き、少年を見つめる。

「今更、悔やんでも仕方が無いだろ？」

いずれ、事實は知られてしまう。権力や暴力とは、そうだったものだ。

確かに、早いか遅いかで、選択する道は変わっていく。だからといって、手詰まりになるわけではない。

今、砂舟に横たわるロムのこと。

これから起こるであろう、常識を超えた現象を含む様々な出来事。それらを自らの手で制御し、乗り越えられるかどうかについて、若干の不安が無いわけではない。だが、アルはそれでもまだ、自身自身を信じていた。

特に今は、まず知ることだ。

「アル……赦して、くれるの……？」

その白皙な頬に涙を流し始めている少女に向かって、アルは陽気に片目を瞑ってみせた。

「勿論さ。それに、有り難う。」

デーズィアがそうしてくれた御蔭で、俺とロムはこうしてここに
いるんだからな」

「それは……」

それは、自分がしたことではない。結果として、そうだったかなのだ。

あの時、確かにデーズィアはアルとロムの命を選んだ。だが、それは守ってもらえない約束の上でのことだ…

瞳を伏せ、しゃがみこんでしまう。

もしも、今のようになっていなかったら……

……恐怖がどつと押し寄せてくる。

そんな少女の頭を、軽くアルは小突いていた。

「心配するな。もう、俺もロムも大丈夫なんだからな」

少なくとも、今はその通りだ。

その鋭い瞳が海を警戒していることなど、デーズィアは気付く余裕も無い。

「それより、ほら。先に水を飲んでから、続きを話してくれ。

こいつら、一体、誰なんだ？」

「あなた、言葉には気を付けた方がいいわよ？」

赤い髪の女性が、楽しそうに口を挟む。

軽く肩を竦める少年に、デーズィアは顔を上げ、慌てて水を口に含むと話し始めていた。

何もかも。隠さずに、起こったことを全て。

アルは、その話を腕を組み、半ば目を閉じながら黙って聞いている。

デーズィアの話を聞きながら、流石のアルも心中戸惑いを隠せはしなかった。

手の中に炎を生み出す？ 瀕死の者を健康体に戻す？

ペンダントの主を護る為に、召喚された？ 四聖神将？

確かに、自分もロムも…失われた肉体すら、元通りになっている。瓦礫と化した建物の残骸も目にしている。

そして何よりも、デーズィアが真っ直ぐに自分を見つめながら、嘘を語るはずが無いと分かっている。

勿論、分かっているのだ。

『幼艾の国』や、『創始の緑樹』とその『力』。『力』の解放と入り口の開放の《鍵》となるペンダント…

彼が知るものを越えた状況は、既に存在している。

だが、彼は例えそれだけの材料があつたとしても、猜疑心を忘れるほど素直ではない。

だからこそ、生き延びてきた。

だが、彼はまだ知らないのだ。猜疑心すら生まれ得ない《真》が存在することを。

その 鷹 の目は、多くを見ても深奥を覗き切つてはいない。それでも、不可解な状況下で動けるのは、見えるものだけを信じているわけではないからだ。

デーズィアは正直に語り終えていたが、彼の瞳にどうしても浮かんでしまう疑いや戸惑いの色を認め、その双眸を深い悲しみに染めてしまった。

デーズィアにも、分かつている。勿論、分かつているのだ。全てを正直に信じてもらえるなどと、思う方が間違っている。

自分なら、どうだろう？ この目で、アルの傷が治っていくところを見ていなかったら…信じられただろうか。

そもそも、玄武達を召喚したのは誰になるのだろうか。

自分自身が無意識にしたのだろうか？ それとも、この体の中に流れる『血』？

…それとも、ペンダントが自ら呼んだのだろうか。

彼女にだって分からないことは多いのだ。

ましてや、四聖神将の顕現そのものが、『樹』の解放の第一の徴などとは思ってもいいない。

少女は、『鍵』そのものには力や能力が無いと思っている。あくまでも、『鍵』は使っただけのものと。

だが、今、ペンダントは自ら「時」を判断した。

だからこそ、ペンダントはその使い方を伝えられてはこなかったのだ。「その時」の判断は、彼女にも…「機会」の到来を待ち望む、

多くの存在にも委ねられてはいない。

恐らく、デーズィアがそのことを知ることはないだろう。

知ることは少ないが、それでも彼女がアルと異なる部分が一つだけある。それは、目の前の状況を《真実》として認めていること。

今迄は、確かに『幼艾の国』や自分の『血』について知っていたことも、何処か幻を見ているような感覚であったことは本当だ。だが、それら幻に思えたものをも含め、デーズィアは全てを《真》と受け止めているのだ。

彼女が思っているように、目にしたから…ではない。

その奥に秘められた『何か』がそう彼女に囁くのだ。その声に耳を傾け、受け止めることがデーズィアにはできたのだ。

だが、アルにその声はまだ届いていない…

アルの中の疑念は、だが目の前の少女の悲しみに急速にその色を薄めていく。

…少なくとも、彼女を、デーズィアを悲しませるつもりは無い。

それでもやはり、知っておきたいことはある…

アルは視線を上げると、二人を見守っている四人の男女に話しかけていた。

「悪いが、誰かロムを街まで帰してやってくれねえか」

デーズィアを連れて、あの街まで戻ることは危険だ。だが、ロムをこのまま連れて行くことも難しい。

…いや、巻き込みたくはないのだ。この先、どうなっていくのか、アル自身にも分からないのだ。ロムには、今迄と同じ世界で生きていつて欲しい…そう願っている。

デーズィアをこのまま置いていくことなど、思いもしなかった。

もっとも…この、野犬のように血に塗れた自分を、彼女が受け入れてくれるのなら、だが…

砂舟からロムを腕に抱えて出てきた少年の依頼に、四聖神将は一斉にデーズィアを見つめていた。

その幾つもの視線に、デーズィアも真剣な光を宿すと同じ思いで

頼み込む。

ふっ…と玄武の頬に微笑みが浮かぶ。少女の眼差しに浮かぶ、心からの願い…その優しさが快い。

彼女は隣に並ぶ青龍を見ると、尋ねた。

「できるでしょうか？」

藍色の髪をした青年は軽く頷くと、アルを見た。

「少年よ。帰す場所を、具体的に思い浮かべることはできるか？」

その静かな声に、逡巡することもなく、アルは頷いた。

帰す場所は、もう考えている。

「では、思い浮かべたその場所に、彼を移そう」

青龍が右手を伸ばす。その開かれた掌を見つめながら、アルはついこの間まで暮らしていた街の情景を思い浮かべていた。

今の、この状況に疑念は湧かない。アルは、この四人を認めてはいるのだ。その結果がどうなるのかが分からないだけだ。

少年は、その心に今やはっきりと診療所を思い描いていた。クラウスの親仁の所だ。あの医師なら、生きている限りロムを助けてくれるだろう。それに、マークも間違いない無事でいるはずだ。それだけアルは彼を信頼していた。

この二人の傍なら、俊足のロムも癒されるだろう。

刹那、掌から青い光が発した気がした。

不意に、腕の中の重みを失う。

そこにロムの姿は無い。では、何処へ？

アルの心には、その先の映像が浮かぶようだった。診療所のベッドに横たわるロム。彼を見つけても、それほどまで驚きはしないクラウスの親仁。

…いや、これも現実を映してくれているのかも知れない。

「アル…」

黙り込んでしまった少年を、心配そうな声が覗き込む。

その空色の瞳に気付くと、アルは柔らかな笑みを浮かべた。

「魔法か。どうも、妙な気分だよ、デーズィア」

だが、何だか、安心してしまっていた。

ロムのこと、今の状況も…

…いや。違う。自分は若しかすると、あの街のことを懐かしく思っているだけなのかも知れない。あの街にいた頃の自分をも含めて、全てを懐かしく…

この温かな想いを、郷愁と言うのかも知れない。

よくは知らなかった感情だ。

あの街は、今迄と変わらず、あのままであり続けることだろう。

そのことが、安心感を与えてくれるのだろうか。

「悪かったな、疑ったりして」

デーズィアを見つめる。

今のこの状況は、自分が選んだものだ。自分自身が、ここにいることを選んだのだ。そのことに悔いは無い。悔いがあったとすれば、巻き込んでしまったロムのことだけだったが、それも解決された。そのことにも、安心感を覚えているのだろう。

安心…不思議な思いだ。安心を覚えることなど、殆ど無い生き方をしてきたのに…

「うつん！」

大きく頭を振っている。

その幼い仕草に、一層微笑みが深まる。

その全ての源が、この少女なのだ。

きつと…

「それで、どうするんだ？ エルナシオンへ行くのか？」

「……」

空色の瞳が、ちらと玄武を振り返る。

…静かに彼女が頷くのを見て、デーズィアは躊躇いながらもアルに呟いていた。

「…そうしないと、いけないの」

「なら、そうしようぜ」

「アル！」

そうすることが当然であるかのような応えに、デーズィアの方が驚いてしまう。

「正直、『樹』の封印を解いた後のことについては、俺にも分からない。」

だけどな、デーズィア。この国を出たところで、俺には軍が追跡を止めるようには思えないんだ。それどころか、他の国もその『力』を知って、デーズィアを追ってくるかも知れない」

推測であるかのような話し方だが、アルはそう確信していた。

他国が今も静観しているのは、ただこの情報が信じられなかったからだ。だが、大きな施設や潜砂艦が幾つも破壊され、それでも軍が追跡を止めないとすれば…その情報は、本当なのではないか、そう思う他国も出てくるだろう。これだけ、南部の国境付近で大掛かりな作戦を展開しているのだ。気付かない方がおかしい。

「俺には、そのエルナシオンがどんな所かは分からない。だけどな、そこへの扉を開けて、その国にデーズィアは留まった方がいいと思うんだよ。」

そこだけが、安心して逃げ込める場所なんだ…」

アルは、自分でも驚くほどに優しく、言い聞かせるように話していた。

その国に、どんな存在がいるのか。普通の、人々はいるのか。聞けば、玄武達は答えてくれるだろう。だが、尋ねても仕方が無いことだ。少女が安心して留まることができるのであれば、どんな所であれ、その『幼艾の国』しか無いのだから。

でなければ、逃げ続けるしかない。或いは隠れ続けるしかない。

だが、どちらも生きている限り続けるのは難しい。ましてや、このような少女には無理だろう。

デーズィアは、じっと、鳶色の瞳を覗き込んだまま、長い間黙っていた。

彼女にも、その選択しかないような気がする。アルの言う通りなのだろう。あのロンベルト大佐がどうなったかは知らない。だが、

これから先も、別のロンベルト大佐が現われ続け、『力』を求め続けるだろう…

だが…

…そう。

アルがいてくれるのなら……

次には、だがその言葉を心の中で打ち消そうとする。これ以上、アルを巻き込むことは…彼を危険に晒すことは…

乱れてくる心をどうすればよいのか分からず、少女は沈黙に逃げ込んでしまった。

いつのまにか、夕陽が速やかに大地を茜色に染め始めている。

灰色をした岩壁の影は、起伏に富む大地を滑り、青く霞み始めた彼方を目指して伸びていた。

「はい、アル」

漸くのことと、それだけを告げる。

続けて、言葉を紡ごうとする。言葉…いや、願いか、祈りか。

だがアルはその愛らしい声を遮ると、真剣な表情で空色の瞳を見つめた。

「デーズィア。俺は、平気で物を奪ったり、人を殺したりする人間だ。

こんな俺でもいいなら…その国までは、デーズィアを送らせてくれないか…」

「アル…」

正直に、その可愛い頬には喜びが映し出される。

だが、次にはその笑顔も翳り…

「でも…また、危険な目に…」

自分の目の前で、アルが死んでしまう…それも、こんな自分の為に…

あんな経験は、一度だけで十分だ。

絶対に、もう、アルをあんな目に遭わせたくない…

だが…それでも、願いたいのだ。ずっと、一緒にいて欲しいのだ…

「危険なんて、怖くはないさ」

その言葉に偽りは無い。

「俺は……」

知らず、言葉が途切れてしまう。

軽く、息を吸い込んで……アルは、静かに告げた。

「……俺は、許してくれる限り、デーズィアの傍にいたいんだよ」
「アル！」

思わず、デーズィアはその想いのままに少年に抱きついていた。
一緒にいたい。エルナシオンに入った後も、ずっと、ずっと。
どんな危険の中にだって、一緒に入っていく。

彼だけが死にかかることなど、もう二度と無いだろう。

その時には、自分がアルを護るのだ。

その時には、自分も死を迎えるのだ。

「わたしは知っているもの……」

《本当》のアルを、知っているもの……」

「デーズィア……」

「……ありがとう……ありがとう……」

何度も呟く小さな体を、逞しい腕はしっかりと抱き締めていた。

波打つ黄金の美しい髪に、半ば顔を埋める。

絶対に、彼女を守り抜く。

自分にそれだけの力があるかどうかは分からない。実際、あの大佐には負けたのだ。

だが、今はどんなことにだって勝ってみせる。

クラウスが言っていたではないか。鷹はその《全て》をかけてデーズィアを護るのだと。それが、アルの進むべき『道』なのだと。

それ以外の道を、アルは知らない。

夜の帳が、遙か頭上から静かに音も無く滑り落ちてくる。

美しく澄んだ星辰が闇を背に瞬く中、アルとデーズィアは四聖神将に見守られながら、やがて黄金色の豊かな想いと共に、安らかな

眠りへと就いていた。

「デーズィア、大丈夫か？」

速力を落としたまま、アルは視線を背後に送っていた。

その鋭い瞳が、今は心配に染まっている。

「…はい、アル」

砂舟の中で横になりながら、微かな声が健気にも応えている。

苦しそうな息の下、空色の瞳はなおも元気であることを示そうとするのだが…その仕草が、一層、アルの胸を痛みで貫く。

薄明の始まりと共に目覚めた時には、もう既に、傍で丸くなっていたデーズィアはその呼吸を乱していた。

眠ることがあるのかどうか…四聖神将も気が付いている。少女の異変に驚いて立ち上がるアルを、そつと玄武が押し止めていた。

「安心してしまったのでしょうか。僅かに熱もありますが、危険なものではありません」

悲しみの表情だが、その囁きは落ち着いたものだ。

「治せないのか？」

この儚げな身体にとって、徒に体力を消耗させる発熱は危険だ。

ここは、それでなくても生存が難しい砂漠の中なのだ。

「デーズィア様の御心から生じたものですから。」

心身共に張り詰めていたものが、一気に安心へと転じた為に出てきたもので、病気ではありません」

「…そうか」

このまま、ここに留まるべきだろうか。幸い、ここは岩の『海』だ。潜砂艦の脅威は少ないと考えても構わないだろう。

だが、追っ手が諦めたわけではない。陽光が厳しくなる昼間とはもなく、朝夕の比較的過ごしやすい時に、少しでも移動しておいた方が安全だろう。

考えた末に、アルは速度を控えながらも、砂舟で出発することを選んでいた。

朱雀が指し示す方角へと、少しずつ進ませる。

銀色の髪をした、無口な白虎がデーズィアの上に影を作ってくれていた。彼らにとつて、強烈な日射はまるで脅威ではないらしい。

玄武は少女のすぐ傍から離れず、その小さく愛らしい口許に、時折水を含ませていた。

「玄武さん…ごめんなさい…」

自分が足枷になっている…睫に美しい滴を宿らせながら悲しげに呟くデーズィアに、玄武は温かな微笑みを浮かべると小さく首を振っていた。

「大丈夫です。デーズィア様は、ゆっくりと休まれた方がいいでしょう。」

あの方も、そう望まれているのですから」

玄武が逞しいアルの背中に視線を移すのを見て、デーズィアは正直に頬を染めていた。

だが、はにかみながらも、瞳も伏せず少女は玄武に笑みを返していた。

「…はい…ありがとう」

心地好い音色で囁くと、彼女は心からの安らぎと共に瞳を閉じていた。

「まだ、随分と離れてるのか？」

今、何処を走っているのかもよくは分かっていない。

『海』にある目印は、僅かなものだ。しかも、周囲は岩盤から、移り変わりの激しい砂地へと変化してきている。

アルは、朱雀が指し示す、その指先だけを頼りに砂舟を滑らせていた。

「そうね。この速さなら、明日の夕方には扉に着くと思うわ」

「そうか…」

速度は落としたままだが、もうすぐ、耐え難い痛みを伴って陽光

がこの舟を襲うだろう。天頂までの道程の半ばを過ぎてはいない今でも、その光は眩しく砂を灼いている。

「どれくらいの暑さなら、耐えられるんだ？」

「あら、あたし達は平気なのよ」

予想通りの返答に、アルは小さく頷いていた。

そんな彼を、朱雀は楽しそうに見ている。

妖精族の中でも力ある存在として畏れられ、敬われている自分達を前にして、この少年はまるで動じていない。自分達の力を知らない、或いは感じ取れていないわけではない。未知の存在に対する潜在的な恐怖や不安はあるようだが、何よりもアルはその鳶色の瞳で判断し、自分達を認めているのだ。

勇気だけではない。知恵も慧眼も備える彼なら、護りの対象としても相応しい。

「…なら、今日は昼過ぎまで走ろう。」

それから休めば、明日の夜には行き着けるんじゃないか？」

一刻も早く、ディースィアを休ませたい。だが、今から夕暮れ時まで休んだとしても、その後、彼女を動かすことは難しいだろう。

今は少しでも頑張ってもらって、一気に休ませた方がいい。

それに、ここで砂舟を停めると、優しいディースィアのことだ。自分が足手纏いになっているのでは…そう思ってしまう。

勘違いであつたとしても、そんな想いを抱かせたくはない。

「でも、あなたは大丈夫なの？」

親しみを込めて、朱雀が尋ねる。

鋭い瞳は、前を見据えたまま、微動だにしない。

僅かな沈黙が訪れる。その後、乾いた唇は、押し殺したように掠れた声を零していた。

「やってみるさ」

ディースィアのことは、彼ら、四聖神将が守ってくれるだろう。心配はしていない。

だが、自分はどうか。

危険なことは、『海』で育ったアル自身が一番よく知っている。

正午過ぎまで砂の海を旅するなど、自殺行為だ。

以前の彼なら、とてもそんな判断を下さなかっただろう。

だが、デーズィアの為なのだ。しかも、考えることは、ただ自分のことだけでいい。

そうであれば、できないことはない。

朱雀も、そんなアルの判断を分かっているのだろう。それ以上は何も言わない。

金色の砂粒が茫洋と広がり始めている。

死の領域であつたとしても、ここ、砂漠は「大地」の力が最も強い場所であり、その力は即ちあらゆる存在の「母」となる。

その地母神の胸の上を、小さな砂舟は時代の結節点を目指して走り続けていた。

気付けば、朱雀が明るく陽気な笑みを向けている。その奥に柔らかな温もりを感じながら、アルはふと気になっていたことを尋ねていた。

「一つ、訊いていいか」

「どうしたの？」

静かに、言葉を選びながら続ける。

「エルナシオンは、何処にでも存在してるんだよね？」

確かデーズィアはそう教えてくれた。

「そうよ。」

今、ここにだって存在しているわ」

軽く、手を滑らせる。周囲を、辺りの砂地を示しながら。

「この世界と、互いに関係を交えることは無いんだけどね」

「なら、どうして、あのペンダントで、ここに扉を開けられないんだ？」

あの《鍵》は、扉を示すだけなのか。それとも、扉を開ける為のものなのか。いや、それだけではなく、開けた途端に『創始の緑樹』

の『力』まで引き出してしまふのか。

デーズィアにも分らない、最も曖昧な部分だ。

「当然でしょ？」

だが、朱雀は面白そうに笑い声を上げている。

本当は、アルも気付いているはずなのだ。ここに扉を開けられるのなら、デーズィアをわざわざ危険な目に遭わせたりなどしない。

「あの《鍵》は、型に合った扉しか開けることはできないの。つまり、守り手が『樹』に封印をして、この世界へとやって来た扉だけしか、開けられないのよ。」

そして、その場所や開け方を伝えるのが、あたし達の最初の役目」
「……だろうな」

それはつまり、デーズィアの意志など挟み込まれる余地が無い決定なのだ。

朱雀達を召喚しなくては、エルナシオンへの扉は開けることができない。その開け方や位置は伝えられていないのだから。

デーズィアにしても、或いは万が一、軍がペンダントを手に入れたとしても、誰にも入り口は開けられなかったのだ。

四聖神将を召喚することも、扉を開けることも、全ては『何か』による定められた流れでしかない。

……だとすれば。

デーズィアは、少なくとも、その「機会」が訪れるまでは、ただ《鍵》を持っているだけの者でしかなかった。

それだけでしかなかったのに：今迄、こんなにも苦しい目に遭わされてきたのだ。

思わず、齒軋りしてしまう。

その『何か』とは、何だ？ 何故、その為に苦しまなくてはならない？

運命？ そんなものが何処にある？

若しもそんなものがあるのなら、何故、自分達は、今、こうして、迷い、決断しなくてはならない？

「命令」されるだけでいいではないか。

少なくとも、アルは自分自身が操り人形だとは思っていないかった。この今も、『何か』は存在しているのかも知れない。だが、それは決して運命ではない。

「……」

朱雀には、もっと大きな視野が与えられている。だが、だからと言って、今、目の前で憤りを感じているアルを蔑むつもりはなかった。

自らもまた、更に大きな存在の欠片でしかないのだ。

朱雀の視線に、不意に我に返ると、アルは更に尋ねていた。

「『樹』の『力』だけだな」

「ええ」

「解放したら、その扉を通じてしか使えないのか？」

具体的に、どんな『力』なのかはよく分からない。だが、軍が追うほどのものだ。

扉は開けるつもりだが、できれば『力』は解放したくない。或いは、解放してしまったとしても、扉を通じてしか用いることができないのなら、悪用されても対処の方法はあるだろう。

「違うのよ。」

『樹』の『力』は創造の力。エルナシオンすら、自由に創り変えることができるの」

「……最悪じゃねえか」

「使い方によつてはね」

そこで朱雀は、興味深そうにその鶯色の瞳を覗き込むと言った。

「あなたなら、『樹』の『力』をどうするの？」

「どちらにせよ、『力』は解放されることになるわ」

「……それもまた、決められた流れか。」

少年は、砂舟の操縦に専念するかのように、朱雀の視線を僅かに避けてしまった。

……デーズィアは、頼めば、アルの言う通りに『力』を使ってくれ

るだろう。

彼自身は、その巨大な『力』にまるで魅力を感じない。だが、軍を倒すことはできるだろう。デーズィアを護り続ける為に使うこともできるだろう…

……いや。

分かっているのだ。それは新たな敵を呼び寄せることでしかない。楽天家が持つ空想だ。そんな夢想到に縋れるような、そんな世界をアルは生きてきたわけではない。

一瞬の逡巡だ。

アルは鋭い瞳で朱雀を見遣ると、静かに言った。

「俺なら、その『力』で、『創始の緑樹』そのものを失くしてしま
うな」

黄金色に燃え広がる、砂の微粒子が目にも痛い。

…流石に、そろそろ限界だろうか。

アルは朦朧とし始める意識の中で、『海』の航行を止め、休める場所を探そうとしていた。

止め処なく熱線を滴らせる溶鉱炉は、既に中天を過ぎて久しい。急がなくては。

だが、周囲には影を作ってくれそうな岩場は無かった。何処を見ても、砂の起伏が続いている。

（…天幕を使うか）

これだけの人数では心許ないが、我慢するしかないだろう。

デーズィアは大丈夫だろうか。今迄、よく頑張ってくれている。振り返って確認しようとする、逆に彼女の方が心配そうに見守ってくれていた。

その優しい視線に、安心させるような柔らかな笑みを返す。

…いつの間に、そんな笑顔ができるようになったのだろう。アル

自身は、まるで気が付いていない。

十四歳の少年は再び前に向き直ると、ゆっくりと砂舟を止めようとした。

「待つて！」

不意に、鋭い声がする。

朱雀だ。

背中に緊張を走らせるアルに、彼女は前方を指差して続けた。

「あれ、何だと思う？」

「…？」

鷹の鋭い視線が、地平の際に沿って滑る。

…あれは…？

「…小屋…だな」

見えているものが信じられず、アルはその単語を発することに躊躇いを感じてしまった。

この、砂だけが広がる砂漠の中に、たった一軒、小屋がぽつねんと立っているのだ。

ゆっくりと、慎重に近付いていくと…間違いはない。確かに、この『海』の中に存在している。

だが、一体誰が、この死と隣り合わせの大地に、小屋など作ったのだろうか。

「幻覚…じゃないよな」

朱雀が、その呟きに頷き返す。疲れ切っている自分とはかく、彼女達は幻覚などに惑わされたりしないだろう。

なら、あれはやはり、本当に存在しているのだ。

「…行くぞ」

少し、噴射を強める。細かな砂が巻き上がり、砂舟は速度を高めていた。

廃墟なのかどうか、今はどちらでも構わない。まず、デーズィアを十分に休ませることができればいいのだ。

それに…どうも、あの小屋が自分を招いているように感じられて

仕方が無い。

毘：だろうか。四聖神将が傍にいる状況では、そのような不可思議な毘があったとしても信じられる。

：だが、そんな危険を、どうしても感じられないのだ。

まだこの遠方からでは、扉の区別などつくはずもないのだが：小さな木の扉が、自分やデーズィアに向けて開かれている気がする。

その感覚は、小屋が近づくに従って一層強くなっていく。

（あれは：）

そんな少年の横で、朱雀は驚愕のあまり、思わず低い呻き声を上げてしまった。

背後を振り返ると、皆も厳しい顔付きで頷いている。

「どうかしたのか？」

「：いいえ、大丈夫よ」

敏感に反応するアルには、そう応えておく。

（珍しいこともあるものね）

だが、デーズィアの決断は、それだけ重要なのだ。

確かに自分達、妖精族や精霊達だけで決めることではないだろう。今や目の前に佇む小さな小屋を見ながら、朱雀は僅かに苦笑していた。

だからと言って、直接関わるほどのものだろうか。この二人の準備が整ったと言い難い。だが、今更、急いても仕方が無いように思える。

『時間』を超越したはずの存在が、時間に囚われているかのような感覚を覚え、朱雀の苦い笑みは深まる一方だった。

アルが、静かに空気の噴射を止める。

：彼は大丈夫だろうか。

足下の震動が消えていくのを感じながら、そんな心配をしている自分にも朱雀は驚いていた。

日干し煉瓦を積み上げた側壁には、窓がまるで見られない。もともと砂漠では開口部は極力抑えるが：光を入れないわけではない。

天窓でもあるのだろうか。

砂の上にありながら、しっかりと根を張っているかのように安定して建っている。

廃墟…… いや、そうではない。今も息衝き、穏やかに蠢きながら、アルとデーズィアを迎え入れようとその小屋は誘っている。

小さな、木の扉が目の前で閉じられている。

アルは後ろのデーズィアの許に歩み寄ると、そっと彼女を抱き上げながら言った。

「入るか？」

「……」

少女は、何も言わずに頷き返す。

彼女自身も、自分達に話しかけてくる『言葉』を感じているのだ。アルも黙って頷く。

……導かれている、誘われていることを分かっているながらも、それに反発する気持ちはない。

アルはまだ、自分自身を信じていた。

四聖神将も、二人を阻もうとはしない。それはつまり、差し迫った危機が無いことを示してくれている。

アルは少女を抱いたまま小屋へと近付くと、静かに扉を叩いた。

「お入りなさい、アル、デーズィア」

流れ出してきた声は、心身を共に、柔らかな温もりで包み込んでくれる。

名を呼ばれたことに対する疑問も思い浮かばないまま、鷹は扉を押し開いていた。

清澄な、翠色の光が不意に溢れ出してくる。

力ある光の波は驚く二人を飲み込み、あらゆる疲れや心配を洗い流していく……

「入ってもいいのよ、アル」

光の毛布の向こう側、優しい声が聞こえる。

アルはその声に従い、足を一步小屋の中へと踏み入れていた。

翠の光の海に囲まれ、一人の女性の姿が浮かび上がってくる。

この光は、小屋の四方の壁から均質に流れ出しているようだ。そう気付いた途端、満ち溢れていた光は波が引くように壁際まで退いてしまった。

「あなたは…」

デーズィアのものよりも、更に一層澄んだ煌きを放つ黄金色の髪が腰の辺りまで波打っている。円らな金色の瞳は幼さを感じさせるが、その奥底には『何か』の流れが秘められているようだ。

畏怖の念を抱きながら、いつしかデーズィアはアルの逞しい腕の中から滑り降りていた。

身体の不調など、もうまるで感じられない。

そんな少女に向かって、彼女は僅かに腕を広げると微笑んだ。

「ようこそ、デーズィア」

迷いなどしない。十二歳の少女は、心からの喜びと共にその女性の胸に飛び込んでいた。

アルも、鳶色の瞳を微かに細めたものの、全くそれを止めようとはしなかった。

「デーズィア様」

突然、背後から玄武の声が聞こえてくる。

振り返ると、彼らの誰もが敷居を越えてはいない。

「私達は、外で見張りをしております」

女性の胸元に安心して顔を埋めていたデーズィアは、その穏やかな声に慌てて振り向こうとした。

だが、突如、木の扉が閉められてしまう。

「おばさま、どうして…」

見上げる少女の視線の先で、慈愛に満ちた瞳が優しく応えていた。「きつと、私が入ることを許さなかったからでしょうね。」

彼らは、妖精族の力ある存在ですから」

よく分からない。だが、それ以上、デーズィアは問いかけたりしなかった。

そんな彼女の額に愛おしむように口付けると、女性はデーズィアを少し離して言った。

「少し、水を浴びましょうね。」

「熱も疲れも、すぐにあなたの中から消えてしまっわ」

「はい、おばさま」

そんなもの、もう身体にも心にも残っていない気がするのだが……心の底から信頼し切った様子で応えようと、デーズィアは女性のしなやかな指先に導かれ、右手奥に現れた扉へと向かう。

その二人を、アルは一言も口にできずに、ただ見送っていた。

僅かな心の動きはあるものの、それが表現や動作にまで変わろうとはしない。まるで、自分が自分でないかのようなようだ。

……いや、確かに、まだ、ここには「自分」がある。

例え、どのような状況であっても、相手がどのような存在であっても、それを見失ってはならない。

扉を抜ける瞬間、一度だけ、デーズィアが振り返る。その面には、大好きな母親に手を繋いでもらっている子どもの、満足そうな笑顔が見えていた。

そして、少女は扉の向こう側へと消えてしまった。

「わ……ああ……」

感嘆の溜息を吐く。

女性の後に続いて入った部屋は、一面、青い薄闇で覆われている。だが、その闇は恐怖や冷たさを感じさせるものではない。

見上げる丸天井に金や銀の美しい星を引き連れながら、デーズィアをそっと包み込み、守ってくれる……そんな淡い青闇だ。

その星が瞬く天井を、部屋の中央に立つ四本の柱が支えている。表面を薔薇石膏が覆う柱の足下では、銀光を放つ円形の水面が静かに佇んでいた。その水面は、吹いてもいない風によって、緩やかな波紋を描き出している……

「どう？ 気に入ってくれたかしら」

小屋の外から見た限りでは、こんな大きな部屋は存在していなかったはずだ。だが、デーズィアはそんなことなど、まるで気にもしていない。少女が気にしているのは、全く別のことだ。

横に並ぶ麗人をそつと見上げ、遠慮がちに声を零す。

「このお部屋、使わせてもらってもいいんですか…？」

その言葉に、女性は微笑むとそつと少女を抱き締めていた。

「使ってもらえたら、嬉しいわ」

「ありがとうございます！ …あの…」

もつと、何かを言いたい。だが、想いは、言葉は胸の中に生まれるのに、声が形にならない…

そんな幼い唇を、女性は美しい指先で塞いでいた。微笑を深め、続きを遮る。

「それが、相手に対する《本当》の想いなら、声にしなくてもいいの。

《全て》は、『言葉』として、相手にきちんと伝わるものよ」

「…はい、おばさま」

デーズィアは真剣な表情で頷いていた。

そんな少女に笑いかけながら、優しい手つきで衣服を脱がし始める。

女としての美しさを、少しずつ帯び始めている…そのか細い体からは、ペンダント以外のものが全て取り払われていた。

恥じらいなど、この女性に対しては思い浮かびもしない。裸のまま抱き上げられながら、デーズィアは安心した小鳥のようにその腕の中で丸くなっていた。

小屋の女性は水際へと歩み寄ると、深い慈しみに満ちた声で言った。

「ゆつくりとお休みなさい、デーズィア」

すつ…と、銀色の水盤へとデーズィアの体が滑り込む。

空色の瞳が開き、再び水面から現われた時には、もう既に優しい女性の姿はこの部屋から消えてしまっていた。

柔らかな翠色の光が、壁際で明滅している。

デーズィアが消えた扉を暫くの間見続けた後、アルは不意に我に返ったかのように、辺りへと視線を流していた。

左手にもう一つ、扉が見える。

左右の扉の間では、眩い黄金色の閃光を発する炎が、暖炉の中で揺れていた。

砂漠の夜は冷える。だが、家屋の中では、夜の最中でも暖炉など必要無いはずだ…分かつてはいるのに、そのことにアルはまるで違和感を覚えていない。

ここには、炎が揺らめいていなくてはならない。

だからこそ、朱と黄に彩られた暖炉の火が、鋭い光の粒を抱いてここにあるのだ。

ただ、それだけのこと。

それだけ。

更に、目を転じる。

小屋の中央には、三つの椅子に囲まれ、テーブルが設えてある。

淡い木目が走る卓上に置かれているのは、編み棒だろうか。二本の編み棒の間には、微かに瞬く『何か』が渡され、巻き付いているようにも思える…

鋭い瞳が細められた時、この小屋の持ち主が突如彼の目の前に立ち塞がっていた。

「あなたは、きつと水浴びなどしないでしょうね」

不意に現れた微笑みにも動じず、鷹は黙って頷き返す。

「でも、その血と埃にまみれた衣服や体は、デーズィアには相応しくないと思わない？」

「…そうですね」

呪縛のようなその魅力から、少しずつ解放されている気はする。

…いや、解放してくれているのだろうか。

それでも、アルの心中に疑念は湧いてこない。

疑いを抱くこと、それ自体が彼女に対して失礼なことになるだろう。

黒髪の下、鋭く煌く鳶色の瞳に、女性は満足そうに笑みを深め続けていた。

「では、これを使いましょう」

音も無く暖炉へと歩み寄り、次には躊躇いもせずに炎の中へとその整った指先を滑り込ませる。

流石に、息を飲まずにはいられない。

そんなアルの前で、彼女は何事も無かったかのように手を炎の下から引き出すと、その中にあるものを少年に見せていた。

砂…だろう。黄金色に輝く一盛りの砂が掌に見える。

とても軽く、吐息一つで宙に散り、消えてしまいそうでいながら…何故だろうか、深い重みでそこにあるように思える。そこになくてはならない、だからこそ、そこにある…

そこに存在する『力』を実際的に知ったわけではないが、彼の瞳はその片鱗を感じ取っていた。

「これを、あなたに浴びてもらいましょう」

「はい」

即答する少年に、女性は優しく問い返していた。

「熱そうだとは思わないの？」

黄金色の澄んだ瞳を真っ直ぐに捉える。

今はもう、落ち着いた気持ちで自分の言葉を伝えることができていた。

「熱いかも知れません。

でも、その砂であなたが俺を傷付けるのなら、それはきっと、そのことに何か意味があるのでしょ

う」

その言葉に、女性は再び満足そうに頷いていた。

「鷹のアル。あなたのその瞳には、《真》を見る力があるようですね。

でも、今はまだ、デーズィアに相応しいほどではありません。

勿論、デーズィアも変わらなくては、あなたに相応しい女性にはなれないのですけれどね」

「デーズィアが変わるのですか？」

あの純真な少女は、アルにしてみれば完全な存在だ。

だが、目の前の佳人は静かに続けている。

「そう。正しいことを為すには、力も、知恵も必要です。受身だけで、何事をも為すことはあまりにも難しい…」

デーズィアは、あなたと出逢ったことで、そのことに気が付き始めています。

ですが、まだ邪なものさえも包み込んでしまっ、大きな『正義』を知ってはいません。

アル。何かを、誰かを正しい目的で守り抜く為には、『静』と『動』を合わせた力が必要なのですよ」

「…はい」

しつかりと頷く少年に一步踏み出すと、その女性は手の中の黄金の砂を彼に振りかけていた。

熱さは、まるで感じない。

アルが見ている中で、驚いたことに衣服からはあらゆる汚れが落ち、その衣服そのものも新しい質素な素材のものへと変わっていく。白を基調とした柔らかな布地には飾り一つ見当たらないが、それは目にする者に美しさと安らぎを感じさせてくれる。

「…いや。」

それ以上に変化したものがある。

だが、それはアルの鋭い瞳にも、捉えることができないものだった。

「どうですか、アル。」

あなたは、デーズィアに相応しい人間になりたいと思いますか？」

「はい」

正直に、アルは答えていた。

その鶯色の双眸には、今や素直さと限りない優しさが穏やかな光

となつて満ちている。

だが、彼の胸中がどれだけ黄金の光に満たされても、未だ《影》は巢食っているのだ…

愛おしむように頷くと、女性は暖炉の横、向かつて左手の扉をゆつくりと指し示して言った。

「では、あの部屋にお入りなさい。

見事に事を為せば、あなたは第一歩を踏み出したことになるでしょう」

「何を為せばいいのですか？」

問い掛けるアルに、澄んだ瞳は鋭く彼を見据えた。

「私が望んだことをですよ、アル」

少年はそれ以上は何も訊かず、すぐに扉へ近付くとそのまま入つていった。

アルが扉を閉めた直後、右手からは純白の美しい衣装を身に纏つたデーズィアが顔を覗かせていた。

黄金色の髪はその清らかな煌きをいや増し、細い手足は透き通る光を帯びている。空色の瞳には、最早怯えや疲れも見えず、その心の儘に翳り一つ無い優しさを映し出していた。

「おばさま、ありがとうございます…こんなに素敵なお洋服までいただいて…」

「いいんですよ、デーズィア」

何時の間にか、女性は椅子に腰掛けると編み棒を手にしている。

編み棒には細い、今にも切れてしまいそうな程に細い金色の糸が渡されており、編み上がった布地は卓上に折り重なっていた。

「おばさま、アルは…？」

女性の傍に歩み寄りながら、彼の姿が見えないことに小首を傾げている。だが、次には、その視線は布地に織り込まれた銀の流れに吸い寄せられていた。

金色の光の中に、幾筋もの銀の糸が複雑な模様を描いている。その美妙な銀光の図柄に見惚れ、捕らわれ…もう少しで、デーズィア

は女性の応えを聞き損ねてしまふところだった。

「過去の部屋に入ったのよ。」

過去を認めなくては、未来もありませんからね」

足を止め、女性へと目を向ける。

「ここにいる私にしても、布地を見て過去を知ることとはできても、今と未来は編み目から推測するしかできません。私自身にはできることでも、それぞれの様相は、それぞれの世界での制限を受けてしまふもの。でも、時間の流れを遥かに見渡せば、制限の中にあっても、自ずからこれからの模様は描き出せるものよ」

女性はそれだけを言うと、アルが入っていった扉へと優しさと厳しさの織り交じった視線を滑らせた。

デーズィアも、つられて瞳を扉へと向ける。

その瞳に心配の色が浮かぶのを見て、女性は微笑みながら問いかけていた。

「デーズィア。あなたは、アルのことがとても大切ですか？」

「……はい」

向き直ると、はにかみながら小さく……だが、しっかりと頷く。

「確かに、あなたの心はアルの全てを知っているのでしょうかね。」

でも、あなたの意識は、理性は、まだアルの全てを知ろうとはしていません」

「え……？」

「デーズィア。あなたの意識は、アルの全てを受け入れることで、あなたが変質することを恐れているのですよ」

「……」

「正確には、あなたの意識の一部ですけどね。」

ねえ、デーズィア。あなたは、アルを、これからもずっと、大切にしていきたいと思っていますか？」

「はい」

戸惑いながらも、即答する。

そんな少女に笑みを深めながら、小屋の女性は部屋の奥を指先で

示すと言った。

「では、あの部屋に入って御覧なさい」

振り向くと、いつしか暖炉の右手に二つ目の扉が現われている。

「あなたの素敵なアルを、本当に受け入れる為に……」

その静かな言葉に背中を押されながら、デーズイアはそつと音も立てずに歩み寄ると、扉を押し開いていた。

灰色の海が、何処までも広がっている。

風が強く、砂粒だけでなく小石までもが入り混じった飛沫が、絶え間無くアルの体に叩き付けられていた。

彼が立ち尽くしているのは、粗末な港だ。外来からの船舶も訪れず、倉庫という名の小屋も、崩れかけたものが一つあるだけに過ぎない。

その倉庫の前。熱風に削られていく石壁の前で、今、幾つかの罵声が輪になって幼い子どもを取り囲んでいるのが見えていた。

「おい、俺達を裏切ったんだってな」

一人の少年が、……六歳程だろうが、男の子の体を蹴り上げる。少年の方も、決してそれほどでも年上であるようには見えない。

既に血と涙と砂で汚れ切った子どもの顔は、苦痛と恐怖で狂い出しそうに歪んでいる。何かを話そうとするが、声すらも最早出てこない。息の塊りだけが、押し出され、大地に落ち、そのまま風に消されてしまう。

「あいつらに加わりたいんなら、別に構わねえけどな。」

その時まで、生きていられたらの話だけだなあ？」

若者が嘲りながら、翳した鉄の棒を振り下ろそうとする。

だが、次の瞬間、その手の中から鉄棒は失せ、同時に後頭部の痛みで若者は昏倒してしまった。

「何？」

慌てて、他の少年や若者が身構える。

だが、それら五人が目を向ける間もあればこそ、一人は視認する

よりも早く殴り倒されていた。

「情けないことをしてるんじゃないよ」

感情の欠片も無い、鋭い視線が残った四人を睥睨する。

鷹の冷淡な瞳に射竦められ、まるで動けない若者の一人が、瞬く間に地面に横たわってしまう。

…造作ない。

「あっ！」

「驚くことでもないだろう。」

さっさと逃げるんだな」

静かにそう言つと、アルは威嚇するように鉄の棒を突き出していった。

残った少年達は貫く眼光から無理やり目を逸らすと、急いで逃げ出してしまふ。倒れた仲間を助けることもしない。

「大丈夫か？」

アルが跪き、子どもの傷の具合を確かめようとした刹那、背中に冷たい気配が走る。

直後、体は子どもを抱え、横に飛んでいた。

すぐ脇を風が吹き抜け、少し遅れて銃声が耳に届く。

転がりながら振り返ると、視界の隅に、逃げたはずの少年が拳銃を構えている姿が映る。

「チッ」

激しく舌打ちすると、アルは子どもを放し、まだ手の中にあつた鉄の棒を投げ付けていた。

真っ直ぐ飛んでくる棒を避けようと、二発目の銃弾はあらぬ方へ消えていく。

…次の銃弾は、打ち出されもしなかった。

素早く身を起こしたアルは折り畳んでいたナイフを抜くと、鉄棒のすぐ後から走り寄り、少年に斬りかかっていたのだ。

切っ先は躊躇いもしない…

噴き出す鮮血で、ナイフが、腕が、赤く染まる。

見事な身のこなしで、彼はそのまま傍で同じく拳銃を構えていた少年の頸動脈をまがうことなく切り裂いてしまった。

最後の一人は、震えながらもナイフを手に向かってくる。

だが、ただ目を見ただけで、アルの鋭利な視線に貫かれただけで、少年はそこに浮かぶあまりにも冷酷な光に勢いを殺いでしまい…次には、心臓を正確に突かれていた。

…造作ない。

自分の体が血に染まり、足下に最早息をしない『物』が転がっても、アルは顔色一つ変えていなかった。

当然だ。

手加減をすれば、後になって自分や仲間に危険が及ぶこともある。圧倒的な力の差で押し潰さなくては。その結果、相手を殺してしまっても、仕方が無い。その方が安全なのだから。

得物を手にした者は、自らの力を過信する。それだけに、一層、危険なのだ。

同時に、それは弱みを晒すことにもなる。そこを狙えばいい。

鷹の視線だけで身を竦め、震える少年達だ。得物だけを失っていたら、どうしただろう？ …そんな問いなど、アルの中に生まれもしなかった。

「おい、もう大丈夫だぜ」

横たわり、ぴくりとも動かなくなった少年の衣服でナイフを拭くと、アルは男の子を振り返っていた。

だが、その言葉に我に返ると、男の子は悲鳴を上げて街の方へと逃げ出してしまふ。恐怖に泣き叫ぶ声を聞きながら、アルは軽く舌打ちをしていた。

「なんだ、折角助けてやったのに」

質素な白い衣服も、今は再び血と砂に塗れている。

アルもまた、街の中へ向かおうと足を踏み出した瞬間、目の前に豊かな金髪を揺らす女性が立っていることに気が付いた。

全ての景色が弾け、崩れる。

直後、彼は柔らかな翠色の光に包み込まれていた。

周囲の壁は、柔らかな翠の光を投げかけてくる。

その光の海に身を浸しながら、目の前で彼女は黄金色の瞳を曇らせ、黙ったままアルを見つめていた。

小屋の中心で立ち尽くしながら、アルは呆然とした表情を隠すこともできなかった。

…恥ずかしさと、悔しさと。

思わず床に落とした視線の先で、右手の鮮やかな血痕は少しずつ薄れ消えていく…

不意に、両の拳を握り締める。

自分は…やはり、どれだけ願っても、デーズィアに相応しい人間にはなれないのだろう……

拳の隙間から、赤い糸が一筋流れ出す。

唇を噛み、体を震わせながら頹れてしまいそうな少年に、女性は哀れみの色を瞳に映すと静かに尋ねていた。

「アル…私が望んでいたことが、今は分かりますか？」

「……はい……」

搾り出される声に、彼女は続けた。

「では、もう一度だけやってみましょう」

「え？」

それは、思いがけない言葉だった。

正直に、アルの瞳には喜びが満ちていく。彼は、まるで鷹らしくもない反応をしている自分に気付いてもいない…

そんな少年に微笑み返すと、女性は美しい指先を再び、同じ暖炉の左手にある扉へと向けた。

アルは、それ以上は何も言わずに、躊躇いもせず扉へ駆け寄るとそこを抜ける。

「…私の推測した模様は、運命の女神のそれとは異なるのでしょうか」

大地に根ざした小屋の主は、アルにはまだ見るできない卓

上の敷布を振り返ると、憐憫の情を浮かべ静かに呟いていた。

扉の向こうに踏み出した途端、漆黒の闇に包まれる。

自分の指先さえ見えていない。

見上げても星は無く、吹く風も感じられない。

静寂と暗闇が、全てをデーズィアの前から隠してしまっていた。

先程までの浴場とは、随分違う所だ……そう認識するや否や、少女の胸は動悸を早め、恐怖が急速に襲い掛かってくる。

声にもならない悲鳴が、愛らしい唇から迸る間際、彼女の正面に灰色の点が現われていた。

驚いて、声を飲み込む。息を止め、じっと見つめる空色の双眸の前で、灰色の点は面となり、広がり始めた。

暗闇の世界が、灰色の空間へと塗り替えられていく。

一点から四方へと走り出した灰色の波は、震えるデーズィアの周囲を巡り、背後で再び一点へと収斂する。

……いや。

振り向く少女の目の前に、漆黒の闇がただ一点だけ、まだ残っている。

それは待つほどもなく、不意に大きく波打ったかと思うと、少しずつ膨張を始めていた。

灰色の空間を再び消そうとしているのではない。幅と高さとお行ききを持った、立体物へと変わろうとしているのだ。

ただただ身を震わせながら見守ることしか出来ないデーズィアのすぐ鼻先で、それは彼女と同じ大きさにまで膨らみ、人の輪郭を描いていく。

目や鼻の区別は無い。だが、輪郭はあまりにもはっきりしている。背に流れる、豊かな髪さえも……

（あれは……わたし……！）

他の誰でもない。あの闇でできた物体は、デーズィア自身にそっくりなのだ。

ふと、右手の灰色の空間に映像が浮かび上がる。

音も無く、動きも無い。

だが、そこに現われた姿に、少女は心から安心して泣きそうになっていた。

「アル…」

彼なら、どんな存在からでも守ってくれる。

喜びから駆け寄ろうとしたデーズィアの前に、彼女の《影》が割り込み、先にアルへと辿り着いてしまう。

刹那、アルの姿が揺らめく。

…それは、デーズィアがよく見知っているはずのアルなのだが…
何処かが違っている。

重い暗闇が、少年の姿を包んでいる…

その映像が変化を始めた。

鋭く冷たい光が鳶色の瞳に宿り、今やナイフを手に誰かを殺そうとして……

「やめて…やめて…アル……」

彼の右手が、赤く染まっていく。

アル自身は、眉一つ動かさない。冷酷なまでに「何か」を切り刻んでも、まるでその表情は変わらない……

いつしか、デーズィアの頬は血の気を失い、そこには美しい煌きが止め処なく流れ落ちていた。手を胸元に強く押し当て、必死に目を逸らそうとするのだが…それは叶わなかった。

映像は次々と変化していく。

薬物に手を出し、醜く頬を緩めている姿…誰かとベッドの中で纏れ合っている姿…

「…いや…いや……」

何故、こんな映像を見せられている？ 何故、こんなにも辛いものを…

今では、デーズィアにも分かっていた。

これらは全て、自分と出逢うまでにアル自身が行ってきたことな

のだ。

アルの《全て》を認めるのなら…今迄の彼の『過去』についても受け入れなくてはならない。

小さな胸の中を、恐怖と絶望が満たしていく。黒く、どろりとした粘液が体の中を広がり、手足は痺れ、やがて感覚が失せていく…

何も…もう…誰も、もう…信じない……

…アルも…そう、アルだって……

どす黒い闇が、優しい少女の胸中を支配してしまう寸前、小さな黄金色の閃光が煌く。

小さな…小さな光だ。

同時に、深く静かな声が漣のように広がってくる。

「アルの『過去』は、きつと、この通りだったの…」

自分の声、だろうか…

「でも、これは『今』や『未来』とは違うの」

……

「『過去』が《本当》とは限らないもの……」

……

自分にとって、《本当》のアルはどんなアルなのだろう？

…問いかけるまでもない。

今のアルこそ、自分を必死になって、力の限り守ってくれるアルこそが、デーズィアにとって《本当》のアルなのだ。

過去だけが、《本当》ではない。

自分は、《本当》のアルを知っている。

絶対に、彼は自分を裏切ったりはしない。

信じないなんて、有り得ない。

少女の胸に、温もりが満ちていく。黄金の閃きは波となり、速やかに暗闇を追い出していく。

目の前には、立ち尽くすアルの姿があった。

体が温かなうねりに浸されるに従って、そのアルから影が滲み出てくる。

黒い闇は緩やかに流れ、デーズィアの背後に集まるとやがて人の姿を成し漂っていた。

輪郭が目の端に見える。

…あれは、そう、デーズィアの姿だ。

灰色の背景の中で、アルはその頬に優しさに満ちた笑みを湛えてくれている。

映像だとは分かっている。分かっているものの、素直にデーズィアは喜びと安心の溜息を吐いていた。

突然、少年のすぐ後ろに一人の軍人の姿が現われる。

（あれは…！）

ロンベルト大佐だ。感情などまるで映さない、冷徹な視線がアルを刺している。

手に光るのは、銃だ。

「危ない…！」

迸る悲鳴に、アルが振り返る。

デーズィアも駆け出そうとした瞬間、背後から彼女自身の声が聞えてきた。

「助けなくていいのよ…」

思わず、足が凍りつく。

「アルなんて、今迄何人も人を殺してきたんだもの…」

少女自身の声は続く。

「…殺されても、仕方が無いわ」

大佐も、引き金に指をかけたまま止まっている。

「アルがしてきたことは、悪いこと…犯罪なのよ…」

アルも動かない。

「…認めるなんて、絶対にできない」

時間が澱み、全てが沈積していく。

「悪い人間を助ける為に、危険を冒すなんて…」

沈む…沈み込んでしまう…灰色の水底へ……

「…か」

俯き、前のめりに倒れそうになりながら…

「構わない…」

愛らしい口許は、必死に声を押し出す。

「構わない、構わない！」

空色の瞳を強く閉じ、全身で叫ぶ。

「今迄、アルは本当に、必死になつて守ってくれたもの！

『過去』は変わらない…でも、『未来』は変わるのよ！

わたしは、アルを信じてる。わたしは、アルを守りたい。

わたしは《本当》のアルを知ってるんだもの！」

時間が流れ始める。

デーズィアはアルと大佐の間に割って入っていた。

アルは今迄、ずっと守ってくれた。今度は、自分が守らなくてはならない。

『過去』のアルは血と暴力と犯罪で染まっていただろう。

だが、アルは唯一人だ。

そして、その唯一人のアルを、裏切るつもりなど無い。

銃声が轟く。

デーズィアは目を瞑り、痛みに耐えようとした。

絶対に、わたしはここを逃げ出したりしない……

不意に、デーズィアは自分が柔らかな腕に抱かれているのに気が付いた。

ゆっくりと空色の双眸が開かれる。

目の前に、緩やかな金髪が流れ、その後ろでは柔らかな翠の光が

そつと小屋の中を照らし出していた。

「デーズィア…」

その華奢な体を抱き締めながら、その女性は囁いていた。

「その想いを大切にするのよ…まだ、始まりでしかないけれども、

あなたなら《真》を抱き続けることができるわ…」

「おばさま…」

知らず、涙が溢れ出す。

止まらない…止めたくもない。

何故なら、これは喜びの滴…

女性の腕の中で、デズイアは心の儘に泣き続けていた。

「涙が、全て悪いものではないの。」

思ふ存分、泣いてもいいのよ…本当に、よく頑張ったわね…」

黄金の澄んだ瞳は、その深みに厳格さと偉大さを秘めながらも温かな慈愛に満ち、少女の震える細い肩をそっと見守っていた。

白を基調とした、飾り気の無い衣服が今は赤く染まっている。

頬を打つ熱風に従い、朱は揺らめき、その輝きを変化させる。

鶯色の瞳を厳しく細めると、アルは降り懸かる火の粉越しに炎に包まれた建物を見上げていた。

辺りには、他にも多くの者が集まっている。

誰も、火を消そうとはしていない。最早、そんなことができる状況ではないのだ。迂闊に近寄れば、自らの命も危険に晒すことになる。

それほどまで、火の勢いは激しいものだった。

アル自身もそうだ。何かをしようとは思うものの、実際には手が付けられない。そもそも、砂漠の真ん中で容易に大量の水が手に入るはずもないのだ。

ただ、立ち尽くして見守るだけ。

…その時、不意に微かな悲鳴が耳朶に触れ、脳裏に突き刺さる。

「何だつて？」

まだ、この火の中に誰かがいるのか。

周囲の落ち着いた様子からして、皆が既に避難しているものとはかり思っていたが…見ると、二階の窓辺に白いものが力無く垂れている。紅く燃え盛る炎を背にしているのは、細い腕だ。

鋭利な刃物の如く眼光を強めると、アルはすぐ傍で同じように立っていた男の腕を掴んで叫んでいた。

「おい、誰か助けに行ってるのか！」

「馬鹿かお前。誰が、あんな中に入って行けるんだ。

あの子には、諦めてもらうしかないな」

男の面には、悲しそうな表情が浮かんではいる。自分の無力さを責めているような雰囲気もある。

だが、それは上辺だけのものだ。

自分自身が助かってここにいる…その安心こそが、彼の本心であり、全てだ。

いや、それはここに立ち並ぶ者全てに言えることだ。

誰もあの白い腕の持ち主を助け出そうとはしない。できるものか。自分達はできる限りのことはしたのだ。

…だが、本当にそうだろうか？

「冗談じゃねえぞ！」

窓から覗く白い手は、時折僅かに持ち上げられ、揺れる。

だが、その動きも次第に緩慢になっていく。

ここに、すぐ下に多くの人がいる。あの手は、そのこともよく分かっている。

なのに、誰も助けようとはしてくれない…その凄まじいばかりの絶望感。

アルは脇の建物に飛び込むと、水場を探した。

驚く住人を無視して、大量の水を出すと全身に被る。

濡れたまま飛び出すアルに向かって、怒声が響いた。

「おい、死ぬぞ！」

「やってみないと分からねえだろうが！」

勿論、死ぬ気など無い。

行動せずに諦めるなど、アルらしくないことだ。同時に、全く勝算が無い状況に飛び込むこともまた、アルらしくもない。彼はそこまで愚かではない。

限界まで挑戦して、そして可能だろうと判断したのだ。例え僅かであってもその可能性があれば、アルは決して諦めずに果たそうとする。

悲鳴と罵声を共に浴びながら、少年は炎に包まれた建物の中へと飛び込んでいた。

堅固な石組みだ。柱が倒れてくる恐れは無い。気を付けるべきは火と熱、足元の障害と煙だ。

緊迫した状況下であつても……いや、そのような状況下であればこそ、彼の瞳はともすれば冷淡とも見える光を宿している。鳶色の瞳は素早く周囲を把握し、綿密な計算と沈着な行動で二階へと駆け上っていく。

かける時間は、短いほどいい。自分にとつても、あの腕の持ち主にとつても。

熱気が凄まじい勢いで渦を巻いている。隙を見てはアルをその腕の中に抱き込もうと、虎視眈々と狙い続けている。

だが、少年は慌てもせず、滑らかな動きで着実に目標の部屋へと近付いていた。

ドアは燃えて失われている。

袖口で口許を押さえながら飛び込むと、窓の近くで蹲っている若い少女の姿が見えた。

最早諦めていた足音に不意に気付き、霞んだ瞳が上を向く。

「よし、もう大丈夫だぞ」

途端に煙を吸い込んでしまう。だが、咳き込む間も自分自身に与えはしない。

アルは歯を食いしばりながら急いで少女を抱き上げると、窓辺に足を掛けていた。

そのまま、飛び降りる。

見事に着地した瞬間、流石に鷹の目にも安堵の色が浮かんでいた。

歓声が上がる。

無謀だと、愚かだと嘲笑していたその同じ口許が、喜びの、安堵の声を発しているのだ。

アルは、そんな人々を一顧だにしなかった。

その目はただひたすら、腕の中の少女に向けられている。

その先で、少女もすっかりとアルの首に腕を回し、嬉しそうな笑顔で見上げていた。

「ありがとう、お兄ちゃん」

アルは、ただ黙って優しく頷くだけだった。

少女を抱えたままゆっくりと立ち上がると、改めて建物を振り返る。

燃え盛る炎の勢いが、どうも尋常ではない。可燃性のものを、最初に設置していたかのような燃え方だ。

建物を見回していた少年の視界の片隅で、ふと、小さな影が動く。

「……？」

一階の部屋だ。

……まだ、人が残っている？

だが、助けを求めているような素振りはない。

アルが注視している先に気付いたのか、腕の中から小さな呟きが、爆ぜる炎を背に静かに……だが、はつきりと耳に届けられた。

「あの人が、火をつけたの」

「……」

暫くの間、黙り込む。

火の粉が熱風に舞い、何かが崩れる音がする。

熱い。

赤い。

それは最早、建物ではない。一つの炎の塊だ。

「……立てるか？」

漸く、アルは幼い少女に尋ねていた。

「うん！」

精一杯に頷く笑顔が、痛ましい。アルはそつと彼女を下ろすと、その縮れてしまった髪を優しく撫でていた。

少女が、嬉しそうに笑い声を上げる。

アルは鳶色の瞳を柔らかく細めると、次には眼光鋭く建物を振り

返り、走り出していた。

窓ガラスを、無造作に叩き割る。噴出す炎など、意に介さない。部屋の中でじっと死を待っていた男が、物憂げに顔を上げている。

「おい、さっさと出てきな！」

今はまだ、死ぬ時じゃないぜ」

耳元で喚く激しい劫火の怒声を縫って、背後の人々から罵声が飛んできている。

だが、まるで気にも留めずに、アルは半ば死にかけている男に続けていた。

「お前が生き延びた後で、死を与えるかどうかは皆が決めることだ。お前が決めることじゃない。

お前には、今、ここで死ぬ権利なんかねえんだよ」
そろそろ、留まるのは限界だ。

アルはそれだけ言うと、身を乗り出し男を引き摺り出そうとした。拍子抜けしたことに、男は逆らいもせずに従っている。

犯人である男を助け出した少年に、観衆からは非難の渦が沸き起こった。罵りの言葉や怒りの声が、無数にアルの体へと突き立てられる。

鷹の眼は、そんな人々に冷やかな光を返すと、そのまま躊躇いもせずに少女の許へと戻っていた。

「やい、てめえ、どういふつもりだ！」

大柄な男が一人、前に出て掴みかかるうとする。

だが直後、鋭利で冷淡な視線に射竦められ、金縛りにあつたかのようにその場に動けなくなってしまった。

感情も見せず、ただ眼光だけが次々と人々を刺し貫いていく。

不意に、水を打ったような静寂が広がる。燃え盛る音すら、息を潜めるかのようだ。

アルはそんな観衆の前に、犯人を少し乱暴に突き飛ばすと、静かに言った。

「こいつの処分は、勝手にしな。お前達が、解決する問題だ」

そして、少女へと向き直る。その姿に、漸く 鷹 は光を弱め、その頬に笑みを浮かべていた。

少女もまた、心からの喜びを頬に映し、見上げている。

…いや。

急に背を伸ばしたかと思うと、あの小屋の女性が見下ろしていた。

「よく頑張りましたね、アル。」

でも、まだあなたの《影》は消えたわけではないの。

これは、始まりにすぎないのよ」

「…はい」

もう驚いたりもしない。

アルはその黄金色に輝く瞳を、重々しくも晴れやかな気持ちで見上げていた。

二人の周りの全てが、今は静止している。まるで、時間が止まったようだ。

それに気付いてアルが先程まで燃えていた建物を見やった時…彼は、その光景に見覚えがあることに気づいて愕然としてしまった。

…そう、これは夢の中の出来事ではない。

先の、倉庫前の争いで、自分は確かにあの少年達を傷付けたことがある。

この火事の時も、自分は確かに観衆となって、この少女を見捨てていたのだ……

「そう…これらは全て、あなたの過去。実際に遭遇してきたことなのよ」

啞然とする背中越しに、静かな声が聞こえる。

思わず、恥じ入るように、アルは瞳を伏せてしまった。

「アル…」

不意に、柔らかな少女の声が聞こえてくる。なんて優しい声だろう…

そのか細く美しい音色に顔を上げると、アルは自分が再び翠の光に満ちた小屋へと戻っていることに気が付いた。

目の前のテーブルでは、あの女性がにこやかな笑顔で編み物をしている。今では、少年にもその編み目の中に示されているだろうことは理解することができた。

だが、それ以上は見る事が許されていない。

アルは椅子から腰を上げかけている少女へと、その視線を移していた。

…一瞬、誰だか分からない。…いや、正確に言えば分かっている。分かっているのだが…そこにいるのがあのデーズィアとは思えず、…いや、思えるのだが…

アルは息を飲み、ただ目を見開いていた。

「……」

声が、少しも出ようとはしない。

今迄でさえ、彼女はアルにとって清らかな存在だった。だが、今、目の前に佇むのは、更に一層、美しさを増した少女なのだ。透き通るような黄金の髪は自ら光を放ち、空色の瞳にはより純真な想いが輝いている。

「どうしたの…？」

小首を傾げているデーズィアにしても、戸惑っているのは同じだ。アルが一回りも二回りも優しく、力強くなっている気がする。鳶色の瞳には素直な煌きが宿り、温かな雰囲気とその全身から溢れ出してくる。

「…綺麗だよ、デーズィア」

正直に、アルはそれだけを告げた。それ以上の言葉を、思い付かなかったのだ。

途端に少女は頬を赤く染め、視線を落としてしまう。

だがすぐにアルの真剣な瞳を見上げると、はにかみながらも嬉しそうに微笑んでいた。

「ありがとう、アル…アルも、とっても素敵よ…」

恥ずかしそうに囁く優しい言葉に、アルは頭を振っていた。

「俺は、デーズィアが思っているような人間にはなれてないよ。」

だけど、そうなりたいたと、《本当》に心から思ってる。

…見守ってってくれるかな」

「アル…！」

想いのままに、デーズィアは少年に抱きついていていた。

アルもまた、細く頼りない少女の体をしっかりと受け止める。

そんな二人の様子に、小屋の主は微笑を深め、立ち上がると言った。

「アルもデーズィアも、互いに相手に相応しい人間になろうとしている限り、これ以上《影》を呼び込むことはないでしょうね。

さあ、こちらに来て、今日はもう休むことにしましょう」

指し示す暖炉の脇には、今は一つしか扉がない。女性はそこに近付き扉を押し開くと、二人をそつと手招いていた。

扉へと近付くにつれ、その向こう側に大きな空間が見えてくる。

広い…左右に壁は見えるものの、奥行きはまるで分らない。蒼い薄闇がうつすらと流れ、その先を隠してしまっている。

踏み入れる足音も消されるほどの深い静寂が満ち溢れ、ひんやりとした冷気が二人に触れたかと思うと、その手足を包み込んできた。

だが、この優しさは何だろう。暗く、冷たく、静かで…なのに、それらは柔らかく身も心も、《個》の全てを抱き込み守ってくれる。心地好い厚みと重みを持った暗がり…

小屋の女性が先になって歩いていく。デーズィアはアルの横に並びながら、その視界に飛び込んできたものに気付くと瞳を大きく見開いてしまった。

見える限りの部屋の中に、ずらりと石の寝台が並んでいるのだ。

一つ一つが、異なった美妙な彫刻で飾られている。細かな砂が敷き詰められた中に並ぶその石の群れは、デーズィアに墓場を連想させた。

思わず隣を歩むアルを見上げてしまうが、砂漠の中で育った少年にはそんな風には見えていないらしい。彼にとっての墓とは、砂の中だ。墓標など、限られた岩場に彫られたもの程度しか記憶に無い。

女性が足を止める。

振り返って、優しく指し示すその先にあるものは…デーズィアには、やはり蓋を閉じた棺にしか見えなかった。驚いたことに、その寝台の側面には、華麗な花文字で自分とアルの名前が刻まれている。それでも、デーズィアは躊躇わず女性の手に導かれ、その上に横たわっていた。

途端に、体中の全てが、デーズィアの全てが安らかな休息を望み、穏やかな深淵へと沈み込んでいく。

すぐ傍で、遅しい体が同じように横になってくれている。その温もりがまだ感じられる…

遠くで、静かな囁き声が告げていた。

「ゆつくりと、お休みなさい。

この部屋には、たった一つのものしか存在しないの。

でも、それは一つでありながら、《全て》を包んでしまうもののなのよ」

瞼を閉じたまま、デーズィアは落ちていく意識の中で、小さく微かに呟いていた。

「アル…手を繋いでも、いい…？」

もう、聞こえないかも知れない。そもそも、声にもなっていないかも知れない。

体の中へと柔らかなものが忍び込み、感覚が遠ざかっていく…その先で、温かな手が力強く指先を包み込んでくれたのが分かる。

眩いばかりの黄金色の光が、その指先から流れ込んでくる。それは満たしている「何か」と争いもせず、共にデーズィアを抱き締めてくれる…

…デーズィアは崇高で純真な笑みをその頬に映すと、静かな眠りへと全てを任せ、溶け込んでいった。

第四章 終わり

第五章 銀の国

「…んっ」

漸く、目が醒めるのだろうか。

遠くで、心が、意識が躍動を始めている。

節々から皮膚の表面へと微かな感覚が駆け抜け、返ってくるその応えを自分のものと認めるや否や、歓びからすぐに半身を起こし、アルは鳶色の瞳を開いていた。

横たわっていた石の寝台。その傍で、素晴らしい微笑みを湛えてデーズィアが待ってくれていた。空色の瞳からは清く澄んだ光が溢れ出し、手の中で指先が想いの儘に絡まり合っている。

「おはよう…」

囁きが耳に心地好い。

「おはよう。デーズィアが、起こしてくれたんだな」

十二歳とはとても思えないほど、女性としての愛らしさを増した少女は、アルの言葉に小さく頭を振っていた。

「いいえ、アル。わたしはただ、見つめて…待っていただけ」

「同じことだよ、きつと」

その変化は、少年にも生じている。

デーズィアには、そんなアルの変化が嬉しかった。

何年間も、眠りに就いていた気がする。

夢を見ない眠りは、時の流れを迷わせる。

…夢……いや、今迄の人生そのものが夢だったのでは…

今、漸く、目覚めの始まりにいるのだろうか。

石の上で横になっていながら、体は硬くなるどころか生氣に満ち溢れている。

アルは少女の細く柔らかな腕を引き寄せると、音も無く石の上から滑り降りていた。

次の瞬間、翠色の光に囲まれ、二人は食卓についていた。

卓を挟んで、向かいには透き通る黄金色の髪をした女性が座り、二人に語りかけている。

大地のこと、歴史のこと、草木のこと、星のこと、戦のこと、愛のこと、…幾つもの理が次々と二人の中に刻み込まれていく……

…きちんと、耳を傾けていたはずだ。

情景も、女性の姿も、目の前に浮かぶ真実も、確かに覚えている…

いつのまにか、三人は食事を終え、玄関の扉を開けていた。

外の景色を目にした途端、先程までの会話が全て霧散してしまった。

…忘れたのではない。眠ったのだ。

目覚めが進むにつれて…目覚めが次の目覚めへと繋がるその過程で、再びそれらは形を取り戻すのだろう。

薄明が始まったばかりの夜空には、まだ鋭い光の粒が無数に瞬いている。

その天の宝石を背に、玄武達、四聖神将はデーズィアとアルを迎えていた。

夢の中にいるかのように覚束ない足取りで振り返ると、二人は小屋の主の頭に頭を下げる。

その時ふと、デーズィアは佳人を見上げて訊ねていた。

「おばさま…お名前を聞いても構いませんか？」

少し、遠慮をしてしまう。その言葉に、小屋の女性は穏やかな慈しみの光を頬に映し、頷いていた。

「構わないわ、デーズィア。

私の名前はね、本当は幾つもあるの。かつて、遙か古にはイルタ

ナと呼ばれていたこともあったし、恐らく、今もそれが相応しいの
でしょうね」

「ありがとうございます、おばさま……」

喜びの表情を浮かべる少女をそっと引き寄せると、イルタナはその
額に優しく口付けていた。

やがて、二人が砂舟に乗り込むと、四聖神将も続く。

静かに空気を噴射し、砂を撒き上げながら、アルは朱雀が指し示
す方角へと船首を向けて走り始めていた。

日干し煉瓦を積み上げた小屋は、見る間に小さくなっていく。

その姿が黄金色の砂のうねりに沈んでしまうと、漸く玄武達は緊
張を解き、互いに顔を見合わせていた。

第四期の存在への畏怖と惑い……

だがその頃には、もう既に小屋は忽然と海から消えてしまい、あ
とは何ら変哲の無い砂漠が、昇り始めた陽光に照らされているだ
けだった。

深い。

見上げて覗き込もうとしても、その底には決して行き着かない。
見続けていると黒く、黒く……闇夜にも感じられるその中天の真ん
中で、あらゆる存在を焼き尽くそうと、黒い太陽が燃え盛っていた。
今ここには、広がる砂しか存在していない。この海の何処で、一
夜を過ごしたというのか。

天蓋から視線を落とす、再び辺りを見渡す。

砂地を分けて出ているのは、操舵室の部分だけだ。その上に立ち、
男は腕を組むと背後に控える兵士に向かって低く声を押し出してい
た。

「確かに、ここなのだな」

「は、はい……」

汚れた軍服は、目を上げる勇氣も無く俯いたまま応えている。

「二つとも、消えたか……」

栗色の短髪の下、髭を蓄える口許が僅かに歪む。

発信機に気付かれたか。それとも、ここが扉か。

……いや。扉を閉じる為の決意は、そう簡単なものではない。短時間であの少女が成し遂げるとは思えない。

振り仰ぐ黒縁の眼鏡が、鋭い日射に煌きを返している。

男が片手を払うと、背後の兵士は何も言わずに船内へと下りていった。

愚か者であつても、領土の拡大、獲得には「数」が必要だ。

「……衛星も使え」

出迎えた別の兵士に告げると、彼はそのまま船室へと戻ってしまった。

間も無く、潜砂艦から数多くの砂上バイクが走り出す。折り畳まれていたそれらには、銃器を構えた兵士が乗り込み、逃した獲物を探して四方へと散っていった。

「……本当に、ここに扉があるのか？」

赤茶けた大地の上。夕陽に赤く染まる指先に従いながら、アルは戸惑いの表情を浮かべていた。

巨大な壁が、左右に広がっている。その所々には狭い峡谷が走り、凄まじい勢いで風が吹き抜けている。

「そうよ」

道案内をしてきた朱雀が訝しむ。

その横で、デーズィアも空色の瞳に当惑の色を浮かべてアルを見上げていた。

「アル……『疾風の谷』に似てない……？」

「似てないどころか、そのものだぞ」

見間違えようも無い。確かに、ここは数日前にデーズィアを連れて逃げ込んだ谷だ。

「御存知なのですか？」

玄武がデーズィアに尋ねている。

デーズィアは、この美しい女性にアルと洞窟の中で過ごした夜の話を話し始めていた。

あれから、もう随分と長く、アルと共にいた気がする。

今迄生きてきた年数よりも、この数日は遥かに多くのものが詰め込まれていた……

……本当に、沢山の出来事があった。

刻まれた、その長さは短いものだろう。だが、その短い時間の中で、自分はとても大切なものを見出せた……

不意に、何も言えなくなる。

北でゆつたりとした時間を過ごしていた自分。それはまるで別の、もう一人の自分の歴史のように感じられる。

いつかまた、あんな時間を過ごせるのだろうか。

……いや、時間だけが同じように流れても意味が無いのだ。

そう……そこに、アルがいなくては。

時間の長さ、流れ方が問題なのではない。

誰と、どんな風にその時間を過ごしたのか……その内容こそが、自分の時間を創り上げてくれる。

嬉しい……素直に、そう思う。

嫌なこともあった。これからもきつと、あるだろう。

だが、それでもこの自分の中に創られた時間は、何ものにも代えられない。

振り返る、一つ一つ。その一つ一つに多くの想いが重なり、胸中に込み上げてくる……

黙ってしまったデーズィアの小さな肩を、突然、逞しい腕が抱き寄せていた。

見上げるその横顔は、だが操縦に専念している。

アル：

…自分は、今、幸せだ。想いや喜びが、こんなにも体中を駆け巡っている…そんな自分は、断言できる、幸せなのだ。

この想いは、間違つてなどいない。

デーズィアは、そのまま瞳を閉じると、黄金色の温もりを感じながら少年に寄りかかっていた。

風の唸りが大きくなる。

谷の中へと入る直前、アルは傍の朱雀を振り返って警告した。

「風が強いぞ。気を付けろ」

「あら」

愉快そうに目を見開くと、朱雀も砂舟の後ろを見て言った。

「大丈夫よね？ 青龍」

何も言わずに、青年は軽く手を払う。

アルはそんな仕草にも気が付かず、デーズィアを抱き締めると身構えていた。以前の砂上バイクほどではなくとも、バランスを崩せばやはり危険だ。

赤茶けた岩肌の峡谷へと入り込む。

…一向に、風がぶつかつてこない。襲いかかろうと吠える風の怒声は、耳に飛び込んでくるのだが…

見れば、小さな岩屑までもが、砂舟を避けて後ろへと通り過ぎていく。

「見えない壁よ。ほら、そこを右に曲がつて」

感心していいのか、呆れてしまつていいのか、複雑な表情のアルを見て赤い髪の女性は笑いながら指示している。

幾つにも分岐する複雑な「疾風の谷」を、朱雀の言葉に従つて幾度も曲がる。

デーズィアには、まるで分かつていないらしい。だが、アルはその道順に最初は戸惑いを…やがては疑いを抱いて目を鋭く細めていた。

記憶の中にある道と、まるで同じだ。風に邪魔されない思考は、

記憶を探り明確な答えを導き出している。

「どうしたの？ アル…」

そんな変化を敏感に察して、か細く澄んだ音色が訊ねてくる。

アルはふつと瞳を緩め、僅かに肩を竦めると笑みを浮かべていた。

「どうやら、よく知ってる場所に向かっているようだよ」

「…？」

小さく首を傾げ見上げる少女に、アルは道の先にある岩壁を指し示した。

迫り出した岩。その陰にあるのは漆黒の闇が顔を覗かせる洞窟だ。デーズィアが驚きのあまり言葉を失う横で、朱雀は確かにその洞窟を指して言った。

「ほら、あの中に入るのよ」

「まさか、その『扉』ってというのは、大きな湖の近くにあるのか」
苦笑しているアルに、朱雀は本当に驚いた顔で尋ねていた。

「知ってるの？ その湖そのものが『扉』なのよ」
流石に、砂上バイクとは異なり、このまま洞窟の中へと入ってはいけない。

砂舟を入り口で止めながら、アルはさり気なく告げた。

「俺とデーズィアは、その湖の畔で野宿したんだよ」

仕分けた荷物を、驚愕のあまり動けずにいる朱雀にも渡す。

「…偶然、つてあるのね」

その荷物を受け取りながら、彼女の口から出るには違和感のある単語を漏らす。

そう…偶然など、あるはずがない。だからこそ、自分達はここに
いるのだ。

それ以上は何も言わず、皆は砂舟を降りると洞窟の中へと足を進めた。

暗闇を、朱雀の手の中の炎が照らす。

奥へと進んでいく光の背後で、夜は急速にその姿を現していた。

広大な地下の湖は、以前と変わらず沈黙と闇に沈んでいる。

漣一つ見えない、漆黒の鏡…

静寂が、深く、重い。

音の無い音が耳を圧し、光を失うかも知れない不安と共に、デーズィアの小さな胸に恐怖を植え付けようとする。

濃密な闇の塊が自分の方へと凭れかかってくるのを感じながら、少女の指先は助けを求めるようにアルの手を探っていた。

彼女のしなやかな指先が見つけるより先に、大きく、温かな手が？まえてくれる。

力強く握り締めてくれるその手は、決して綺麗ではない…血に塗れ、穢れに染まる手だ。だが、それはこんなにも大きく、温かく、力強い……

「どうする？ 今日、ここで休むか」

アルは四聖神将を振り返りながら訊ねた。

本当は、ここで休んだ方がいい。『幼艾の国』エルナシオンがどれほど豊かな土地であっても、見知らぬ所で一夜を過ごすことは避けるに越したことは無い。

「いえ、すぐに扉を開けましょう」

玄武が柔らかな微笑みを少年に向ける。

「エルナシオンに入った方が、安全ですから」

エルナシオンとこの世界と、それぞれの状況を見ての言葉だ。いずれ、扉は開けなくてはならない。一晩の時間の差など、四聖神将にとつてはあつてないようなものだろう。それでも、今、開けた方がいいと言つのであれば…

「だったら、そうするか」

言葉の通りにしてもいいだろう。その程度には、アルも彼らを信用していた。

だが、やはり躊躇いが無いわけではない。その主な原因は、指先の温もりだ。

「大丈夫よ！」

横から、朱雀がこのお気に入りの少年に片目を瞑ってみせた。

「本当に、危険な存在なんてないんだから。」

「勿論、あなたにもね」

「信用してるよ、朱雀」

確かに、デーズィアを危険な目に遭わせることはしないだろう。

分かっているのだが、大切だからこそ、より慎重になってしまうのだ。

アルは笑いながら朱雀に応えると、デーズィアの澄んだ瞳を覗き込んでいた。

「じゃあ、行こうか、デーズィア」

「はい、アル」

清純で美しい微笑みが、信頼し切って少年を見上げる。

内から光が射しているかのような空色の瞳は、そのまま四聖神将へと流れ、問い掛ける。

「扉を開けるには、どうすればいいのですか…？」

ペンダントの主を守り、扉の場所と開け方を示すのが、彼らの最初の役目だ。

デーズィアは開け方も知らない。開けたらどうなるかも知らない。ただ、《鍵》を持ち続けるだけの役目。

だが、これからは…扉を開けてしまえば、その役目は別の役目へと変わってしまうのかも知れない。いや…変わるだろう。彼女の決断は、エルナシオンに入ってからにも必要になるのだ。

それでも構わない。

もう、一人ではないのだ。

「その湖に、ペンダントの石を浸してください」

玄武の言葉に頷くと、少女は温かな指先を離れ、躊躇わず汀へと下りていった。

胸元から、大切な母の忘れ形見を取り出し、外す。

透明な翠の煌きが、湖面に映る。

すぐ傍に、自分のことを心から大切にしてくれる温もりを感じな

がら、デーズィアは静かにそつと、ペンダントを漆黒の水の中へと滑り込ませていた。

ゆらゆらと、翠の星が揺れる。

次には澄んだその翠の光が、まるで水に墨を流したかのように、ゆつくりと溶け出していた。

波一つ、生じない。音一つ、聞こえない。

それでも翠の光は水中で大きくうねり、速やかに四方を目指して広がっていく。漆黒の闇夜が淡い翠にその場を譲り、やがて湖面全てが柔らかな光を放ち始めていた。

「《鍵》により、扉は開かれました」

玄武の静かな声が、広がる…

「残る一つの封印を解くことで、『創始の緑樹』の『力』は解放されます」

そう告げる彼らの次の役目は、『樹』への案内と、その封印の解き方を示すことだろう。

玄武を振り返ると、アルは静かに訊ねていた。

「…どうしても、『樹』を解放するんだな」

アルにしてみれば、その『力』の解放はどちらでもいいことだ。

まずは、デーズィアを安息の地へと導くこと。それだけで十分なのだ。

『力』など解放してしまえば、その安寧が乱されてしまうかも知れない。

少年が望むことなど、無論、四聖神将にも分かっている。

だが、彼らもまた時間の夢に囚われた存在なのだ。定められた道を外れて、その想いを叶えることはできない。

「そうするしかないのよ。」

デーズィア様がどのような結論を導かれるのか…その結果で、これからのこの世界の『道』が定まるんだから」

本当に辛そうな表情で、朱雀が応えている。

鋭く細められた鷲色の瞳が、真っ直ぐに突き立てられる。

彼女は、決してそれを避けようとはしなかった。

「アル…」

湖水から引き上げ、以前と変わらぬ翠を放つペンダントを首にかけると、デーズィアはそつと少年の腕に指を絡めていた。

不安はある。あつて当然だろう。

自分の決断で、世界の行く末が決まると言われているのだ。世界のどのような行く末が決まるのかはよく分からない。だが、それでも多くの存在にとって、それは重く大きな決断なのだろう。それを自分が選ぶのだ。

そんなことが、この小さな自分にできるのだろうか…

…だが、この流れは、最早変わらないのだ。

できるかどうかなど、問題ではない。

自分の中に流れる『血』の運命を、今のデーズィアは全て受け入れていた。

「…そうか」

《唯一の本質》の夢には、アルとて逆らうことなどできない。

その夢の中では、デーズィアの決断もまた、既に見終わった《過去》なのだ。

知らされていないだけで、決まっている。

…だが、本当にそうなのだろうか。

（アルだけが、流れを決するんじゃないかしら…）

朱雀の胸には、そんな思いも去来していた。

夢は、若しかすると「戻る」こともあるのではないか。あるいは同じ時間の「別の夢」を選ぶこともあるのではないか。

自らの行動を無にしてしまいかねない思いに、朱雀は慄然としていた。

力ある存在であっても、彼女は神ではない。…いや、神々ですら、疑っているのではないか。

先の翠の小屋の主が、如実にその可能性を示唆している。

「では、行きましょう」

玄武の静かな声と共に、肩に青龍の手がかかる。
我に返るその先で、彼は小さく首を振っていた。

「ただ、荷物は全て置いていかなくてもはなりません」

「…そう、それは自分たちのような存在が悩むべきものではない。

「向こうで、手に入るのか？」

アルに近付きすぎたのかも知れない…

「ええ。もつとも、想像しておられる形ではないでしょうが」

だが、それだけアルには『何か』があるのだ。

それを認めないほど愚かでもない。

刹那瞳を閉じると、朱雀は陽気な笑顔で脇から入り込んでいた。

「それと、折り畳みナイフも置いていくのよ？」

アルが眉を顰めている。あのナイフだけが、今アルが持つ唯一の武器なのだ。

少なくとも、彼はそう思っている。

（違うのよ、アル）

彼が持つ力は、そんなものではない。

恐らく、彼自身は生きている間、気付くことなど無いだろう。

だが、彼は既に、多くのことを定めてきている。

「エルナシオンでは、銀以外の鉱物はあまり好まれないの。鉄なんて、持っていていけないほうがいいわ」

「……」

二度と使う必要の無い世界であればいいのだが…

暫く逡巡した後、アルは溜息と共にナイフを地面に捨てていた。

「アル…」

純白に身を包む少女が、そつと見上げてくる。

アルは恥じ入るような笑みを頬に映すと、彼女を見つめた。

「…今迄、何も持たなかったことなんてないんだよ…正直に言つて、ナイフを棄てることは怖いんだ」

本当に必要な力は、ナイフではない。

…アルの心は、そのことを認めてはいる。だが、実行に移すこと

は難しいものだ。

「デーズィアなら、躊躇いもなく捨てたのだろうか…」

自分は、本当に彼女に相応しい人間になれるのだろうか。

……血に塗れた、野犬のような自分が。

何度も何度も、同じ不安が胸中で鎌首を擡げようとする…

「デーズィア様、こちらへ」

哀れみの視線を向けながらも、玄武は何も言えない少女の背中にそっと触れて促していた。

「……はい」

両手を組んで胸元に押し付けながら、アルを何度も振り返る。

そんなデーズィアの仕草に、アルは優しく微笑んで応えていた。

…そう、あまり彼女を心配させてはいけない。

玄武のすぐ横に立ち、一緒に歩き出す。

デーズィアも前を向き、玄武が背を押し導く先を…

「え？」

湖の中へ入ろうとしているのだ。

慌てて顔を上げると、黒髪の女性は安心させるように笑みを浮かべて言った。

「大丈夫です、デーズィア様。」

この翠の光は、最早この世界の水ではありません」

小さく頷くと、デーズィアはそっと爪先を湖面に近付ける。

波一つ無い、静かな面。

すつ…と、沈み込む小さな足にはひんやりとしたものが触れる。

だが、それは液体のものではない。冬の朝の冷たい空気のようなものだ。

ふと、北部の山を思い出す。透き通る、澄んだ早朝の気配…

アルはデーズィアのすぐ傍らに立つと、同じく湖へと足を踏み入れていた。

まるで濡れない。この下は、この先は、別の世界だ。

少女が白皙な腕を伸ばし、縋り付く。

戸惑いながら見上げた先で、少年は本当に優しい笑顔を自分に向けてくれていた。

一人ではない。こうして、ここに、アルがいてくれている。掴む逞しい腕から溢れ出す黄金色の光の波は、ただ自分だけに流れているのだ…

少しずつ、足を進める。二人で、共に、並んで。

腰が沈み、胸元も翠の光の下になる。

感じるのは、そよ風のようなふんわりと優しい気配。

デーズィアは、ずっとアルを見つめていた。

一瞬の躊躇いもなく、足を進める。

四聖神将を従えながら、デーズィアはその幼くも美しい唇が湖面に達しても、幸せに満ちた微笑みをアルから逸らしはしなかった。不意に、翠の光に全てが埋もれる。

それでもなお、少女は指先に自分の全てを感じながら、やがて眠るように意識を失ってしまった。

くすくす…

…誰だろうね、誰だろうね…

ほら、四聖もいるよ…

…綺麗な髪ねえ…

触っちゃ駄目だって！ 怒られちゃうよ…

………

「う、ん…」

自分のすぐ傍に、幾つもの小さな風を感じる。羽毛のように軽く、柔らかく…

「おい、そろそろ遊ぶのをやめたらどうだ？」

きやつ…！

アルの囁き声に、あちこちから微かな悲鳴が起こる。

細い風が、音も立てずに肌の上を滑り、通り過ぎていく。

デーズィアは少し目を擦ると、半身を起こしてその瞳を開いていた。

「やっぱり、起こしてしまったな」

優しい言葉と共に、アルの顔が目に入る。

その背後から、青草が微風に靡く爽やかな音色と、小鳥達の美しい歌声が耳に流れ込んできた。

慌てて辺りを見回す。

今しも、太陽が地平から顔を覗かせようとしている。緩やかにうねり、広がる緑の草原の向こうから…

緑、草原…何て久し振りの風景だろう。

あの砂漠の中の小屋の翠は…そう言えば、少しこれらの草葉に似ていたかも知れない。だが、この草原の緑は、手に触れることができるのだ。こうして、そつと、撫でることができるのだ…

視線をずらすと、目が醒めるような若葉に身を包んだ森も見える。砂漠の中で乾燥し切った心身へと、しっとりとした何かが流れ込み、満ちていく…

豊かな草の香りに囲まれ、四聖神将までもが穏やかな寝顔を見せている。彼らと出会ってから、初めて見る無防備で安らかな姿だ。

「アル…ここが…」

それだけしか呟けない。

「多分、そうだよ。夢の中でも、俺には思い描けない場所なんだか

ら」

砂漠で育った彼には、これだけの草原でも驚きなのだ。井戸の傍に固まる、オアシスの草木とはまるで違う。

それに、この穏やかな気候：これが、春なのだろうか。

間違いなく、夢ではない。自分にはつきりと目覚めている。

死んでしまったわけでもないだろう。意識があり、考え、思い、呼吸しているのだから。哲学的な意味での生死は分からないが、少なくともアルは自分がここに生きていると分かっていた。死後に、死後の世界で蘇る：だが、そこで生きているのであれば、「死」は存在しない。

目覚める前から気付いていた存在も、自分だけでは決して夢見ることはできないものだろう。そもそも、先程までいた世界で見るこ

とができるのだろうか：それも、アルにとっては曖昧なことだ。

「ねえ、アル：さつきは、誰とお話していたの：？」

デーズィアの瞳に、アルは苦笑していた。

「さあ：よく分からないな。掌くらいの人間だよ」

「：妖精、なの？」

その言葉に、アルは困惑の色を深めてしまう。

「正直に言って、俺には妖精がどんな姿をしているのか分からないんだ。

ただ、不思議な存在、今迄に見たことが無い存在だとは分かるよ」
アルはそう言って森の方に顔を向けると、そつと声を掛けた。

「おい、もう一度出てこいよ」

「無理よ」

背中から聞こえた応えに振り返ると、目覚めた朱雀が悪戯っぽく笑っていた。

「あの子達は、夜にならないと出てこないわ。それに、結構、恥ずかしがり屋なのよ」

「妖精、なんですか：？」

問うデーズィアにしても、お伽噺でしか知らないのだ。

幼く、純粹な期待を籠めて尋ねてくる少女に、思わず朱雀は大きな声で笑い出していた。

「そうですよ。ですが、デーズィア様。あたしも、一応は妖精なんですけど」

「え？」

そう言えば、そんなことを聞いた気もする。

不思議なことを簡単に行うが、一見すると人間と全く変わらないのですっかり忘れていた。

今更ながら驚いて見つめる少女の姿に、アルまでもが笑い出している。

そしてすぐに、デーズィアもその笑いに加わっていた。

「これから、何処に行けばいいんですか…？」

見上げる空色の瞳に、玄武は優しく微笑んでいた。

「『創始の緑樹』の許に行かなくてはなりません。

そこに、管理者がいるはずですよ」

「管理者？」

「ええ」

少女のきょとんとした表情に、玄武は笑みを深めて頷いた。

「『創始の緑樹』を守り手に代わって管理している者です。

デーズィア様は、管理者から最後の封印を受け取られるのですよ」

「でね、それを、ぱあゝん！ って割っちゃえばいいのよ。分かっただあゝ？」

不意に、幼く愛らしい声が割り込んでくる。

…上から？

慌ててその声の源を見上げると、そこには掌ほどの小さな少女が浮かんでいた。

背には透き通る羽が付いている。妖精、と聞いてすぐに思い浮かべる姿そのものだ。

「あなたは…？」

だが、それは物語の中でしかない。勿論、実物を目にするのは初めてだ。

デーズィアは、突然のこととそれだけしか呟けなかった。その口振りが面白かったのか、妖精は山吹色の髪を揺らして笑い声を上げている。

見れば彼女の細くて折れそうな首から大きなポーチが提げられており、そこには大きく「ピマ」と書かれていた。

そのポーチの名前を見せながら、妖精は誇らしげに言った。

「あたし、勾騰様こうとうに道案内をしてって言われたの。ここまで来るのに、三十日もかかったんだから！」

「三十日？」

そんなにかかるのだろうか。

思わずアルとデーズィアが顔を見合わせていると、朱雀が苦笑いしながら妖精に怒ってみせた。

「ピマ、話を大きくしたら駄目よ！ 二日くらいでしょ？」

「へへ、ばれちゃあしょうがない」

銀色の瞳をきらきらさせながら、ちろつと舌を出している。

アルは戸惑いを通り過ぎ、呆れてしまいながらも、重そうなポーチを見て手を伸ばしかけて言った。

「それ、持ってやるのか？」

「だあゝめ！ デーズィアに持ってもらう」

ぷいっとアルから顔を背けると、ピマは慌てるデーズィアにポーチを取ってもらった。

「ぜえゝつたい、アルに渡しちゃ駄目だからね」

「え？ あつ、はい……」

少女が困った顔で見てるのを、アルは軽く肩を竦めながら微笑みで応えていた。

「それじゃあ、行こうかあ！」

元気に声を張り上げると、ピマは先頭になって飛び始める。

四聖神将は黙ってその後ろを歩き始め、アルとデーズィアも急い

で続いていた。

（勾騰も、どうしてこんな子を選んだのかしら）

笑いたいやら、怒りたいやら。

だが、朱雀はふとアルを一瞥すると、僅かにその美しい眉を顰めてしまった。

先程の、ピマの受け答えが気になるのだ。

……やはり、まだ……

……だが、こればかりは、朱雀にも何もできないことだった。

清らかな風が、少女の白皙な頬に触れては通り過ぎていく。

風の子の青く透き通る指先で広げられた髪は、頭上から降り注ぐ柔らかな日差しに煌き、美しい星をその面に散らしていた。

足首に纏わる草花も、優しくそつと、その素肌を愛撫してくれている。

指を添え、挨拶に応えてはその色を、香りを受け止め、受け入れる。

見上げる空には雲一つなく、時折鳥の影が滑っていく。

黒い点が丘陵地の上を何処までも流れていくのを、デーズイアは素直な喜びに溢れながら見送っていた。

北部の地よりも、ずっと素晴らしい所だ。

お伽噺に相應しい、穏やかで心休まる地。

隣を歩むアルをちらつと見ると、彼も戸惑うような視線をあちこちに向けている。

どの景色も、アルにとっては珍しいのだろう。

砂漠だけの世界。岩と砂と、灼熱の光。渇きと風と、死神の影。もっと、彼にはこのような世界を知って欲しい。

柔らかく、ゆったりとした時の流れを。

……そもそも、時間など流れているのだろうか。

太陽の歩みは進んでいる。だが、このエルナシオンでも、それは時の歩みを示しているのだろうか。

ふと、少年が空色の瞳に気付く。

彼は優しくも曖昧な微笑みでデーズィアに声を掛けていた。

「よく分からない所だな…本物じゃないみたいだ」

「ううん。現実なの…全て、ね？」

アルは、自分の立つべき位置がまだ掴めずに不安になっているのかも知れない。

見知らぬものばかりに囲まれていては、そうだろう。デーズィア自身も、初めて砂漠を見た時には、それがあそこまで広大なものとは思ってもいなかった。

だが、アルは自分と違って自らをしっかりと掌握している。

どの場にあつても、彼自身はそこにそのままの姿であり続けるだろう。

改めて、アルとこんな美しい場所を歩いていることに喜びを覚える。

素直に、嬉しいと思うのだ。

大切な彼と一緒に、逃げることも怯えることもなく、のんびりと散策を楽しめる日が本当に来るとは…

デーズィアは、久しく感じたことが無いほどに、その胸を弾ませていた。

「ふみゃ？」

先頭を進むピマが、突然、奇妙な声を上げる。

驚いて見ると、ずっと先の方から二頭の白馬がこちらに向かって駆けて来ているではないか。

若々しい、力に漲る四肢が大地を激しく穿つ。

嘶き、振り仰ぐ銀色の鬣は風に溶け、温かな光と共に流れていた。

「随分、立派な馬だな…」

感嘆の言葉が漏れる。

砂漠とは言え、辺境では馬との生活もある。砂上バイクほど便利ではなかったが、アル自身も1、2度はその生命の躍動を感じたことがあるのだ。

それは、思い返すだけで胸が躍る経験だった。

二頭の白馬は、少し離れた所で蹄を休めると、青く瑞々しい草を食みだしている。

ちらと一瞥するのは、こちらにも興味があるからだろう。

アルとデーズィアは互いに視線を交わすと、次にはその二頭に向って走り出していた。

「ああ、ピマが見つけたんだからね！」

薄く、今にも千切れてしまいそうな羽を精一杯動かして飛んでいく妖精の背後で、だが四聖神将の面々は微かな不安の色を浮かべてアルを見守っていた。

ゆっくりと、ゆっくりと……足音を忍ばせながら、そっと近寄る。

デーズィアは目の前の白い馬体に見惚れながら、腕を伸ばすとその皮膚に触れ、細い指を添えた。

濡れた円らな瞳は少女を捉えたものの、優しい愛撫を心地好さそうに受け入れ、そのまま食事を続けている。

あまりの感激に何も言えず、ただただ指先を滑らせるデーズィアの向かいで、アルも逞しい純白の体に手を触れた。

その瞬間、白馬は激しく身震いし、食事を止め顔を上げる。

嫌悪と非難の眼差し。だがその視線にも気付かず、少年は目の前の美しい姿に見入っていた。

不意に、白馬が嘶く。

驚きから手を離してしまったアルの前で、もう一度大きく身を震わせると、白馬は突然駆け出していた。

デーズィアの前の白馬も、そっと彼女の指先から離れると、後を追う。

その後ろ姿を啞然と見送る二人の頭上で、漸く辿り着いたピマが可愛く怒り出していた。

「あゝ、ひどーい！」

あのね、アル、汚い手で触っちゃ駄目なんだから！

分かったあ？」

「……」

自分の手が汚れている…？

むっとしながらも、アルはその愛らしい妖精には何も言わずにいた。

黙り込んでしまったアルを、これも黙ってデーズィアが見守る。

小さな手を組み、心配に沈む胸元を押さえながら…彼女は、何も言えずに見守り続けていた…

暑くも寒くもない、快適な大気の下を漂いながら、ピマは先頭になつて皆を案内していた。

嬉しくて仕方が無い。こんな役目は、もう二度ともらえないだろう。

大役だが、そこまで重要と思っているわけでもない。

この幼艾の国では、深刻になるものなどあまりない。

暢気に口ずさみながら、ピマは薄い羽で空中を滑り続けていた。行く手に、きらきらと光るものが見えてくる。

川だ。

優しい陽射しに、燦々と目映い煌きを返している。川面の光の方が眩しいくらいだ。

流れは緩い。ピマですら、歩いて渡れるほどだ。

下を歩くアルにも、その流れの眩きが聞こえてくる。

貴重な宝物だ。

決して手放したり、涸らしたりしてはならない、多くの者にとって大切な財産。

その笑うようなさざめきは、途切れることなく続いている。

見えてくる川幅がいかに小さなものであり、他の者にとっては取るに足らないものであったとしても、アルにしてみれば大河と何ら遜色はない。

この流れの、ほんの僅かなものであっても、砂漠の片隅に潤いをもたらしてくれるのに…

…樹の力を用いれば、それも可能なのだ。

だが、それでも、どうしても、その力に頼りたいとは思わない。
恐らくアル自身、今のこの世界から元の砂漠に戻っても、そこにあるもので満足し、精一杯生きていこうとするだろう。

それで、それだけで十分なのだ。

だが、皆の為なら…？

…違う。

人以外の存在からもたらされるものへの不満よりも、皆が本当に思っているのは、人自身がもたらすものへの不満だ。

戦争もその一つだろう。

生活を、人生を精一杯守り、歩むことを妨げているのは、人自身に他ならない。

ピマが対岸までそのまま飛び続けているので、アルも先に立つて川の中へと足を踏み出す。

深みなど、何処にも無いようだ。

あちこちの靴の隙間から、水の指先が入り込んで素肌を撫でていく。その優しさが心地好い。

澄んだ冷たさが、足の先を通じて全身のあらゆるものを洗い流してくれている気がする。

体の中を、何かが流れ落ちていく…

そのあまりの心地好さに、一瞬、アルは目を閉じ、歩みを止めてしまった。

「アル…？」

素足になったデーズィアが、遠慮がちに声を掛けてくる。

素晴らしい笑顔を向けながら、アルはそつと手を差し出していた。柔らかく美しい指先が、その手を捉える。

アルはしっかりとその指を握り締めると、先になって歩き始めていた。

逞しい手に導かれ、対岸に立つ。

…思わず、息を飲んでしまう。

そこから先に伸びていく原野が、可憐な桜草で埋め尽くされていたのだ。

純白の愛らしい花が、一面に広がり、揺れている。

素足のままそつと足を踏み入れると、少女は花を押し潰さないように膝を折り、優しく花弁に触れていた。

「可愛い……」

指先に伝わる柔らかさに、心からの想いが漏れる。

「花か……」

アルもデーズィアの傍まで来ると、感嘆の声を上げていた。

花とは、これほども多く咲くものなのか。

少女のすぐ横に開く、一輪に指を伸ばし、触れる。

きやあぁ……

……微かな悲鳴が聞こえた気がした。

少年の指先で、見る間に花が頭を垂れ、萎れていく。

鋭く細められた視線の先で、やがてその桜草は黒ずみ、枯れてしまった。

「ほらぁ！　桜草が死んじゃったじゃない」

少年の後ろで、ピマが非難の声を上げる。

侮蔑に満ちたその口調に、思わず朱雀が声を強めていた。

「違うでしょ。本来の世界に戻っただけよ」

「うー。」

でも、同じことだもん！

本当に、穢れてるんだからぁ」

妖精の言葉を聞いても、アルは何も言わなかった。

表情も変えず、ただ静かに立ち上がっている。

心臓を冷たい手で握り潰されたようで……胸元をぎゅっと押さえると、デーズィアは僅かに身を震わせながらピマを振り返っていた。

「そんなことを、言わないで……！」

アルは…アルは、穢れてなんていないもの…」

愛らしい妖精は澄まして顔を背けると、黙って先になって飛び始めていた。

「アル…」

腕に手を掛け、覗き込もうとする。

「さあ、早く行こう」

そんな少女に、アルは優しい笑顔を向けていた。

思わず、泣きそうになる。

二人とも、素足のまま、手を取り合って歩き始める。

沈黙が纏わりつく。

背後では朱雀が玄武に視線を投げ掛けていた。

だが、何ができるというのか。

黒髪の女性も、ただ頭を振ることしかできない。

爽やかな風が天空を過ぎり、地平へと消えていく。清らなせせらぎは吹き続け、その音に、声に、そつと影を潜ませては風に運ばれていた。

エルナシオンにも、やがて夕景が訪れる。

なだらかに続く草原の先に、穏やかな茜の空が広がり、緩やかな風が刹那足を留め、身を包む。

優しい風の子の愛撫に、自然とデーズィアの足も止まる。

まるで音はしなかった。

だが、気付けば少女の足下に、ふわりとシートが広げられている。誰もいない。風も動かない。

だが、次々と食器が現れ、温かく香ばしい食事が並べられていく。朝から一度も食欲を覚えずにいたが、デーズィアは自分がとても空腹である気がして、静かにシートに腰を下ろしていた。

アルにも、四聖神将にも。勿論ピマにも、座る先から食器が用意されていく。

玄武や朱雀が当たり前のように食事を始めているのを見て、アル

もデーズィアも視線を交えると目の前の料理に手を伸ばしていた。

…こんなにも美味しい料理は、初めてだ。

アルだけではない。デーズィアも、そう思う。

食べ進めるだけで、心が穏やかになり、幸福が体の隅々にまで行き渡る。

明るい星が、天蓋を飾り始めている。

温かな風が再び流れ始め、心地好い草葉の囁きがその後を追う。

ぼんやりとした灯りが、シートの周りにだけ取り残されている。

柔らかな夕陽の灯り…

食事を終えると、再び見えない手が片付けていく。

上に何も残っていないことを確認すると、次にはシート自身がその灯りをゆっくりと落とし、明滅を始める。

皆が立ち上がり離れた瞬間、そこには草花だけが微風に揺れていた。

デーズィアとアルは何も言わずに、再びその場に腰を下ろしていた。

語り合う間も無く、眠気が瞼を重くしていく。

…最初に眠りに身を任せたのはデーズィアだった。

ピマも地上で丸くなり、四聖神将も横になる。

アルもまた、デーズィアのすぐ傍で、そっと少女を見守りながら身を横たえていた。

無数の星辰が、天上で瞬き出している。

静寂…だが、それは恐怖をもたらすような無音ではない。

煌き一つ、草の葉一枚が、自らの眩きをそっと静かに風に運ばせる。

愛らしい唇から寝息が零れる頃、彼らの周りに朝と同じく愉快な話し声が現れ始める。

次第に満ちていくその興味に満ちた眩き声が、不意に止まった。

殆ど聞こえない程の微かな悲鳴が一齐に拡がる。

小さな風が周囲の草陰に隠れる中、黙って静かに身を起こしてい

く。

隣で眠る少女を起こさないように、注意深く…アルは、闇の中で立ち上がっていた。

少女の呼吸を確かめる。

…ぐっすりと眠っているようだ。

月がこの世界にあるのかどうかは分からないが、少なくとも、それらしいものは天空には見られない。代わりに鋭い星明りが満天に鏤められている。

その静かな光の下で、鳶色の瞳は赤い短髪をした女性の姿を探し出す。

四聖神将が横になるその中に見つけると、そつと傍へと歩み寄り、アルは黙ったまま彼女を起こそうとした。

手を触れただけで、瞳が開く。

覗き込むアルの姿に一瞬驚いた表情を浮かべたものの、何も言わずに朱雀も立ち上がり、アルの後から歩き出していた。

皆から離れて、少しの間、なだらかな草原を彷徨い歩く。

互いに、何も言わない。

だが、朱雀はじつとその視線を少年の背に向けていた。

やがて、その彼女が囁く。

「ここなら、もう聞こえないわよ」

少年の足が不意に止まる。

それでも暫くは、少年の顔は俯いたままだった。

穏やかに、時間は流れていく。風のように、水のように。緩やかに、留まらず。

この時間が大切なことを、朱雀は分かっていた。

漸く決意したのだらう、振り向くとアルは真っ直ぐに彼女を見て言葉を紡いだ。

「教えてくれ。俺は本当に《影》を追ひ払えるんだらうか。

デーズィアに相応しい人間に、なれるんだらうか」

予想していた問い掛けだ。だが、だからと言ってすぐに応えられ

るものでもない。

朱雀は胸を痛めながら、何も言えずにいた。

確かに、アルは変わっただろう。変わってきているだろう。

だがそれでも、このエルナシオンにそぐう存在にはなっていない。それもまた、事実なのだ。

「俺は…デーズィアが大切だ。

だが、デーズィアに相応しくないのなら…俺はいつか彼女を傷付けることになるかも知れない…」

それが怖いのだ。

唇を強く噛みながら、アルはとうとう顔を背けてしまった。

握り締める拳からは、赤い血の糸が大地まで繋がる。

どうしたらいいのか分からない。

かつてのアルなら、何もかもを壊そうとしていたかも知れない。

だが、今、少年は微かに全身を震わせながら膝を折り、その場でじっと耐え続けていた。

「…所詮、俺は……」

「アル…」

押し出される言葉を遮ると、朱雀は彼の名を呼びその体を強く抱き締めていた。

遅しいこの少年が、今は小さく見える。

朱雀は声を湿らせながら、そのまま囁いていた。

「アル…あなたは、『普通』の人間なの…あなただけが、血に塗れ、汚れているわけではないのよ…」

まず、それを認めてあげて」

アルは、自分が特別だと…デーズィアが特別だと、そう思っている。

だが、妖精からすればそうではない。

「あなたは、デーズィア様と同じ、普通の人間…」

それを知って、初めて、デーズィア様に相応しい存在になれるわ」アルとデーズィアは、同じ普通の人間なのだ。

デーズィアが、特別に純真なのではない。

そのことを認めない限り、アルの心には隙が生じ、《影》を呼び込んでしまうだろう。

腕の中からは、何一つ、聞こえてこない。

…次第に、夜は更けていく。

だが、暗さが、闇が増えていくわけではない。

朱雀は腕の中の温かな存在を抱いたまま、いつまでも優しく語り続けていた…

第五章 終わり

第六章 黄金の力

「ほら、もう朝だぞ、デーズィア」

明るい声が、そつと耳に触れる。

その晴れやかな口調に驚いて、少女は慌てて身を起こすと目の前で微笑むアルを見上げた。

「よく眠れたか？」

「え？ あつ、はい…」

昨日、眠る前に見た彼とは随分と違っている。

素直に戸惑いを表すデーズィアの額を軽く小突くと、少年は片目を瞑ってみせた。

「昨日は悪かったな。心配してくれて、ありがとう」

「うっん！」

大きく、首を横に振る。

同時に、胸の中の痛みが雪のように溶けていく…

「ふみいゝ。あたしの分が無いよー」

少し離れた所からは、悲しむ声が聞こえてくる。

振り向く空色の瞳に映ったのは、夕食の時と同じ、食器が並ぶシートだ。

どうやら、次々と現れる朝食の中に、可愛い妖精の分が含まれていないらしい。

「反省しなさい、ピマ。勾騰だつて怒るわよ」

腰に手を当てて諭す朱雀を、ピマは恨めしそうな目で見上げると口を尖らせていた。

ふと、朱雀の視線の先がアルと重なる。

…二人は、何も言わずに素晴らしい微笑みを一瞬だけ交わしていた。

「ピマ、わたしの分を食べる…？」

デーズィアが取り上げる小皿まで、ピマが素早く飛んでくる。

「やった〜　ありがとう、デーズィア！」

空中に浮かんだまま、大急ぎで口に食べ物詰め込んでいく。他の四聖神将にも小言を言われる前に、少しでも食べておかなくてはそんな愛らしい妖精の姿にアルも笑い声を上げると、彼は自分の皿をデーズィアに回していた。

「ほら。デーズィアはきちんと食べないと倒れてしまうからな」
「でも…」

「俺なら大丈夫だよ。何日も食べずに暮らしたこともあるんだ。一食くらい、平気さ」

彼の面に浮かぶ優しく深い微笑みを見て、思わずデーズィアはアルの首に腕を回していた。

力の限り、強く抱き締める…

「ありがとう、アル…」

恥ずかしそうに、だが、自分の言葉で、きちんと自分の今の想いを告げる。

「ありがとう……」

アルが穢れているなんて、絶対に誰にも言わせない。

自分は、本当の彼を知っているのだから。

そのアルは、何も言わずに、そつと彼女の小さな体を抱き返していた……

「もうすぐだよ！」

ほらっ、あそこに小屋があるでしょ？　見えるう〜？」

遠く、行く手には青く染まった山並が見える。

歩む左右からは、さ緑の葉を繁らせた森が迫り、梢から風が爽やかな音色を届けてくれる。

やがて森の木々が一つに交わろうとする所、そこに丸太を組んだ一軒の小屋が見えてきた。

屋根は苔に青く覆われ、壁には美しい蔦が葉を揺らしている。柔らかな日差しの下、その周囲には小さな野の花がこここで微かに

揺れていた。

「ちよつと待てよ！」

アルが、先に行く妖精に声をかける。

「『創始の緑樹』は何処にあるんだ？ 特別、大きな木も無いじゃないか」

確かに森の中には巨木も見える。砂漠で育った者には珍しいが、もう既にここに来て二日目になるアルでさえ、それが特別なものには見えていなかった。

アルの言葉を、ピマは腰に手を当てると鼻で笑っていた。

「あのね。封印されてるから、見えないんだよ？ 分かったあ？」

軽蔑した言葉を更に続けようとする妖精に対して、朱雀はあらゆる方を見ながら澄まして割り込んでいた。

「あら、昼食にもピマの分は無さそうね」

「うう」

小さな、本当に小さな唇を尖らせると、恨めしそうに朱雀を見たが、ピマはそれ以上何も言わずに小屋に向かって飛び始めた。

近づくにつれ、その愛らしさ、美しさに心奪われる。

砂漠の中の、あの翡翠の小屋とは随分と違う。こちらは、大地と、森と、大気と、光に囲まれ、そつと愛撫を受けている。それぞれの想いがここに集まり、言葉を交わし、笑みを浮かべては応えている。そこは、あらゆるものを受け入れる所。あらゆるものに受け入れられている所。

不意に、小屋の扉が開き始める。

アルとデーズィアは足を止めると、その動きを見守っていた。

背後では四聖神将も控えている。

皆が黙って見つめる中、扉を抜けて純白の衣が明るい光の下へと進み出てきた。

「…え？」

アルが驚きの声を上げる。彼にしては珍しいほどに感情が含まれた声だ。

慌てて、彼は傍らの少女に目を向ける。

間違いない。彼女は、デーズィアはここにいる。

その空色の瞳もまた、驚愕のあまり、瞬きを忘れ見開かれたままだ。

再び小屋へと目を転じる頃には、アルは落着きを取り戻すと同時に瞳を鋭く細めていた。

その、内側から光を放つかのような白い肢体。

豊かに波打つ黄金色の美しい髪。

優しく純真な、その心をそのまま映している空色の瞳。

…頬に浮かぶ柔らかな微笑みまでも、そこに立つ存在はデーズィアにそっくりだったのだ。

全く言葉を失ってしまったデーズィアと、沈黙に身を沈めるアルに近付くと、その少女は深々と頭を下げ、穏やかな声で言った。

「ようこそ、幼艾の国、エルナシオンへ。」

デーズィア様、わたしの名は勾騰。五人目の神将にして、『創始の緑樹』の仮の管理者です」

「あ、え、あの…」

漸く出た言葉も、まるで意味を成してはいない。

そんなデーズィアに向かって、勾騰は笑みを更に深めると続けた。

「わたしは、代々の守り手と同じ姿になって、成長するのです。

子が生まれれば、生まれたばかりの赤子に戻り、何度も何度も繰り返して大人への道を辿り続ける…でも、今日でその長かった道程も終わりです。

デーズィア様、『時』が来たのです」

その言葉が零れた瞬間、アルの耳には大きな翼の羽ばたきが聞こえた気がした。風は生まれず、地表を影が過ぎることもない。だが、間違いない、『何か』がここを通り過ぎた。

刹那、全てが唯一となる。

気が遠くなるような、その心地好さ…だが、それは一瞬よりも更

に短いものだった。

勾騰の美しい声が、心を現実に引き戻す。

「デーズイア様は、最後の封印を解いて、この世界の解放の是非を見極めることになります」

「ちよつと待ってください」

新しい状況だ。

「この世界の解放って、何だ？」

『樹』の『力』の解放は、何かを伴うのだろうか。『力』だけの解放ではないのか。

…そして、それもまた決められた流れなのだろうか。

アルの懸念に、勾騰はその澄んだ瞳に僅かな憐憫を映していた。

「『樹』の『力』は創造の力です。その力を、この地と共に、あなたが来られた世界へと解放するか否かを決めるのです」

この地と共に？

「解放すれば、『創始の緑樹』によって生み出されたこのエルナシオンも、そしてここに住まう妖精や精霊達も、全てが『力』と共にあなたの世界へと顕現します。

そうなれば、『時』は新たな『道』を歩むことになるでしょう」

「…じゃあ、この世界を、解放しなければどうなる？」

「これまで通りの『道』を歩み続け、新たな運命を待つことになりました」

その時、『樹』の『力』はどうなるのか。

『力』は解放しなくてもいいのか。

その決断は、既に定められていたのではないのか。

鷹の鋭い視線を、勾騰はデーズイアと同じ空色の瞳で真っ直ぐに受け止めていた。

……勘違いをしていたのかも知れない。

思い込んでいたのだ。

軍もそうだ。『力』だけを操ることができる、そう思っていた。違うのだ。

扉を開けることで、初めて『力』はあの世界に影響を及ぼす。だが、その扉を抜けて、当然、ピマのような妖精も往き来することは可能だろう。というよりも、それを阻止することはできない。

このエルナシオンが、あの世界へと流入するのだ。扉を通じて、『力』と共に。

結果として、扉は最早扉ではなくなり、世界は唯一つとなる。

『創始の緑樹』の封印は解かれなくてはならない。それは分かる。そこにデーズイアの意志はもはや入り込む余地は無いだろう。

それが、守り手がここに戻ってきた『意味』なのだから。

全ては正常な形に、元あった形に戻される。『創始の緑樹』もかつてそうであったように、再びその『力』でこの幼艾の国を創り、育むことになるだろう。今よりも、一層素晴らしい世界へと。

そう、その『力』。その『力』を、アルやデーズイアがいた世界に解放するのだろうか、それはまだ選択することができる。ただし、その選択は『力』だけでなく、世界の在り方そのものを変えてしまうのだ。

アルはかつて砂舟での朱雀との会話を思い出していた。

彼自身は、まるで『力』に魅力を感じていない。その時、彼は朱雀に言ったのだ。自分なら、その『力』で『創始の緑樹』そのものを失くしてしまう、と。

だが、それはこの世界、エルナシオンそのものを破壊することではないか。

昨日から旅してきた、この世界。あの小生意気な妖精、ピマも存在しなくなってしまうのではないか。

その決断は、アルにさえ難しい。

では、『力』をあの世界へと解放することをやめてしまえばいい。そうすれば、少なくとも、全てはかつてそうだったように、そのままでの状態で保たれる。

問題があるとすれば、既に開かれてしまった、たった一つの扉の始末だろう。

だが、それだけならまだ対処できる。

「アル……」

勾騰の水色の瞳の奥、思考の泉へと深く沈み込んでいたアルは、不安に満ちたデーズィアの声によって引き上げられていた。

彼女自身の『血』が選択すべき内容だが、これは重過ぎる……

四聖神将も、黙り込んでいた。

いや、語ってはならないのだ。自分達の未来、二つの世界の未来について、決める権限を彼ら自身は有していない。

…若しかすると、デーズィアにさえ無いのかも知れないが。

分からない。

何が既に定まっている？

何なら変えられる？

何を選択できる？

誰がそれを求めている？

「…馬鹿馬鹿しい」

小さく呟く。

「え？」

聞き取れず、覗き込んできたデーズィアに、アルは優しい瞳を向けた。

自分を信じればいい。彼女のことだけを考えればいい。

…それだけだ。

今が過去になり、振り返る時が来れば、全ては説明されるかも知れない。

だが、今、この瞬間にはどの選択も未知数だ。例え定められていたとしても、その選択を知らなければ、選ぶ者にとっては未知でし

かない。

なら、選ぶことができる者が、それを選べばいい。
それだけなのだ。

結果は、未来にしか生じない。

なら、全てを未来に委ねればいい。

その未来もまた、新たな決断で選り続けていくものだろう。

「…ねえっ！」

難しい問題は大嫌いなピマが、とうとう我慢できずに叫び始める。
「さつさと『創始の緑樹』を見…」

白虎の腕に捕まりそれ以上は続けられないが、それでも小さな手足はばたつかせている。

そんな妖精の姿に皆が微笑むと、勾騰も頷き、すっとデーズィアに手を差し出していた。

「デーズィア様。これが最後の封印です」

右の掌の上に、銀色の光を放つ小さな球体が浮かび上がる。

デーズィアは一瞬躊躇ったものの、その細い指先を伸ばし、淡く煌く球体にそつと触れた。

「きやつ…」

不意に、胸元から翠の奔流が迸る。

思わず背を反らせた彼女の肩を逞しい腕が支える。

優しく温かなその腕を感じながら、デーズィアはもう一度しっかりと立ち、その瞳を輝く球体に据えた。

翠の乱流が目前に躍る。その中を縫って、彼女は勾騰から銀の球を受け取ると、引き寄せていた。

まるで、何も？ んでいないような気がする。

冷たい？ 軽い？

…そもそも、これは存在しているのだろうか…

美しく整った両の指で、ゆっくりと銀の球を包み込む。

その瞬間、一際ペンダントの光が強まった。

乱れ飛んでいた翠の矢が一つに纏まり、次にはデーズィアの手の

中の球を刺し貫く。

…音にはならない音が、沈黙の儘、辺りに広がる。

翠の矢に貫かれた球は、愛らしい手の中で無数の銀の星に変わると、澄んだ大気へと舞い広がり、風に乗って……

「見て！ 見てえーっ！」

とうとう白虎の束縛から抜け出したピマが、興奮した声で小屋の後ろを指差している。

黙って見守っていた鳶色の瞳は、その小さな指先に従って広い空を見上げた。

この世界の空は、砂漠とは異なり湿り気を帯びている。

その柔らかな青空の奥から、今、何かが滲み出ようとしていた。

青い山々など遙かに見下ろす高さに、緑の滴が浮かび上がる。

目の醒めるような、鮮やかで透明な緑の波が、少しずつ少しずつ、広がりながらその輪郭を強めていく。

風を受けた漣は、やがて一枚一枚のさんざめく緑葉へと変わり、美しい葉擦れの歌が大気に満ちる。

それら枝葉を戴き、小屋など簡単に飲み込んでしまうほどのがっしりとした太い幹がゆっくり姿を顯すと、彼らの前に緑樹が聳え立っていた。

不思議なものだ。まるで威圧感を覚えない。

これほどまでも大きな樹など、砂漠で暮らすアルには想像すらできていなかった。

だが、間違いなく樹であることは認識できる。

地表にうねる根一つにしても、そう…これは生きている。

生きているのだ。

その豊かな命は、優しさと安心、温もりと平和を惜しみなく辺りに与え続けている。

溢れ出し、降り注ぐその『力』。生み出し、育み、慈しむその『力』。

だが、この『力』は…大き過ぎる。

創始と破壊は切り離せるものではない。

鷹の目は、幹の内側を走る凄まじいばかりの『力』を鋭く見据えていた。

これは…この『力』は、危険だ。

「やったあ！ スゴイね、スゴイね、スゴイねーっ！」

錯乱したかのように、ピマが頭上で飛び回っている。実際、あまりに濃厚な生命力の奔流に当てられたのかも知れない。

ピマは勿論、今このエルナシオンに存在している妖精達の多くも、実在としての『創始の緑樹』を見たことは無い。この世界を育む源、母なる『樹』として聞き伝えられてはいても、封印がその姿を隠して以来、あまりにも長い歳月が過ぎたのだ。それは妖精からしても長いものだった。

実際に見る『創始の緑樹』は、想像を絶した『力』の集まりとして、今、ピマの前に存在していた。彼女は自分の中へと流れ込んでくるあまりに大きな温もりに対して、どのように受け止めればいいのか分からなかった。ただただ、その温もり以身を任せ、その流れのままに乱舞することしかできない。

見かねた朱雀が、小さな妖精を引き寄せ、抱き締める。

彼女にとつても、久し振りに目の当たりにする光景だ。この『力』

…その波が心地好い。

「デーズィア様」

呆然としたまま瞬きすら忘れているデーズィアに、勾騰は声を掛けていた。

「これで『樹』は、自らを創った守り手に戻されました。

後は選択が残るだけです。

小屋の中で、その話を詳しく…」

不意に、爆音が轟き、大地が揺れる。

「何？」

振り返った鳶色の瞳は、その鋭い視線の先に一筋の白煙を認めていた。

「大佐、準備が整いました」

その言葉に、口髭を蓄えた男が微かに頷く。

まるで興味が無いかのような振る舞いだ。

黒縁の眼鏡越しに見えるのは、全く感情を映さない冷たい瞳。その視線は遙か遠方に、樹冠だけを地平から覗かせている『樹』を見つめたまま動かなかった。

砂舟の跡を辿ることは造作も無い。

懸念があったとすれば、地下の湖に兵士と砂舟を沈めなくてはならなかった瞬間だけだ。砂舟は当然ながら防水などされていない。だが、支障は無かったようだ。…いや、例えば支障があったとしても、彼自身は心配などしなかっただろう。

草が風に揺れる緑野には、今や数十台の砂舟や砂上バイクが用意されている。

これからの行為が侵略になるのかどうか、相手は国なのか世界なのか、それすら分かつてはいない。

…それも、どちらでもいいことだ。

国王？ 大臣？ 随分と遠いところの話だ。だが勿論、彼自身は引き際を誤ったりはしない。

何れにしても、進めば分かることだろう。

何が真実なのか。何が利用できるのか。何を破壊しなくてはならないのか。

危険であれば、全てを破壊すればいい。ただ、それだけのこと。

『力』とは、使えるからこそ、扱えるからこそ『力』となる。

自身で使えなければ、国でも使えないだろう。国とは、人の能力以上のものではない。社会や国家が人を超えた存在であるかのような感覚は、幻だ。

では、彼は今、国の為にここにいるのだろうか。

周囲の誰もが、そのことに疑問を持っている。

彼は、一体何の為に動いているのか。表情の失せた仮面からは、どんな答えも見出すことができない。

だが、答えは簡単なものだ。彼は、彼自身の為にここにいる。彼自身の為になる国であれば、その国の為に動くだろう。

それは同時にあの白く霞む『樹』の『力』が、彼自身の『力』になるのであれば、それを自らの為に扱いかねない危険性も孕んでいる。

もつとも、本人は危険性だとは当然ながら認識していないのだが。国にとって有効であり、自身にとって危険であれば、彼は引くだけだ。

ただ、それだけのこと。

「この大地とあの樹は傷付けるな」

農務大臣は、この肥沃な大地を望んでいる。

軍は、あの樹を望んでいる。

手に入れるのがどちらでも構わない。或いはそれは自身かも知れない。

「だが、それ以外は何をしても構わん」

見知らぬ存在は確かにいるようだ。だが、それらには今は興味は無い。

静かに紡がれる言葉を受け止めた後、目の前の若い兵士はおずおずと問い掛けていた。

「大佐、あの少女はどういたしましょう」

デーズィアのことだ。

「『血』は生かしておけ」

『力』の使い方が分からない以上、殺してしまうには早過ぎる。必要になることもあるだろう」

自身にとって必要か否か。判断の基準はあまりにも明確だ。

若い兵士にも、それはよく分かったのだろう。自分が今、ここで生きているのはまだ不要とされていないからだけなのだ。

そのことに気が付くと彼は微かに身を震わせ、すぐに一礼して逃げ出してしまった。

やがて、幾つもの影が草原の上を走り始める。風はその音を、すぐさま『創始の緑樹』まで運ぼうと大気の中を滑り出していた。

「アル……」

空色の双眸が怯えに染まる。

デーズィアの疑念を、アルはただ黙って肯定するしかなかった。

この世界に砲撃を加えるものなど、他には考えられない。

振り返り、彼女に声を掛けようとしたアルの頭上から、不意に深みのある重い声が降り注いできた。

「気を付けられよ」

驚いて見上げた先に、青白い巨体が浮かび上がる。半ば透き通るその体の向こう側では、『創始の緑樹』が風に葉を遊ばせていた。

精悍な面が、啞然としているデーズィアを見て頬を緩めている。

優しさに満ちたその微笑みは、だがすぐに真剣な光を宿す瞳を、勾騰へと移して告げた。

「物質界の存在だ。我等も協力しよう」

「風の精霊王……」

この世界、エルナシオンに他の世界の住人が侵略してくることなど、永の年月にわたって無かったことだ。迷い込むことはある。だが、それは侵略とはまるで違う。

四聖神将も戸惑いを隠せない。その横で、アルはまずデーズィアを、そして彼女に似た勾騰を見て落ち着いた声で訊ねていた。

「この世界の入り口を閉ざせるか？　まず、今以上に軍が侵入してくることを防いだ方がいい」

だが、勾騰は慌てて首を横に振っていた。

「駄目です。あなたがこの世界で存在できているのは、その入り口が開いているからです。」

デーズィア様の選択によって扉が閉まれば、あなたはこの世界を

去るか、消滅するしか選択肢は無くなるのです」

「…そうだったのか」

自分の存在は、今開いている入り口を通じて、まだかつての世界と繋がっているのだらう。例外的に、この場に存在できているのだ。それは軍もそうだろう。

…なら、入り口を閉ざして、この世界を封じてしまえば、あの軍は一瞬にして…

当然、その時にはアル自身も瞬時に…

彼の横で、デーズィアは近付く砲撃に怯え、何も考えることができずにいた。

愛らしい体が小刻みに震え出す。

もう、こんな恐怖からは逃れることができたと思っていたのに……その細い肩を、逞しい腕が抱き寄せる。その温もり、その力強さ……思わず力を抜く少女を抱きながら、アルは静かに勾騰に言った。

「勾騰、デーズィアに説明を」

その声に、朱雀が眉を顰める。他の四聖神将もそつと顔を見合わせたが、風の精霊王も見守る中、やがて勾騰は頷き口を開いていた。「二つに一つなのです。」

『幼艾の国』を解放するか、封印するか。

デーズィア様がペンダントに告げるだけです。

『グニル』と告げれば、この世界はデーズィア様が来られた物質界へと解放され、妖精や精霊と共にこの場の争いも引き継がれていくでしょう。『樹』の『力』はあちらの世界でも具現化します。

一方『マール』と告げれば、この地は再び時間軸を超越した世界へと封じられ、全ての入り口は閉じ、物質界とは絶縁します。その時、この世界のものではない存在は、全て消滅します。勿論、その前に去ることも可能ですが…」

「待つて！ わたしは…」

その時、どうなるのだ。一緒に、アルと一緒に去ることができるのか。

勾騰は、厳しい表情で、だが迷わずに告げた。

「デーズィア様はこの『創始の緑樹』の守り手として、この世界に留まっていたただかなくてはなりません。二度と、物質界へ戻ることはありませんし、閉ざされてしまえば逢うこともできないでしょう」
… 勿論、アルと、だ。

「そんな…！」

アルはただ黙っていた。

落ち着かなかったピマでさえ、思わず羽を止めて沈黙している。考えるまでもない。なら、答えは一つだ。そう、絶対に…

… 絶対に、アルと別れたりしない。

「わたしは、エルナシオンを解放します」

デーズィアは、今は震えることも無く、静かに宣言した。

エルナシオンの解放は、つまり『樹』の『力』を求める諸勢力にデーズィアが狙われ続けることを意味している。

生涯、ずっと…そしてそれは、彼女の血を継ぎ、胸のペンダントを継ぐ者にも連綿と続いていく。

… だが、生きている間、逃げ続けなくてはならないとしても、アルとは別れたくないのだ… 絶対に、離れたくないのだ……

「……」

抱き締められているアルが、何事かを呟いている。が、聞き取れない。

「アル…？」

見上げて、鳶色の瞳は短い黒髪に隠れてしまっている。

朱雀も気付いて、玄武や勾騰と視線を交える。そこに浮かぶのは不安の色だ。

アル自身は、暫くしてからもう一度、ゆっくりと唇を動かしていた。

「…冗談じゃない。

どうして、デーズィアだけが、『樹』を、『力』を守らなくちゃならないんだ…？」

どうして、血を継がされたデーズィアだけが、苦しみ続けなくちゃならないんだ…？」

幼く愛らしい唇が、言葉を紡ごうと開きかける。
だが、鋭い視線がそれを押し留めてしまった。

鷹 は、その澄んだ瞳を真っ直ぐに覗き込んでいた。奥へ、奥へと下りていく…

「いいか…デーズィア。」

今すぐ、この世界を閉じてしまおうんだ」

「アル…！」

思いがけない言葉に、デーズィアは悲鳴を上げていた。

「これからも追われ続けるくらいなら。」

この『力』を悪意に使われるくらいなら。

エルナシオンなんて封印してしまえばいい」

アルは、間を置いてから、重く静かな言葉をゆっくりと押し出した。

「もし、解放しようとするなら、俺は、ペンダントを奪ってでも、《鍵》の言葉を告げるぞ」

「そんな…そんな…」

分からない…どうして…

…もう、二度と逢えなくなってしまうのに……

空色の瞳から、涙が溢れ出している。とめどなく流れる美しい煌きを拭いもせず、デーズィアはただただアルの瞳を見つめていた。

アルもただ、真っ直ぐにその瞳を受け止める。

逃げ惑う精霊の気配や妖精の悲鳴が辺りに満ちていく。

散発する砲撃は、特に何かを狙っているわけではないようだ。ただ騒動を楽しむためだけに放たれている。

大地を穿つ噴射音が遠くに聞こえている。もうすぐ、地平の丘陵地に黒い点が幾つも見えてくることだろう。

デーズィアの身代わりである少女が、そっと言葉を投げ掛ける。

「デーズィア様の為に、そうするのですか？」

視線が集まっている。その中には、心配してくれている朱雀のものも。

アルは美しい空から我が身を引き上げると、勾騰に向かって頼に笑みを浮かべてみせた。

「まさか。そうじゃない。」

俺は、俺自身の為に言ってるんだよ」

そう、自分自身の為なのだ。

決断とは、そういうものではないか。

「俺は、デーズィアが悲しむ顔なんて見たくない。

ずっと笑ってくれているデーズィアを見ていたい。

俺は、デーズィアを愛している。そして、デーズィアを愛している一人の人間として、この地を封印しようとしてるのさ」

違う！ 逃げることはなくなっても、逢えなければ、笑うことなどできるはずがない…

違う、違う、違う…！

緩やかな丘を越えて、黒い点が滑ってくる。砂舟だ。

何も言わずに玄武達、四聖神将が走り出す。この地には、守らなくてはならないものがあまりにも多い。

周囲の悲鳴に和して、ピマも錯乱して声を上げている。どうしていいのか分からない。逃げる？ この場を？ そこまで無責任になれない。でも、怖い。あれは、何？

「デーズィア様…」

風の精霊王は落ち着いていた。辺りの喧騒にもまるで動じず、ただ純白に身を包む彼女だけを優しく見守っていた。自分達の未来、それが彼女によって決められる。

…いや。

風の王は、眼光鋭い少年を見遣っていた。

彼が、決めるのかも知れない。

そのアルは、遠くに見える舟の数に軽く舌打ちすると、抱き締め

る腕に力を込め、想いが溢れて何も言えずにいる彼女に囁いていた。
「デーズィア：俺は、本当に相応しい人間にはなれなかったと思う。
だけど、もし、デーズィアの心を苦しめるのでなければ：これを持っていてくれないか」

そう言ってポケットから出してきたものは：覚えている。小さな木の笛だ。

二人して、囚われた部屋で聞いた音色。

恐ろしくも甘い記憶は、だがすぐ傍に落ちた砲弾と、舞い上がる土塊に打ち砕かれてしまった。

アルはまるで気付いていないようだ。ただただデーズィアの瞳を覗き込み、その柔らかな手に笛を滑り込ませる。

「いいかい、デーズィア。」

それが《本当》のものなら：きっと、時間も空間も関係無い。

：もう、悲しむんじゃないぞ」

温かな腕の力が緩み、離れていく。

そのことに、デーズィアは心の底からぞっとしていた。

「アル！」

だが既に、彼は背を向けている。

「アル！ アル！」

飛び出そうとする華奢な身体を、同じ姿の少女が抱き止めていた。

「行かないで！」

どうして、どうして、どうして…

：分らない。どうして……

悲痛な想いが空を切り裂き、その想いの強さに風が身を守る素振りをする。

だが、見慣れた背中では、二度と振り返りはしなかった。

四聖神将が発揮する力の前で、次々と兵士が倒れていく。

ここは彼等の世界だ。存分にその力を行使できる。

怒声よりも悲鳴が飛び散る場へと向かって走りながら、アルは今迄に無いほどその鷲色の瞳を細めていた。

『樹』の麓から迸る思いにも、振り返りはしない。

耐えるまでもない。

戻ってはならない、ただそれだけなのだ。それだけだからこそ、迷いも無い。

デーズィアが普通の…そう、普通の生活を送るには、この世界を閉じるしかない。

彼女は、その「普通」すら奪われてしまったのだ。

デーズィアがそちらを選ばないことは分かっている。

だが、自身が足枷になることで彼女の安寧が奪われることは望まない。

…そう、自分が望まないのだ。

だからこそ、決断ができる。

誰かの為の決断など、本当にはできるものではない。

自分自身のことだからこそ、決断はできるのだ。

…アルは今、死を求めて走り続けていた。

自分が消えてしまえば、デーズィアの迷いも消える。

勿論、犬死など相応しくない。

鷹 は遠くから獲物を探し、その痕跡を探した。

あの男が来ているはずだ。

別の指導者では、ここまでも入り込まないだろう。何しろ、別の世界だ。あまりにも危険すぎる。

だが、彼は違う。引き際も逃げ場も用意してあるだろうが、それでも彼は進み続けるだろう。

あの男だけは、倒しておく方がいい。例えこの世界が閉ざされたとしても、それでも完全な封鎖はあり得ないかも知れない。彼ならそれを探り、見出してしまうかも知れない。

四聖神将は力は勝る。だが、何よりもあの男は人間だ。人間には人間が対峙しなくてはならない。

手許に最早、武器は無い。ナイフすら捨ててしまった。

目の前に転がる死体の山から、必要なものを選ぶかも知れない

が…

「危ないですよ」

不意に、すぐ横から落ち着いた声が聞こえてくる。

黒髪を、真っ直ぐ背に流す女性の声だ。

だがアルは肩を竦めると、なおも走りながら振り向きもせず呟いていた。

「デーズィアのこと、頼むぞ」

無数の銃弾が、目標を失って空を裂く。向かってくる幾つかを視認するよりも早く避けながら、アルは土煙の中へと駆け込んでいた。その背を見送りながら、玄武は小さく頷くと静かに告げた。

「…お約束しましょう。あなたの為に」

デーズィアの為ではない。この世界の為でもない。
決断した者の為に。その為に。

デーズィアの空色の瞳は、沸き起こる土煙にも遮られることなくアルの背中を追い続けた。

白晳の頬には美しい滴が伝い落ちていますが、それを拭いもしない。そもそも、自分が涙を流していることに気付いてもしないのだから。

自分？ 自分とは？

デーズィアの心は、ここになど無い。

追い掛けようと、足を動かもしない。

既に、追い掛けているのだ。追い続けている。アルの背中の、そのすぐ後ろを。

身体など、存在していなかった。「それ」は、残された所で、ぼんやりと立ち尽くしている。

「追いかけることは許されません」

随分と遠くの方で、静かな声が耳の傍を滑る。

「守り手は、最後までこの世界で生きて留まらなくてはなりません」
守り手？ この世界？

何だか、可笑しくなってくる。

デーズィアの面は、知らず微笑みを浮かべていた。
随分と勝手なものだ。

誰が決めたのか。誰が望んだのか。

これが運命だと言うのなら、「わたし」でなくてもいいではないか。誰でもいいではないか。

何故、生まれてきたのだ。何故、生まれなくてはならなかったのだ。

何故、わたしはここにいるのだ。

いや違う。そこにいるのは「わたし」ではない。

「わたし」の姿をした、ただの「鍵」だ。

生きている必要すら、本当は無いではないか。

妖精？ 精霊？ 神？

何かを為したいのなら、自分達ですればいい。

何故、僅かな時間しか生きられず、特別な力も無い人間に役目を押し付ける。

…わたしが「わたし」でありたいと願う、ただ一つの理由。

それはアルだ。

だから「わたし」は追い続ける。

身体は動かない。動けない。動くことを許してくれない。

いいではないか。

「わたし」の視線は、心は追い続ける。逞しい背中、すぐ後ろを。

身体など、必要無い。

この黄金色の光は、心は。

「わたし」だ。

「わたし」だ。

運命よ、弄びたければ弄べばいい。

だが、それは最早わたしではない。

「わたし」は、ここだ。

「わたし」は、ここだ。

勾騰が、ピマが、風の王が、身を震わせる。

穏やかだが、音にもなっていないのだが、広がる言葉に身を切られる。

ゆっくりと歯車が動き始めていた。

見えざるものがその抑えていた手を放し、軋みながら世界が動き始めている。

『樹』が緑葉を翻し、大きくその枝を揺らしていた。

「くっ……」

草間に覗く岩陰を縫って、先へと進む。

火薬の匂い、血肉の臭い。爆音、怒声。苦痛、悲しみ。
絶望。

心が、声が、渦を巻き、柔らかな青草を踏み躪る。

流石のアルも無傷ではられない。素早い行動が阻害される程ではなくとも、そろそろ動きが鈍り始めている。

手には銃もナイフも持っていない。死体から奪うことも考えたが、そのチャンスを生み出すには相手の兵士がまだ多過ぎる。

何者をも傷付けず、ひたすら前進しながらアルは訝っていた。

朱雀や青龍、白虎に玄武の力は強大だ。だが、一向に砂舟の数は減る気配が無い。

…扉はまだ、開いたままなのだ。

本格的に占領を目指し始めている。異世界だろうと異種族だろうと、気にしていないのだ。

感情を失った瞳は、冷たく淡々と一人の男を捜し続けている。

扉の傍に留まっている？ まさか。彼はそんな男ではない。誰かに全てを任せるくらいなら、全てを自分一人で成し遂げる男だ。

またすぐ傍で、爆風が大地を焦がす。

イルタナから贈られた衣服は、いまや無残にも汚れ、引き裂かれていた。

その白さ。その柔らかさ。かつては美しさと安らぎに満ちていたもの……

……いや。だが、その光は消されはしない。

どれほど汚れ、小さな布地と成り果てても、身に着ける者がアル自身である限り、その光は失われたりしない。

転がる地面の、その温もり。優しさ。

彼女自身もまた、見守り続けている。

僅かに身を起こしたアルの眼前で、青草が頭を垂らし道を開く。

一瞬、陽光に鋭い煌きを返すものがあつた。

鷹はその全身に力を漲らせると、獲物を見据えた。

間違いない。大佐だ。

舟の行く手には、小さな岩が見えている。

用意された、ただ一度だけの機会。

それは好意ではない。ただの分岐点だ。

運命は、結果となるまでは唯一のものではない。

だがそれを、それと知る者は少ない。

今のアルには、それをそれと気付くほどの猶予は無かった。

歯車が回り、彼の姿も合わせて滑る。

音も無く、時は彼の姿を岩の上に刻み込む。

刹那、全てが重なり、静止する。

ただ黙って、アルは見事な跳躍と共に、大佐に向かって逞しい腕を伸ばしていた。

「何？」

黒く大きな影が落ちてくる。

慌てる兵士のすぐ横で、大佐は素早く腰に手を伸ばすと短い棒の先端でアルを捉えていた。

同じだ。あの囚われの部屋と同じ。

「くっ……」

いや、違う。今、アルの指はしっかりと大佐の喉頸を捕らえていた。

凄まじい力が大佐の首を締め付ける。

流石に苦しみの表情が口許に浮かぶが、同時に大佐は光を放っていた。

熱線がアルの腹部を貫き、背へと突き抜ける。

（アルー！）

…悲痛な叫び声が聞こえた気がする。

あの時と同じ、熱と痛みに全身が焼かれる。

だが今度は意識を失ったりしない。大佐の行動は予想していたものだ。

歯を食いしばり、渾身の力を指先に籠める。

口から溢れてくるのは、自分で噛み切ったものか、喀血か。全身に渦巻く苦痛もまた、そのままに指先へと伝えていく。

例え意識を失っても、これだけは離すつもりは無い。

愛するデーズィアを、俊足のロムを傷付けた男…

眼鏡越しに、恐怖がその色を瞳に落としたことに気付く。

鷹の鋭い視線は、その更に奥まで食い込んでいった。

静かな双眸は、だが自らの体については気付いていない…

…光は流れ、肉体は今や二分されていた。

怒声が響き、銃声が轟く中、アルの半身は砂舟から滑り落ち、空気の噴射に弄ばれている。

クツ、シャ…

喧騒の最中において、それはあまりにも小さな音だった。

気管が潰れ、首の骨が砕ける音。

…大佐もまた、アルの上半身を引き摺りながら、砂舟から草の上へと滑り落ちていた。

割けた両の腹部から、赤く鮮やかな液体が大地に浸み込んでいく。その命も、その死屍も、大地の女神はそつと愛おしく抱きとめていた…

「アル！」

不意に、空中から悲愴な声が響き渡る。

遅かった。…いや、間に合うはずも無い。彼女に分岐は選べない。

「…う、…うわぁーっ！」

赤い短髪を逆立て、朱雀は激しい憎しみをその面に映すと全身で叫んでいた。

その身を、渦巻く紅蓮の炎が包み込む。

朱と橙が入り乱れる劫火の奥から無数の火球が飛び出し、瞬時に辺り一面を焼き尽くしていた。

…「わたし」は見ていた。

遅しいその背中、すぐ後ろで、全てを見ていた。

瞳を閉じたりはしない。

青々とした草が、豊かな大地が、赤く、鮮やかに染まるところも。

激した朱雀の劫火によって、あらゆるものが燃え尽くされるところも。

…「わたし」はずっと見続けていた。

後にした体は、今もまだ涙を流し、微かな笑みを浮かべていることだろう。

最早、二度と、「それ」が動くことは無い。

…「わたし」は、「ここ」で、「わたし」がしなくてはならないことをする。

(マール…)

…「わたし」は、その言葉に「わたし」の全てを溶かし込み、ゆっくりと押し出し、四方へと広げていった。

大地が、世界が、鳴動を始めている。

…「わたし」は、音も無く、柔らかく伸び行くその言葉の波に乗

って、あらゆるものを貪り、その内側までも侵していく。

残された体の胸元からは、澄んだ翠の矢が迸っている。
聳え立つ『創始の緑樹』もまた、同じ美しい翠の光に包まれている。

「鍵」もまた、その役目を果たせばいい。

…だが、それは「わたし」ではない。

「デーズイア様！」

勾騰が倒れる「鍵」を優しく支えてくれている。

…いや、「わたし」にも触れようとしてくれている。

（ありがとう…）

そうするには、だがもう、「わたし」はあまりにも薄く、細かく、
千々に散ってしまったている……

瞳を湿らせる勾騰の視線の先で、ペンダントの鎖が弾ける。
純白の衣の上を翠の玉は滑り落ち、肥沃な大地へと吸い込まれていく。

小屋の背後で、『樹』がその姿を薄めている。山々や空が、その向こうに透けて見える。

美しい空色の瞳には、だが、もっと多くのものが見えていた。

齒車は急速に、その動きを早めている。

美しい世界、豊かで穏やかなこのエルナシオンの周縁では、今や漆黒の闇が無数の泡となつて生み出されている。

闇？ いや、違う。それは闇ですらない。

沈黙さえも存在しえない、ただの 無 だ。

妖精や精霊達の中で力ある存在も、今では逃げることをやめた。た。

誰もがその場に扉を開け始めている。この世界を捨て、自分たちが存在すべき本来の世界へと戻っていくのだ。

風の精霊王も、多くの乙女を連れて去ってしまった。

愛らしいピマもまた、大急ぎで羽を動かし、近くの扉を抜けている。

…誰もが振り返りもしなかった。

決断した者を恨んだりもしない。

預けられた決断とは、そういうものだ。
後はただ、従うのみ。
それが、決断した者の為なのだ。

やがて、 無 が地平にも見えてくる。

何かが崩れているわけではない。大地は鳴動を続けているが、壊れていくわけではない。

ただそれは、静かに空を染め、草原を滑ってくるだけだ。
覗き込んでも、無論、何も見えない。覗く先が無いのだから当然だ。

だが、それでも、惑う兵士はその先を、奥を探そうとする。

…それは封印ではなかった。

彼らのすぐ頭上で、凄まじい怒りに囚われた朱雀は、今になって
もまだ炎を投げ続けている。
他の神将も容赦はしない。

この世界の為ではない。
運命の為でもない。

決断した者の為だ。

彼らもまた、「ここ」で為すべきことを為す。

……程なく、そんな彼らをも、無 は自らの内腑に飲み込んでいた。

それは、一つの世界の終わり。

世界は、一人の少女によって閉じられる。

世界は、一人の少年によって償われる。

あらゆる業を背負い、優しき者が罰せられる。

自らを供物として捧げた者は、だが神ではない。

地と肉を具えた人間であり、弱さも温もりも、愚かさも慈しみも持った人間だ。

そのことが、勾騰には解せなかった。

彼女もまた、神ではない。

闇が『創始の緑樹』の頂に触れる。

澄んだ翠の光が、減ずることなく切り取られていく。

「鍵」の似姿をした少女は、その体を抱えたまま、大地の上で呟いていた。

柔らかく転がる音色は、既に消えた草花の上を滑り、女神の胸元へと届けられる。

全ての母たる女神もまた、自らが編む敷布の上で指を滑らせていた。

不意に、勾騰の目前で閃光が煌く。
だが、空色の瞳は怯みもしない。

まだ残る、温かく豊かな大地に、今、アルの体が横たわっていた。
傷一つ無い、元の姿のまま。

その体は、二度と動きはしない。
それでも、勾騰は抱えたデーズィアを下ろし、彼の体に触れさせた。

『樹』はその力と共に、無に帰した。

小屋もまた、暗がりへと飲み込まれていく。

空色の瞳は、ただ横たわる二人を前に、そつと穏やかに微笑んでいた。

その容姿もまた、四方から迫る 無 に触れ、消えていこうとしている。

勾騰は気付いていた。黄金色の滴を、翠の揺らめきを。

デーズィアが何故、『樹』と共にあつたのか。

簡単なことだ。彼女の『血』が、その源が、それを創り出したからだ。

無 の波が、勾騰の姿を覆い尽くす。

うねりは更に、美しい黄金色の髪に触れようとした。

その瞬間。

「ア……ル……」

唇が僅かに震え、呼気が押し出されていく。

直後、全てが暗闇に飲み込まれてしまった。

……だが、それは暗闇であり、今では 無 ではなかった。

小さな滴。美しく煌く翠の星。

それは翼を広げるように、そっと 有 を包み込むと、澄んだ光の果実となり……

… 黄金色の音色を放ちながら、後に 無 を残して消えてしまっ
た……

それは、一つの世界の終わり。

体の奥から、ゆつくりと浮かび上がってくる。

指先から、皮膚の上を滑って集まってくる。

碎け、乱れ、薄く、淡く、広がっていたものが、胸元に、喉元に
小さな塊となる。

これは、心？ 意識？ それとも命？

…なんて温かいもの。

黄金色の波に包まれ、ゆらゆらと揺れている。

これは…想い。

これは…わたし。

その小さな珠が転がり始め、美しく調った唇の隙間から零れ落ちる。

「アル……」

その「名」が耳朶にも触れている。

柔らかく満たしてくれていたものが、徐々に遠退いていく。
替わりに、ひんやりとした空気に気付く。

感覚が、漆黒の湖の奥底から引き上げられていく。

同時に、閉じられていた瞳から優しい煌きが流れ出し、白皙な頬を伝い落ちていく。

美妙的な滴は頬を包む黄金色の髪に触れると、冷たい石の表面をそつと転がる。

その輝く真珠を、逞しい指先が拭ってくれる。

その温もり。

その優しさ。

「わたし」が震える。

その震えから、自分の「体」の存在に気付く。
体が、心が、溢れる黄金の光に波打ち、震え出す。

空色の瞳を開き、「デーズィア」は半身を起こしていた。

蒼い薄闇がうつすらと流れ、目の前を霞ませる。
だがそれは、その向こうにある、見慣れた姿を隠してしまうほどのものではない。

限りなく優しい微笑みが待っていてくれる。
見つめてくれている。

「……アル……！」

自分の名が刻まれた石の寝台から身を乗り出し、デーズィアは手

を伸ばしていた。

彼の腕に触れる。

…流れ込んでくる、この温もり、想い……

指を回し、引き寄せる。

生きている。生きている。生きている。

「良かった…全部、…全部、《夢》だったのね……」

喜びのままに、涙がとめどなく溢れてくる。

アルは笑みを深めると、そっと寝台の上のデーズィアに囁いていた。

「さあ…それはどうだろうな」

「え？」

細い肩を抱きながら、アルはデーズィアの左手をゆっくりと広げて見せた。

「…！これは……」

そこには、小さな木の笛がしっかりと握られていた。

微かに身を震わせると、デーズィアはアルを見上げた。

だが、彼は不安を言葉にする間も与えず、愛らしい唇に指を当てると頷いた。

「デーズィア。

でも、《今》は、もう、それは問題じゃないんだよ。

俺も、デーズィアも、こうして生きてるんだから」

静かに告げると、アルは不意にデーズィアに口付けていた。

あまりに突然のことで、空色の瞳が大きく見開かれる。

だが、頬を素晴らしい色に染めながら、やがてデーズィアは瞳を閉じると、大きな背中に腕を回し、力一杯抱き締めていた。

この部屋に時間は存在しない。

どれほどの間、そうしていたのかは分からない。

だがやがて、アルは身を離すと、はにかむデーズィアをそつと寝台から抱き下ろしていた。

「出ようか、デーズィア」

「はい、アル……」

細かな砂が、足裏に心地好い。

蒼い闇には、どんな物音も似合わない。

静かな……あまりにも静かな部屋。

並ぶ、美妙な彫刻で飾られた石の群れ。

その間を縫って、ゆつたりとした足取りで歩む。

優しく、そつと、互いに身を寄せ合いながら。

不安や恐怖など、この部屋の何処にも存在していない。

あるのは……ただ、「生」だけ。

それは、穏やかで、美しく、あらゆるものを飲み込んでしまうものの。

何もかもが、満ち溢れている。

暗がりも、自分達も、静寂も、石の台も、全てが一体となって部屋に充ちている。

溢れ出す喜びを、どうすればいいのだろう。

……歌？

いや、それは沈黙の向こう側で、身の内側で響き渡る言の葉の波。

静寂がこれほど豊かであるとは。
蒼闇がこれほど温かいとは。

大きな扉が見える。
二人の指先が僅かに触れる。

…開かれていく扉の向こう、翠色の光が瞬きながら二人を出迎えてくれている。

何も言わずに、小屋の中を歩いていく。
壁紙から射す翠の光は、何も無い空間を柔らかく照らし出している。

まだ、目覚めたばかり。
生まれるのは、今、これから。

時間が、その流れを思い出し、黄金の川が歌い始めている。
…いや、今はまだ、銀色の煌きの方がより強く時間を支配している。

それは全ての始まり。
翠が喜びに打ち震えている。

アルとデーズィアは、声に出さずに言葉を生み出しながら、小屋の扉を押し開けていた。

澄んだ風が、美しい髪に愛おしく触れる。

若々しい青草に覆われ、目の前にはなだらかな丘陵地が広がっていた。

左右には森の木々が立ち並び、梢の向こうには、白雪を頂く峰々が晴れ渡った蒼穹を背に聳えていた。

素足のまま、大地に、草花に触れながら歩き出す。

その時、風の精霊王が頭上から葉擦れの歌を運んできた。

微風に遊ばれる、爽やかで優しい喜びの声：

誘われるように、鶯色と空色の瞳が天を見上げる。

「…イルタナ…」

光が見える。包まれる。

風に揺れ、光の泡粒が踊っている。

太い幹に、鮮やかな緑葉を纏ったその『樹』は、アルの呟きに妙なる笑い声で応えていた……

それは、一つの世界の始まり。

『砂塵夢想譚』 おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9837u/>

砂塵夢想譚

2011年8月7日13時48分発行